911.135-Mi67-2ウ
1200500755271

始

911.135
Mi67
2
エ7-54

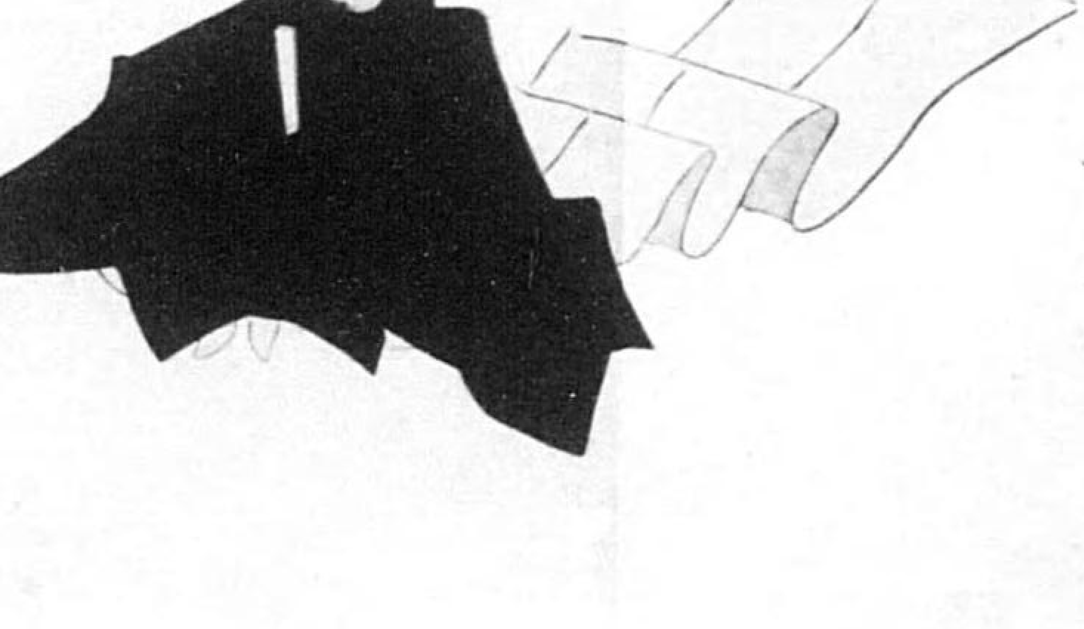
弘前高等學校教授 三浦圭三著

綜合 古今和歌集新講

東京 啓文社出版

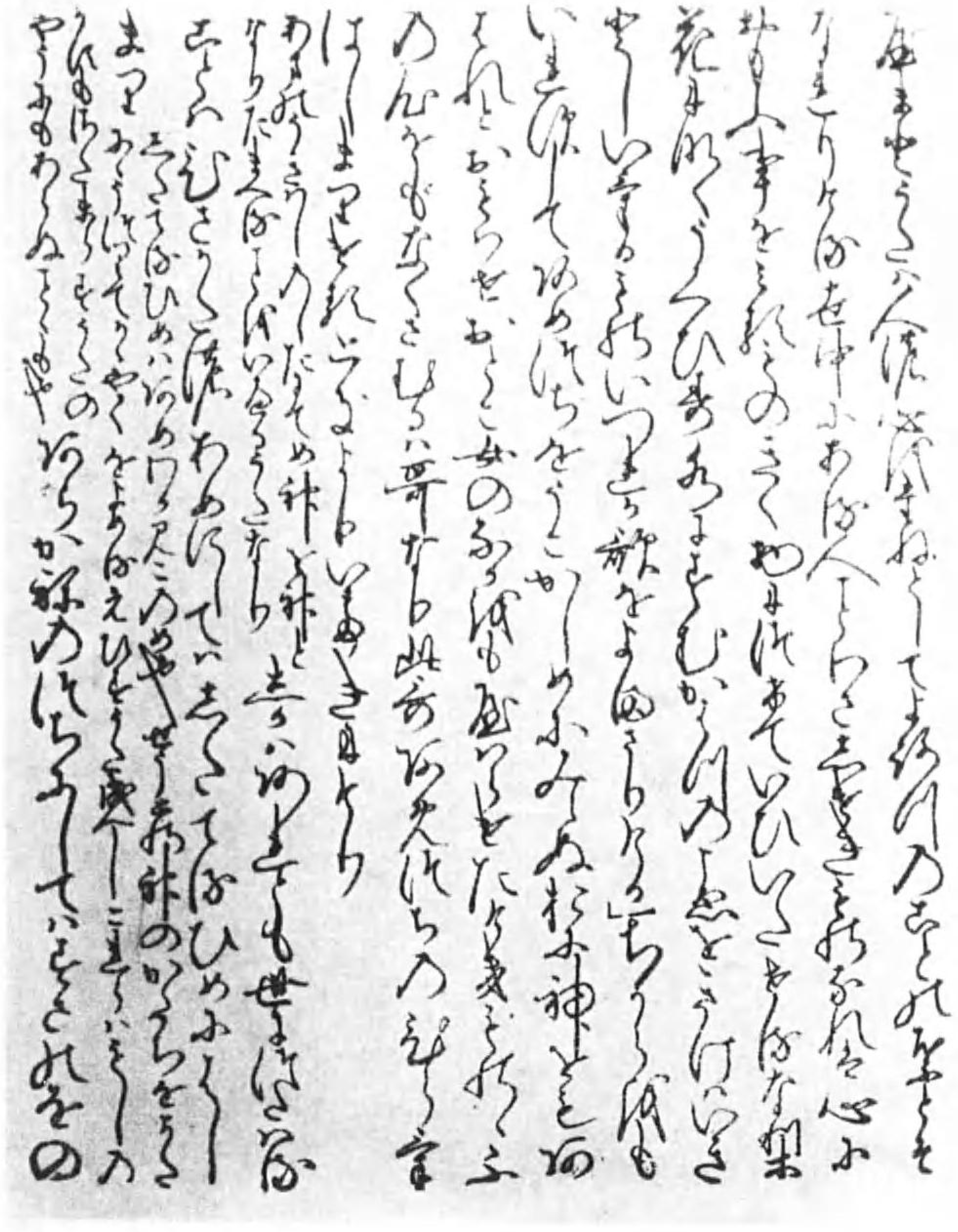
大内記紀貫之
紀文幹子也 玄蕃頭従五位上木工
權頭 童名内教坊阿古久曽と
天慶之比人

さくらちる木の下風ハさむからて
そらにしられぬ雪そふりける



流布本古今和歌集

貞應本系統の木版本で余が年來講義に使つた教科書で本書本文の底本に採つたもの美濃紙型天地二卷に分れて大阪樫園書院の發行に係る餘り善本ではないが何分にも他に木版本で多數供給する處がないので從來使用して居たけれど、此も老人の版工が昨年重患に罹つて以來供給不能となつてしまつた。


やまとうたは人のこゝろをたねとしてよろづのことのはとぞ
なれりける世中にある人ことわざしげきものなれば心に
おもふ事を見るものきくものにつけていひいだせるなり
花になくうぐひすみづにすむかはづのこゑをきけばいきとしいけるもの
いづれかうたをよまざりけるちからをもいれずして
あめつちをうごかしめに見えぬおに神をもあはれと
おもはせをとこ女のなかをもやはらげたけきものゝふ
の心をもなぐさむるは哥なりこの哥あめつちのひらけ
はじまりける時よりいできにけり
あまのうきはしのしたにて女神男神となりたまへることをいへるうたなり

紀貫之筆　古今和歌集高野切一

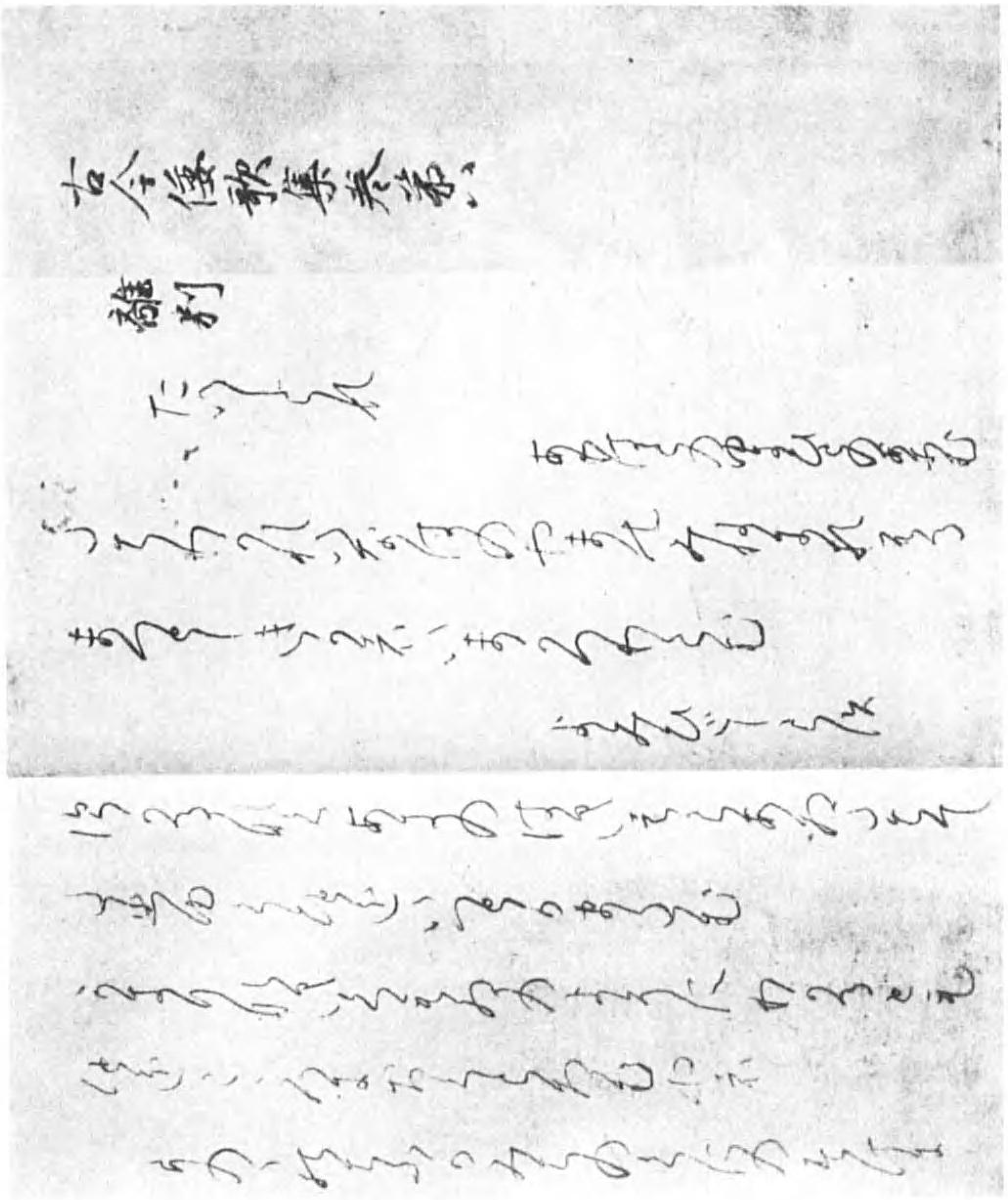
第八　毛利公爵家藏　書苑第五卷第四號複寫

古今和歌集古寫本の斷片にして現存するもの丶、凡て何々切といふ此に左の各種がある。

一	高野切……	第一種　一・九・二〇ノ各卷……	傳貫之筆
		第二種　二・三・五・八ノ各卷	
		第三種　一八・一九ノ各卷	
二	龜山院切	（卷ノ一部）	
三	本阿彌切……………………		
四	筋切	傳佐理筆	
五	通切	同上	
六	久海切	傳紫式部筆	
七	民部卿切	傳俊頼筆	
八	鶴切	傳顯輔筆	
九	内裏切	傳清輔筆	
一〇	顯廣切	傳俊成筆	
一一	御家切	同上	
一二	了佐切	了佐筆	
一三	右衛門切	寂蓮筆	
一四	中山切	兼實筆	
一五	今城切	雅經筆	

（此外に家隆筆の完本がある）

この内貫之の筆と稱せられるものは始めの三種で、その中でも優れたものは高野切、高野切の中でも優れたものは第一種と謂はれて居る。こゝのはその第二種の内第八卷の始め三首と四首目詞書の一部とである。



紀貫之筆　高野切二一

第廿　山内侯爵家蔵　明治書院本複寫

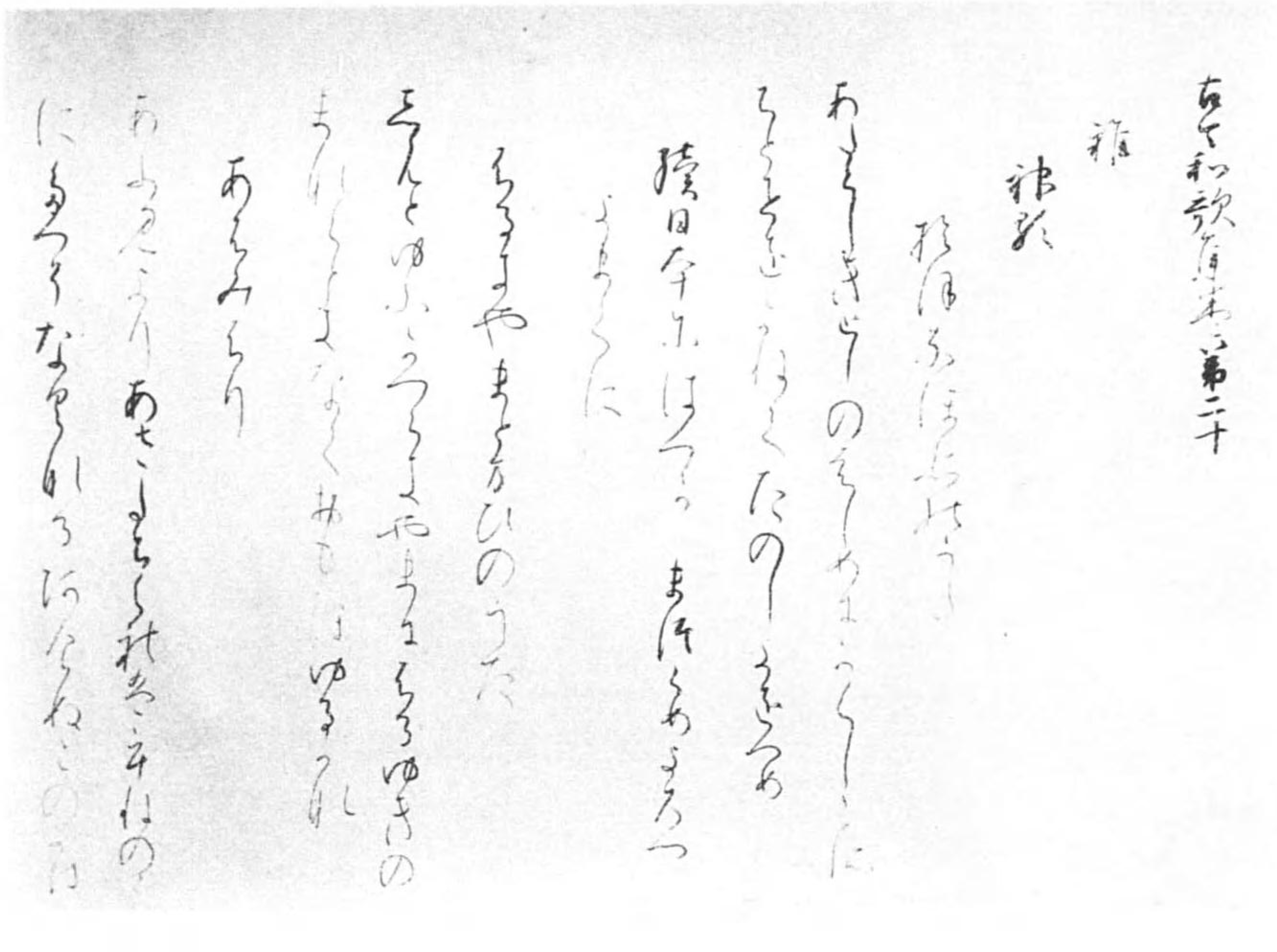
高野切第一種の一つで廿卷全部昨年複刻詳細は之に添へられた尾上博士の解説がある。

紀貫之筆　高野切一

巻廿　山内侯爵家蔵　明治書院本複寫

高野切第一種の一として廿巻全部昨年複刻詳細はこれに

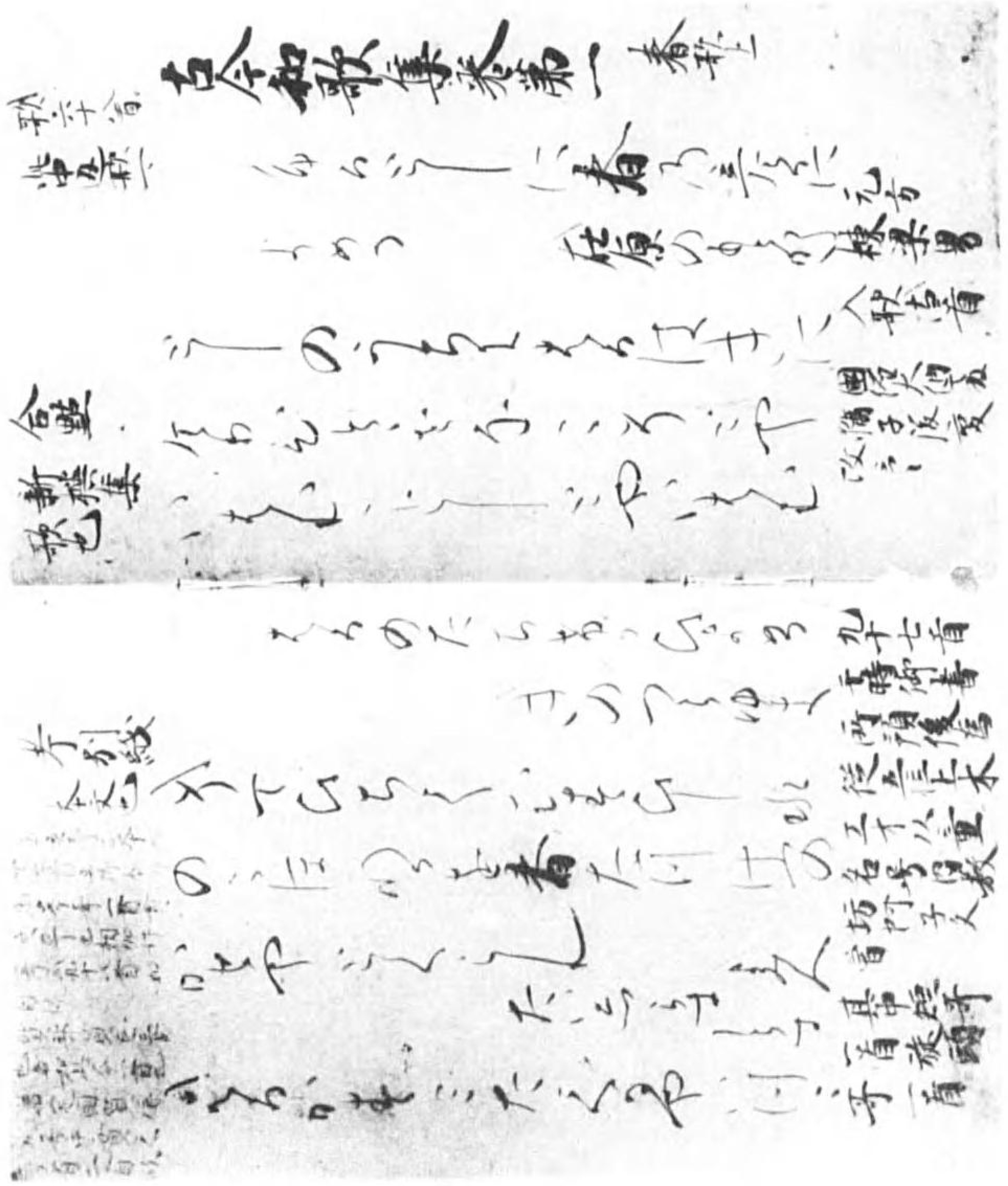
添へられた尾上博士の解説がある。



清輔本古今和歌集

前田侯爵家蔵　尊経閣叢刊

本書對校本として採つたもの詳細は右叢刊解説にあり本文考定上貴重な文献であることは本書十論の中にも述べておいた。


古今和歌集巻第一 春歌上

585-122

尙本書本文の對校本として參照した中「元永本」は、尾上博士の校定脚註して販行せられたものもあり、同博士「歌の草假名」にも委しく紹介せられて居る。

今一つ「三代和歌集校本」は先輩彌富破摩雄先生に恩借したもので、美濃紙半截二つ折型上下二卷屝裏に

此書、古今は道家卿後撰は爲相卿拾遺は光俊卿各自の本を以て原本となし、北村氏の抄亜世に梓行する大本、小本等を合せて讎校し、旁に悉く異同をしるしたれば此一本を見れば三本合せ見るにひとしく、且作者の小傳を卷末に附し假名を訂正したる善本なり　千鍾房發行

とある。この卷頭言は決して誇張でなく實際對校がよく行き屆いてゐて、古版本としては優れた一つだと思ふ。奥に八代集抄の奥書をも轉寫し、次にこの書に「小」として引いて居る小本奥書を轉寫して

小本奥書云八代集爲備證本以數本再三合校合之了

文明第十八三月中旬　杜丹花　在判

とあるから肖柏の校合本をも加味したことがわかる。そして本書の奥書としては

此本因道家公眞跡寫之北村氏八代抄及所板行小大本之異同校書于側

とある。即卷頭言と略同樣である。次に作者名位として作者小傳を附け加へてある。

序

古今和歌集は從來餘り研究されて居ないと思ひます。古人先輩の名著と謂つてもそんなに澤山は無いやうです。それは此書が餘りに有名で又餘りに多くの註解書が出て居る爲めに、一見充分に研究し盡されたかのやうな錯覺が禍したことも一原因でありませう。本書はこの古今集學に向つて私年來の研究を披瀝したものです。

本書の本文は貞應本系統の流布本を底本とし、此に元永本・道家卿本系統の三代集中本集分・前田侯爵家清輔本・傳貫之筆本高野切を對校し、その他諸家の定評あるものをも加味して定めました。そして卷頭十論には本書の文學史的位置を觀、詩歌形態學と修辭學と題材との上から觀て、本書が有する特質を考へ、本書に對する從來群疑の各種問題を研究し、尙又書史と學徒史との一端にも觸れておきました。

本文に入つては各部毎に概說を序に置いて大觀に便し、一首毎に考・釋・譯・評の四欄を設け、考は本文考勘の資料として各種異本の詞形を摘記し、時には卑見をも加へておきました。

釋は本文の語釋・句釋並に修辭上の說明をあげ必要に應じて證歌や類歌をも擧げました。

譯は詞書と歌詞とをなるべく平明な現代口語に譯し、橘守部の土佐日記舟の直路などの形式を

探つて隨時省略句を補つておきました。

評は鑑賞的に作者の作意を推定し、その歌の詩的價値を品隲し、王朝人の情意生活と相交渉する點を考へ、本歌あるものは其出典をあげて之と比較評論し、踏襲あるものは又その派生歌を一々あげて對照し、後世文學作品中其歌を引用したものや情趣の相似たものをもあげ、要するにその一首に就いて空間的には當期文化への繋がりを觀、時間的には生命不斷の流れを觀ようとしたもので不充分ながらこの用意そのものは今後何種の歌集を講說されるにも應用して戴きたいと思つて不遜にも己の欲する處を先づ本書に施した次第であります。

隨て頁數は意外にも增大し、始め些やかな四六判豫定の者は菊判となり、五號活字の者は六號活字となり、五百頁、六百頁と段々筆を呵して二千七百四十七頁になりました。それを如何樣に工夫しても一千九百頁より切詰めやうがないといふので、原文を割愛したり、字詰を工夫したりして、上下分冊して刊行することになりましたが、原稿は已に出來て居るのですから、下卷が皆樣の机側に侍る日も遠からぬことと存じます。

今や我國の文藝復興とも申すべき國文學黃金期に方りまして、古今和歌集も亦大に研究せらるべきだと信じます。希くは微々たるこの拙著が他日斯學隆盛の時期を產み出す一礎石となり、時と富と識見とに於て遙かの長を持たせらるゝ皆樣によつて本書の蒙を啓いて戴いて、鈍才亦斯學の進展に聊か貢献したいものだとひたぶるに努めて居る次第であります。

最後に本書の執筆に當り、私の同僚にして且つ先輩たる彌富教授、私の日頃敬慕して居ます尾上博士及び私の受驗の際に拙い答案を御採點下さいました斯界の權威藤村先生並に前田侯爵家邸內育德財團の方々に向つて特に深甚の謝意を捧げたいと存じます。邊境奉職の私がともかく此だけの研究を纒め得ましたことは、偏に以上の方々の御好意と御援助によるものなることを玆に皆樣に公言しますことに依て一層深く印銘する次第であります。

昭和四年十月二日

著者識

例言

叙述の簡結を圖るために各歌には皆番號をつけました。この番號こそは、論議にも、單語の解にも、類味の比較にも作者の作風考察にも、誠に重寶な見出しだと思ひます。で、此を又他にも應用して引用文は出來る限りは皆様御檢索の便宜を思つて國歌大觀と續國歌大觀の卷數部立番號を一々つけておきました。その他、度々引用する書名も皆略符を用ひました。で、その一覧表をこゝにあげておきます。

三	三代和歌集本	清	清輔本
切山	高野切山内家本	元	元永本
俊	俊成本	筋	筋切
頓	頓阿本（藤村作先生古今和歌集本文）	嘉	嘉禎本
爲	傳爲家筆本	行	傳行成筆本
相	傳爲相筆本	朗	和歌朗詠集
新朗	新撰朗詠集	百	小倉百人一首
兼	兼良本	鄙	尾崎雅嘉古今集鄙言
奥	奥儀抄	密	顯註密勘
九品	和歌九品論議	新撰	新撰和歌

例言

新萬　新撰萬集
打聽　賀茂眞淵古今和歌集打聽
風　古來風體抄
卅六　卅六人撰
古典本　日本古典全集本
勢語　伊勢物語
今昔　今昔物語
羣　群書類從
續國　續國歌大觀
抄　北村季吟八代集抄中の古今集抄
抄イ　同書に一本としてあげるもの
金　金玉集
顯　法橋顯昭古今集註
寛平歌合　寛平御時后宮の歌合の歌
源氏　源氏物語
大和　大和物語
國　國歌大觀

綜合 古今和歌集新講 上卷 目次

古今和歌集十論

第一　文學史的位置……一
第二　「讀人知らず」の歌……一二
第三　六歌仙……一六
第四　四撰家　上……二二
第五　四撰家　下……五四
第六　其他の歌人……七五
第七　形態……七八
一、字餘り……七八
二、切と連續……七九

三、止め……九〇
四、修辭……九四
1、餘情法 2、倒置句法 3、秀句 4、誇張法 5、譬喩法 6、緣語法
7、對照法 8、警句法 9、疊句・疊語・疊音 10、統計 11、索引
イ、接頭語――ロ、接尾語――ハ、枕詞――ニ、序詞

第八 趣味と思想と題材と……一一八

第九 書志と學徒史……一三八
上、年譜……一三八
下、考察……一五四

第十 主要問題……一六五
一、撰進の年次……一六五
二、假名序と眞名序……一七九
三、墨滅歌……一九〇
四、左注・小注・ことばがき……一九三
五、古今傳授……一九九

假名序

古今和歌集序 二〇三頁

卷一――卷六 四季序說……二六七
卷一 春歌上（六十八首）……二七一
一、二、三 立春……二七三
二 春風……二七五
三――九 早春雪……二七七
五・六・一〇・一一・一三――一六 鶯……二八四
一二 春水……二九五
一七 草燒……三〇四
一八――二二 若菜……三〇六
二三 霞……三一七
二四・二五 綠……三一九
二六・二七 柳……三二二
二八・二九 鳥……三二五

三〇・三一 歸雁……三〇八
三二—四八 梅……三二
四九—六八 咲き初めの櫻、盛りの櫻……三五八

卷二 春歌下（六十六首）……三九一

六九—九一 散り方の櫻……三九一
九二—一一八 凡ての花……四二四
一一九・一二〇 藤……四五[illegible]
一二一—一二五 山吹……四六一
一二六 春興……四六七
一二七—一三四 惜春……四六八

卷三 夏歌（三十四首）……四七八

一三五 藤、待時鳥……四七八
一三六 遲櫻……四八二

一三七・一三八、一四〇—一六四 時鳥……四八二
一三九 花橘……四八七
一六五 蓮……五一八
一六六 夏月……五一九
一六七 とこなつ……五二一
一六八 夏のはて……五二三

卷四 秋歌上（八十首）……五二四

一六九—一七二 秋風……五二四
一七三—一八三 天の川……五三二
一八四—一九〇 秋の夜……五四四
一九一—一九五 秋の月……五五二
一九六—二〇五 蟲……五六二
二〇六—二一三 雁……五七二
二一四—二一八 鹿……五八一

二一九―二二四　萩……五九三
二二五　露……六〇三
二二六―二三八　女郎花……六〇四
二三九―二四一　藤袴……六二〇
二四二・二四三　薄……
二四四　なでしこ……六
二四五―二四八　秋草……六二
巻五　秋歌下（六十五首）……六三五
二四九　嵐……六三五
二五〇　秋海……六三九
二五一　ときはの山―紅葉せぬ山水……六四〇
二五二―二六七　紅葉……六四二
二六八―二八〇　菊……六六三
二八一―三〇五　散り方の紅葉……六八七

三〇六・三〇七　露……七一二
三〇八―三一三　行く秋……七一三
巻六　冬歌（二十九首）……七二三
三一四　時雨……七二三
三一五　山里……七二三
三一六　寒月……七二五
三一八―三三三　雪……七二七
三三四―三三七　寒梅……七三五
三三八―三四二　歳暮……七三九
巻七　賀歌（二十二首）……七六六
序説……七六六
三四三―三四六　物に寄する祝……七六八
三四七　僧正遍昭が七十の賀……七七八

三四八　時康親王が御をば君の八十の賀……七八〇
三四九　堀河太政大臣が四十の賀……七八二
三四八　銀の杖……七八〇
三五〇　貞辰親王が御をば君四十の賀……七八四
三五一　二條后が五十の賀……七八五
三五一――三五四、三五七――三六三　屏風繪の歌……七八五
三五二――三五四　本康親王が七十の賀……七八七
三五五　藤原三善が六十の賀……七九一
三五六　良岑經世が四十の賀……七九二
三五七――三六三　泉大將定國が四十の賀……七九三
三六四　當代春宮御降誕……八〇二

卷八　離別歌（四十一首）……八〇四
序説……八〇四
三六五――三九二　訣別……八〇四

三九三――四〇五　一時の別れ……二九三

卷九　羇旅歌（十六首）……八六一
序説……八六一
四〇六――四一六　旅愁……八六一
四一七――四二一　旅興……八九三

卷十　物名歌（四十七首）……九〇四
序説……九〇四
四二二――四六七　物の名詠み込み……九〇八
四三九　折句「をみなへし」……九二二
四六八　「は」をはじめ「る」をはてにてながめをかけて時のうたよめと人のいひければよめる……九四七

合綜　古今和歌集新講　上卷（目次終）

欠

となつてその萬葉の成立を平城天皇の御代と推定してゐるから、これに基くと稱德・光仁・桓武の三朝を飛んだことになるのだが、この「讀人しらず」の歌は撰者の想像してゐるよりも、もつと時代の範圍廣く奈良朝末期・王朝初期の作品もあると思はれるから決局は萬葉直後といふには支障はない譯である。此讀人知らずの歌は、それが秀咏である爲めに自然淘汰に優勝して居殘つたもので、中には純朴裕に萬葉の壘を摩するものがあるその代りに、一方偶然の機會が幸してその爲め人口に膾炙して傳はつたやうなものは、拙劣殆どたゞことに近いものがあつてその持味は丁度雜歌と同じく玉石同架の觀がある。

さて更に他の方面から觀ると、昔人の謂ふが如く王朝文化は唐朝模倣の文化であつて、それは宮城や八省百官の制や平安京の都市制度や服飾や住宅や食品や年中行事のみならず、仔細にしらべて見ると、もつと微細な點にまで唐化の痕を發見することであらう。文學の方でも或意味に於ては漢文學の示唆と影響によつて發生したもの勝で、遊仙窟・長恨歌と源氏物語。日記日錄と土佐日記。李義山の雜纂と枕草子と樣に計へて見ると、歌集も詩集の模倣から來たと觀られる點がないでもない。大同より弘仁・承和にかけて文華秀麗・經國・凌雲の三集が相續いて出た盛況は丁度懷風藻の萬葉に於けるが如き機運を齎んで和歌とても、類別撰集さるべきであるとの氣概が歌人の内からも擡頭すれば、さうした容認は外部にも醞釀して遂に本集の出現となつた。

然るに何れの時代にも對立思想は常に時代思潮に反抗するもので、王朝以來、澎湃として入り來る唐代文化に對しても一部快しとせない反唐化の思潮は細いながら底强く流れてゐた。之を上にしては平城天皇之を下にしては、齋部廣成の如きは世を舉げての唐化に顰縮して、平城天皇は却て舊都の奈良を愛せられ、度々の行幸あらせられ、その附近の風物をも愛せられ御趣味も凡て古典的であつたが爲めに、謚して「平城の帝」と申し奉つたといふ。不幸にして中途藤原藥子の騷ぎがあり、如ふるに御在位纔かに三年御年三十六歲にして御讓位になつたので、それが御治績の上に具現

欠

するまでに至らなかつたが、御退位後の平安の御所も「平城宮」と稱して規模一に舊京に則らせられ、崩御後の御陵も奈良近くに定められたのを思ふと、つまり古典趣味・古典文化に終始せられたみかどと申したい。大同二年二月十三日齋部廣成古語拾遺を撰集した。その主要動機が家門の雪辱に在ることは勿論だが、併し彼も亦建國の本義を忘れた時潮の唐化に傾倒しつゝあることを憤慨したもので「愚臣言サズバ恐ラクハ絶エテ傳フルコト無ラン。幸ニ召問ヲ蒙ツテ蓄憤ヲ攄ハント欲ス」と申した。此天皇あつて此臣下と謂ひたい。次いで仁明天皇の嘉祥二年二月に奈良の興福寺の僧が御四十の賀に絶えて久しい長歌を奉つたが、これは強ち漢詩隆盛の對抗意識からではないまでも、とにかく萬葉の古に復つて一つ古風に奉祝しようではないかといつた意氣込には一脈の古典趣味が流れてゐたと見てよろしからう。加ふるに、唐末亂雜遣唐の事百害あつて一利なき旨を彼地滯留の我僧より建策し、遂に菅原道眞に至つて沙汰止みとなつてからは、唐朝文化の勢力は依然たる中にも次第に日本化し、和魂漢才の合言葉そのものに變りはないにしても、その才も漢才的漢才ではなく和魂的漢才となつた……と同時に、その後から擡頭したものが昌泰延喜の朝に於ける國民自覺の意識であつた。そこで嘗ては婦人にして漢詩を吟ぜられた高津皇女・有智子内親王を見たが今や漢詩人にして和歌を試みる大江千里、菅原道眞の如きを見るやうになつた。撰集といへば漢詩に限ると考へた時代は去つて國風の撰集亦聖代の一文雅たるべしとの風潮これが頂點に達して古今和歌集となつたと見ることも相當根據がある。

次には短歌の勃興と歌人の輩出とである。幾ら歌集を出せといつても盛るべき作品なしにはどうすることも出來ない。然るに王朝に入つては上は天皇より下は一介の微臣、無位無官の士庶人に至るまで、隨分多くの歌人が出た。桓武天皇に菊の御製があり、平城天皇に「ふるさととなりにしならの都」の御製があり、光孝天皇に「若菜」の御製があり、高津皇女に「木にもあらず草にもあらぬ」嘆きがあり、傳教大師に「阿耨多羅三藐三菩提の佛だち我たつ杣に冥加あらせ給へ」(新古今釋教)の立願があり、梵讃から漢讃漢讃から和讃と轉じたその和讃の擬作者には弘法大師もあり、和讃三轉して今樣となり、今樣と相俟つて神樂歌・催馬樂の流行もあり、大歌所は設けられ東舞は倭舞と共にそこの教習科目の中に入つた、凡そこれ等の事象一として短歌の勃興に幸せないものはなかつた。そして數多い此等韻文の中何故に短歌が獨り優勢になつたか？　それは第十九卷の序説に述べたのを參照せられたい。あすこにあげた以外としては和歌が見る文學として重寶であるのに、此には假名の廣通と相提携した氣味も見える。優雅な線でさら〳〵と書きなした王朝の古筆は今見ても鑑賞に値する。あれが云はゞあの頃の和歌が着た服裝なのである。少女に辨慶の黑皮縅が不似合な樣に和歌に顏眞卿流の佶倔な字體は不向である。この節時々に見る此集古寫本の複製を見るとまるで無言の線で一首の節奏を奏でつゝあるかの趣がある。長歌のやうな長い詩形を而かも字劃の多い萬葉假名で書くとなると手間暇が入つてその間に興がさめてしまふ。「折りすぐさぬこと」を極端に好んだ王朝人はくず〳〵まご〳〵することが大の禁物で少々拙くとも「ときをとりへに」などいつて早く返しさへすればそれで大抵はもてはやされた位の時だ。假名の廣通は斯してこの逸早き興趣に適合すると共に表現を容易にもしたし、その字體が女性的なので、あの門から入つて遂に婦人が歌に携はる傾向をも誘致しその又婦人が仲間入するとなると歌合も賑はうし、贈答も繁くなる。假名の廣通といふことがこの短歌の勃興を援けたことは意外に大きかつたと思ふ。

加ふるに年中行事が頻々行はれ、物見遊山の享樂か盛となり、朝賀朝拜白馬の節會とては歌を詠み、除目に漏れたとては歌を詠み、五節句の折々夏冬の賀茂祭・大嘗會の悠紀主基、北山に紅葉を惜み、南都に花をめで、志賀の山越に石清水を掬び、音羽山の朝明に時鳥を興じといつた歌境は次々此時代人々の生活に深い交渉を持つやうになり、朝廷も亦屏風繪の歌や句題、和歌や、寛平の御時后の宮の歌合や、さもないたゞの時には「歌奉れ」と仰せ下されてまで臣下の詠進を興がられた。斯くして短歌は否應なしに勃興せざるを得ない氣運に向つて居たのである。

然しながらいよ〳〵この集を撰ぶことを御下命あらせられたのは醍醐天皇であるから、この延喜聖帝の御治績こそは

此集產出の最も有力なる近因と謂ふべきだ。學者或は說を立てていふ「當時醍醐帝の御年猶若くこの集勅撰の事も實は寬平法皇の御意中から出たものである」と。是確かに尤もと想はれる點はある　已に寬平法皇の御代から（――否、その御父帝光孝の御代からだが）斯壇は急に發展しかけた點からも此法皇が歌に堪能であらせられた點からも御退位後聖迹御巡禮の御名義の下に紀州熊野の里や大和あたりを經めぐられた點からも、そして御退位後尙久しく御健在ましました點からも此說を肯定すべき理由は充分ある。　けれども幾ら御若年とは云へ延喜五年は已に二十三歲におなりになつて居る筈で古は現代より一體に早婚早熟であつた點から推して御年からいへば寧ろかうした、叙情詩的年齡の期に當らせられて居たと見る方が適當であり、天皇御自らも亦和歌を好ませられ斯道に御堪能であらせられたことはその御製が後の勅撰集にも入り又單獨の御集の存在をすら唱へるものがある位である。　尙又延喜元年に三代實錄の撰進がある、これは前代の繼承と見ても延喜七年延喜格の撰進、延喜五年八月勅撰中途時平薨去によつて、同十二年二月更に忠平に御下命あつて延長五年十一月二十六日に完成した延喜式などはどう見ても天皇御親らの御意圖と拜察せられる。（よしや臣下のお勸め申したにせよ）尙想ふに菅公が冤を蒙つて筑紫の配所に流されようとして「流れ行く」の哀訴の一首を法皇に捧げ、法皇は驚いてそれを救はうとして宮城へお越しになつたけれども、藤原菅根等門を固めて妨げたので已むなく引返されたと、この事はとりも直さず舉朝藤原閥の空氣を想はせることは勿論だが、又法皇の現在朝廷に對して政治的にはさほど御容喙にならなかつたことをも想はせる。　院廳政治の頃のやうに宮中のこと一に先帝の御旨に基くといふやうなことはなく、隨つてこの集勅撰の事もよしや事前に御慫慂になり事後には御贊成になつたとしても當初發意的に御計畫になるやうのことはなかつたもので、此は正しく序の文字通り、延喜聖帝の大御旨から出た美擧であつたといふが一妥當であらう。

最後に今一つ自明の原因であつて而かも皆人の閑却し易い大きな導火線がある。曰はく藤原氏の顯榮――

王朝文化の樞軸は所詮は藤原氏によつて支持せられたと觀られる。そして政治史その他の分科史で論ずる所がどうあらうとも藤原氏の歌壇に對する功績は沒すべからざるものがある。大織冠鎌足以來門葉次第にひろごり榮えたこの一家は王朝に入つていよ〳〵その閥を固め、南北京式四家の中、北家殊に優勢で代々の慣用政策は外戚閥を作るに在りその女を入れて后妃とし后妃の腹に出生の皇子を皇太子とし、ついで天皇を戴き己れ外祖父として内外の政權を一手に收めようといふのがそれで、その爲め時に暗鬪顯鬪も演ぜられたが、この目標は終始一貫いつの藤原氏とても變りはなかつた。それが爲めには入内の子女のみめよかれ容貌美かれ髮長かれと祈つたことは勿論身心共に全き理想婦人を養成しなければならぬとあつて、家庭の教育にも用意周到殆ど一家を擧げて之に熱狂した。村上天皇の寵妃宣耀殿の女御芳子が父師尹から始終云ひきかされた「一に手習ひ二に箏の琴三に古今の暗誦」は當時上流女子の必須科目で、單言すればかうした藝術教育こそは當時の最も重きをおかれたものであつたのだ。その爲めには歌に堪能な婦人が家庭教師格で出入をする。そして御入内後も引續き奉仕する。さなくも斯うして養成せられた后妃は宮廷に於ても亦才媛を召して應酬唱和を以て樂しまれるやうになつた。娘に引かされたといふわけではないが藤原氏は代々の人々が皆優れた歌人であつた。今一々例證するまでもなく若しも八代集から藤原氏一族の人々の作を削つたら後はどんなものになるかを想像してもわかる。大鏡に榮華に彼等は華やかな生活の中にも當面する喜怒哀樂の都度きつと哀れ深い歌を咏んで居る。斯して前のおほきおほいまうちぎみ良房が「年ふれば齡は老いぬ」と老境充ち足らうた述懷は外戚政策成功の自足であり、後年の道長が「此世をば我世とぞ思ふ」と咏んだのも亦この種滿悅の最高潮の表現であつた。代々の天皇とても藤原氏の御血統ばかりで概して歌には多大の御趣味があらせられた。否事實大した御趣味がないにしても臣下でいへば親類づきあひといつた風の社交上の必要もあらせられて、后妃や外戚の一族と消息のやりとりに缺くやうなことはおありなさらなかつた。光孝天皇の御踐祚や宇多天皇の御即位を見ると、皇室と藤原氏の密接なのも御尤も

欠

で、その生活様式から行住坐臥の巨細何彼を問はず交渉深かつたことが察せられる。斯して藤原氏は代々多數の歌人を出し、才媛を出し天皇の御趣味をも在廷百官有司の趣味をも咏歌の好尚に導いたもので、太平雍熙外に心を配る必要がなかつた時勢だから、よしや藤原氏でなく外の氏族が政權を執つたとしても、勃興すべき和歌は勃興すると觀るには餘りに獨斷過ぎると思はれる事程藤原氏の歌壇に對する貢献は偉大なものがあつた。正月元日に魚袋の禮歌を父に贈るとて大臣の二郎君ともあらう師輔が態々貫之の家を訪うて歌の代作を乞うた（大鏡・貫之集）といふことは唯「和歌のめいぼく」といふだけでなくどれ程歌人への奬勵になつたことであらう。

要するに古今和歌集含む所の諸味は大要三つの時期に分れて、歌界不斷の流れの中萬葉直後のそれ等を汲みとつたもので、何の飛躍もなく極めて當然の出現だとは想はれるが、之を助成する導火としては一に漢文學漢詩集の先驅二、に反唐化的傾向及びそれの延長と之に伴隨して擡頭した我の自覺、三に短歌の勃興と歌人の輩出（それを助けた有力な一原因は假名の廣通）、四に延喜聖帝の御治世と御趣味、五に藤原氏の貢献などがあつてこれ等の素因數の相乘積を見たのが延喜五年四月十八日、その積は古今和歌集二十卷といふに歸着する。

萬葉・古今・新古今は我が和歌史上三大劃期の歌典であること誰もいふことである。此は丁度支那の詩經と唐詩と明詩に相當するものだといふ人もある。出現の順序と双方詩歌の觸りは丁度似たものもあらうが、その後來に及ぼす影響の大きかつたことは、或は支那の三詩よりも我が三歌集の方が優れて居りはしなからうか？　つまり我邦の和歌史とは三集が互に出頭沒頭して種々樣々な比例で、その時々の歌壇を色つけた又の名に過ぎないとさへ想はれる。わけても古今和歌集は萬葉の朴實に偏せず、新古今の華美に流れず優雅流麗華實兼備の好歌集として代々の勅撰・和歌・個人家集に範を垂れ室町に至つては宗教視せられ神祕視せられた古今が如來なら定家は祖師といふ格にまで持上げられた。

先づ外面的な事といはうなら勅撰歌集の例を開いたことで、後撰以後の二十代集は皆此の追隨である。否明治にな

更に此の集が後世文學作品の隨所に引用せられ、若くは飜案せられてをることは、王朝期の大鏡や枕や源氏は勿論近古の軍記物・紀行・隨筆にも見られ、殊に室町期の謠曲・狂言には主題をこれにとつたものすら出來、引用歌に至つては毎篇一首や二首ないものは少い位である。近世の戯曲にも小説にも、輕文學の狂歌や川柳や狂文までも本集の歌に本づいた作意がある（それ〲解釋の處參照）で古今和歌集の正しき理解なしには純正日本趣味もわからず、又それ以後の國文學の解釋にも差支るまでに遍蔓して居る。それはこの集の撰者達とても「まさきのかづら長く傳はり、鳥の跡久しくとゞまる」といふ期待はあつたであらうが、まさかに此程とは思ひよらなかつたことであらう。

要するに我が和歌史は三つの山があつてその眞中に位するものがこの古今和歌集である。始めの一つは記紀の歌謠や風土記の歌謠から次第に爪先上りとなつて萬葉に聳え、それが王朝初期に次第に低まつてきて仁和・寛平・昌泰・延喜と盛上つて古今集の山が出來て後撰以下の六撰集に漸下して鎌倉初期に至つて、新古今と聳え近古の暗黒の低い谷がつづいて近世になつて始めに古今の山が俤を見せ、次は萬葉、次は古今と新古今綜は又々古今の山と立代り入代り三山の一榮一落そのものであつたと單言することが出來よう。

欠

第二　「讀人知らず」の歌

本集中「讀人知らず」の歌は四百五十五首で、全體に對して約四割を占め、内十九首は左
ある。そしてこの種の歌の多いのは四季（夏をのける）戀（二をのける）雜・俳諧歌・大歌所歌の
くから儀式化したものだから暫らく論外に措く）此に對して「古今集讀人不知考」一名「古今和歌集
ものがあつて、今續群書類從第四百五十三、刊本第十六卷五七四―五八六に収めてある。始めから
らずの歌の初句をあげて、一々作者の名を下に書いてあつて奥に「此一帖はじめて撰出者也努々他見あるべ
中・永正六年三月日、法印堯智」とある。永正六年は紀元二一六九、後柏原の朝で古今傳授の盛行した頃とて恐らくは好事の徒が秘傳の僞作を試みたものであらう。法印が相當の高位の地位なことはわかるが肝腎の堯智がどんな人か、何の所傳もない。随て從來餘り、論内に入れられない書だ。それもその筈、この集成立を去ること六百年の後にこのやうに一目瞭然と作者がわかる程なら、何を苦しんで讀人知らずなどいはう。それともその依據を示しての論定ならばだが、何等基く所をあげないで直に

春上廿四首

春かすみ　　基經　昭宣公是也

と様にある。而かもその次に

雪のうちに　　二條后

とあるなどは全くの蛇足で二條后の作であることは已に本文の詞書に明記されてあるものだ。これと似た蛇足に「君がため春の野に出て」を光孝天皇ともある。「春日野は」をも二條后の作としたのは伊勢物語などからの想ひつきか、若し二條后の御歌とすれば「若草のつまもこもれり」の意味をどうするか？　羇旅歌「都いでてけふみかの原を」聖武天皇としたのは恭仁の宮からの推測か？　此中に「延喜天皇御歌」としたものが澤山ある。延喜は當帝でそれを撰者の知らぬ筈はないのだが、これは御身分を憚つて態と讀人知らずとしたものだともいはれもしようが「さ夜中と夜はふけぬらし」や「あき萩も色つきぬれば」や「たきつ瀬のはやき心を」など若くは躬恒の歌などを何故に匿名にしたか、歌はどこにも障りになるものでもないのに讀人しらずにしたといふその理由が何とも腑におちない。要するに此書は室町時代に本集の讀人しらずの讀人を見立てた心理には興味があるが、眞の作者を定める典據とはならない。左註擬作者はこれに比べると全然無稽の附記ではない。が、これとても全部を肯定する譯にはゆかぬ。（その一々はそれ等歌の解について述べる）殊に八九五の左註などは全く「あらずもがな」の贅言だ。

今始めから讀人知らずの歌をずつと通覧すると古雅素朴にして、理趣なく主張なく渾然として情感の素直に流れ出た佳味も少くない。中にも

一六・一七・一八・一九・六四・六九・一一一・一二一・一三五・一三七・一三九・一七一・一七二・一九一・二八一・二八三・三一七・三一九
三三四・三六六・四一二・五〇一・五一七・五二〇・五四六・六四七・六八九・六九三・六九五・七〇八・七一一・七三九・七四四・八〇〇
八五五・八五六・八九〇・九〇四・九〇五・九〇八・九〇七

などは各その評にもあげるつもりだが、汲めども盡きぬ詩味の情趣を湛へて居ると思ふ。之に反して明らかに時代の新しいものは是貞のみこの歌合のうたとか、寛平の御時后宮の歌合のうたとか詞書から察せられるもので、詞書はなくともその歌調や技巧の上から見て延喜直前の歌態で、しかも大分劣り様だと想ふものは

三〇八・三四〇・三四五・三七五・三七七・四〇二・四〇八・四八三・四八四・四八七・四九五・五〇五・五一五・五三一・五三三・五三七・

五四三・六二一・六三四・六四五・六四九・六六九・六七一・六八三・六九六・六九九・七五四・七五五・~~七六一~~七六六・七六七・七七八・七九八・八一七・八二八・八四四・八八二・八八三・八八六・八九二・八九一・八九三・八九四・八九五・九四〇・九四九・九五八・九七三・九七五・一〇〇一(長歌)一〇〇二・一〇〇三(旋頭歌)等

である。但しこれは余一個の見る所で人によつては又、考への違ふのもあらう。又近體ではあるが歌としては古體(前々に掲げた)にも劣らないものは

六九二・七〇一・七一二・七一三・七一七・七一八・八一一・九四二・九五二・九八八・九九四

などで、さほど秀咏でも無いものが物語や他の散文に引かれて、そのため人口に膾炙してゐるもの(各歌の評では鑑賞的にほめたのもあるが)は

五二二・六三七・六七七・六九四・七三二・七四六・七六一・七九五・八六七

などで、業平の對手の女や深草で隣に居つた人や、たちばなのきよきがしのびの女(六五四)などはその對手によつて時代は推定せられる。又六八七の

飛鳥川ふちはせになる世なりとも早くいひてし人は忘れじ

はその本歌九三三の

世の中は何かつれなる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀨になる

から派生したものだから、少くともこの二首についての新舊は明瞭なり八九九の

かゞみ山いざたちよりてみてゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

は左註の大伴黑主作といふが本當らしいし一九二の

さよなかと夜はふけぬらし雁のきこゆるなへに月わたる見ゆ

は萬葉卷九、献弓削皇子歌三首のその一

佐宵中等夜者深去良斯雁音所聞空月渡見

といふ人麿の作に紛ひないものだ。

玉石同架新古雜然たるものだが、これを通覽すると漢文序に所謂「續萬葉集」として始めに集められた原形は略この讀人しらず歌集に近いものであつたらうと想はれる。

第三　六歌仙

「歌仙」といふことばは何が一番早いかわからない。恐らくは「詩仙」から思ひついたもので此撰集以後公任が三十六歌仙を定める頃までに出來たものか、又は公任が、自己の撰に迎へて貫之の論評した六人を六歌仙といつたものか、とも想ふ。南留別志には六歌仙は古今の序に始まるとあるがこの序には六歌仙と明言した處はどこにもない。歌よみ歌びとなどは早くから例があるが、この序では「かきのもとの人丸なん歌のひじりなりける」「又山のべの赤人といふ人ありうたにあやしくたへなりけり」とある、この「歌のひじり」「歌にあやしく妙なる人」が後に所謂歌仙といふに當る。

僧正遍昭は傳記未詳でその生死年月日すらも區々である。（元亨釋書には寛平二、正、一九寂七十四歳僧綱補任抄には寛平二、正、一〇寂年七十五、三十六人歌仙傳には寛平二、正、一九寂年七十六、目錄には寛平二寂七十歳）だが大體承和・嘉祥・元慶・仁和・寛平を閲歴しその前半生は良岑宗貞として在俗朝仕の時代それについでは出家得道の時代後の半生は學德一世に高き明僧知識として朝野の推すところとなつたらしい。文雅風流はその家の風で父安世も勅を拜して青海波の舞の振附をした位である。彼の歌風は生活と共に多少の搖ぎがあつて青春、壯年の前半期には情熱高い戀歌、出家得道の數年は眞摯熱烈後半生のそれには輕快洒脫の諧謔が見られる。宗貞名前で出てゐるものは本集に九一・八七二・九八五の三首の外續後拾遺十六雜上一一二に

太刀のをにすべきかはを求めけるに監の命婦我許になむあるといひて久しく送らざりければ
あだ人の頼め渡りし染河の色のふかさをみでややみなむ

欠

一年大和石上寺でゆくりなくも美人小町と落合つた。揶揄は女の方から始まつて、小町

岩の上に旅寢をすれば最寒し苔の衣を我にかさなむ

といふ。昔の宗貞なら忽ち意馬心猿の虜となる處だが、今は道心に聊かの揺ぎもなく

世をそむく苔の衣は只一重かさねばうとしいざ二人ねむ

で平然と澄ました。嵯峨野に落馬しては女郎花に戯れ、蓮葉を叱り青柳を珠數つなぎにし、光孝天皇を實家にお泊め申しては庭を秋の野らに仕立てて咏進するなど一として善謔ならざるなしで、殊に彼が人なつかしい様子で、度々人々と行を共にしたり一座したり、來訪を受けたりしたであらうことは、その歌に別れの意のものが多く、而かもその別れを告げるには何がな一趣向をこらして對手を解頤一番しようといふのばかりである。

ひえの舍利　の歸りには

山風に櫻吹きまき亂れなむ花の紛れに君とまるべく　三九四

法皇の御幸をお送り申しては

まといはゞいとも畏し花の山暫しと鳴　かむ鳥の音もがな

同じ時人々との別れをば

夕暮の籬は山と見えななん夜はこえじとやどりとるべく　三九二

志賀山返りの連中が一寸花山寺へ立寄つての歸るさにすら

よそにみて歸らむ人に藤の花這ひまつはれよ枝は折るとも　一一九

併しながら吾人が彼の歌につき飽足りなく思ふことは、折角佛門に歸しながら、なぜにその厭世的人生觀を自家體驗になひまぜて、深刻な人生哀歌を創造しなかつたかといふことで、倘今一つ遺憾なのは彼の歌は出家當時のものに秀咏

欠

多くそれ以後のものは想も浮き調も技巧の末に拘はつて、それがやがて本集纖細の弊を釀成する酵母となつたことである。

彼が歌は遍昭集に三十餘首入つて居てそれは大抵歴代の勅撰に採られたもの（後撰の五・四九・一二三・一一九七・一二三九・一二四一・拾遺の二〇七・二二〇・一〇四三・一〇九八・新古今の七五七・一八一七・續古今の一一三五・玉葉の二〇五六・續後拾遺の六〇四・一一二二　新千載の五七・二五九など）と同じである。

そこで本集の序に「僧正遍昭は歌のさまは得たれどもまこと少し　たとへば繪にかける女を見て徒にその心をうごかすが如し」とあるが、これは此僧正後半期の歌の評としてか若くはこの僧正の輕快洒落の一面を把へた評としては當つて居るが、出家期や前半期の熱烈な咏歌振にはそぐはないと思ふ。

六歌仙の中最も高く評價さるべきものは在原業平である。隨て在來諸家の評傳に略その要を盡されてあると思ふから今は唯心づきの二三をいはう。業平の生死年月日を一四八五―一五四〇、天長二―元慶四・五・二八・五十六歳としたものもあつて自分も嘗てこれを採つたこともあるが、新後拾遺九六七には業平が河原左大臣（寛平七年薨）を弔ふ歌があり、寛平御時后宮歌合に業平の歌がありする處を見るとその卒年はずつと後のことであらう。隨て貫之の六歌仙の排列は遍昭業平康秀迄年代順とし、喜撰と小町は年代不明だから次におき黒主は現代に亘つてゐるから、最後においたものでこれは歌の巧拙順でもなく、地位の高下順でもないと思ふ。

業平の歌態については「天才的な多感の詩人の情熱の奔放をさながらに咏つたもの」といへば盡きて居よう。序の評に「こゝろ餘りありて」といつたのは想の豐けさをいつたもので當つて居るが「詞足らず」と語意の貧弱措辭の不充分を難じたのは自分としては首肯し難い。彼はその詩人的天分によつておのづとあゝした餘情深い歌態をとるやうになつたものと想ふ。

後世彼を以て戀愛至上の生活者とし、若くは反藤原系の慷慨家とし、惟喬親王の厚き同情者とし、八面玲瓏の社交家とするのは何れもその一面を把捉し得た觀方である。宛にはならぬが史籍集覽長祿記に彼が生涯に關係した女を三千三百三十三人とし、その中伊勢物語に表れたものは十二人であるといつて

一　紀在常娘	二　染殿后	三　小町	四　五條の后
五　二條の后	六　紀長谷雄の妹	七　文徳皇女伊勢齋宮	八　筑紫染河女
九　行平女	一〇　大納言登女めづらしの前	一一　周防	一二　伊勢

とあり、近世拾遺物語には情事に實名を避けて皆かくし名で逢つて居たとある。初紅葉又は秋風は二條后、白雲は染殿内侍、初草は業平妹、若紫は有常が女忘草は染殿后、武藏あぶみは四條后、やまぶきは定文女、浮雲は當澄の妹、唐衣は伊勢、千草は小町大抵贈答の歌詞から來て居て、その數の多いことも、女の稱呼も源氏物語の主人公と酷似して居る。そしてこれ等多數の異性に贈つた熱愛の情緒こそは彼の歌集の主要部分を占めるものである。彼は一年親しき供人を連れて東國の旅をし「信濃なる淺間が嶽にたつ煙」を驚き「から衣きつゝ馴れにし妻」を戀ひ「駿河なるうつの山邊のうつゝにも夢にも人にあはぬ」旅愁を味はへ、隅田川原の都鳥、姉齒の松の鄙少女にまで盡きせぬ哀感や熱愛をそそいで居る。世に之を「業平の東下り」といふ。說をなすものはいふ。「彼の東下は藤原氏の專橫を憤りて之を仆す爲めに同志の徒を語らひに下つたものだ」と、然り當時藤氏の橫暴振には朝野共に目を側てて爪彈きしたもので、彼とても人並に憤慨はしたことであらう。よしやこの行旅が同志糾合の運動でないまでも彼が紀氏と相結托する間は藤原氏にとつては油斷のならない一暗流たること宛ら次期の河原左大臣や、菅亟相の如き觀があつたであらうことは確かである。隨て紀氏系の皇子惟喬親王と親しく親王東宮辭退後は花とて月とて、鷹狩とて始終側近に慰め雪降りつもる小野の山莊を伺つては「夢かとぞ思ふ」と悲歌した。にも拘らず彼は一面當時の有力家藤原氏にも秋波を送り基經の算賀

藤原全盛の諷歌・良房への贈獻・哀訴等彼の如才無き社交振を想はせるものもある。だから彼を戀愛至上主義者とし、反藤原系の巨魁とし、惟喬親王の同情者とし、如才なき交際家とすることは或意味に於ては然りと謂ふべく、或意味に於ては凡て然らずとも謂ひ得る。凡てを肯定し凡てを否定し去つた後に殘るものは何か、曰はく一個多感の天才詩人業平である。多感なるが故にその身に觸れる一事一物に對して凡て最高の感激を以て燃え盡さではやまぬ底の熱烈さがどの歌にも見出される。即ちその多感性が戀となつては

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つはもとの身にして　七四七

以下の愛歌となり、友に遇うては

今ぞ知る苦しき物と人待たむ里をばかれずとふべかりける　九六九

近隣の人た向つては

年をへて住みこし里をいでていなばいとゞ深草野とやなりなむ　九七一

肉親の母君に向つては

世の中にさらぬわかれのなくもがな千代もと祈る人の子のため　九〇一

姻戚に向つては

紫の色濃き時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける　八六八

惟喬親王に向つては「あかなくにまだきも月の」「かりくらしたなばたつめに」「忘れては夢かとぞ思ふ」と云ひ自然に對してすらも

世中に絕て櫻のなかりせば春の心はのどけからまし　五三

濡つゝぞしひて折つる藤の花春は今日なし限と思へば　一三三

晴るゝ夜の星か河べの螢かも我住む方の蜑の焚火か

といひ、屏風の繪にすら情熱高く

千早振神代もきかず龍田がはから紅に水くゝるとは　二九四

と叫ぶ。そして臨終の床には

終に行く道とは兼て聞しかど昨日今日とは思はざりしを　八六一

とわびてその詩魂を鎖した。彼こそは詩人らしき詩人、歌人らしき歌人といひたい。勅撰に散見するもの二三時に纖弱浮靡の失あるものもあるが概して高い感激を素描的に咏出して居る。古今集歌人がこの歌風の直系であつたならば少くとも後世非難されるやうな技巧の末に離龍たる歌風に陷らなかつたらうに惜しいことである。現存の業平集に四十餘首を收めてあるが、これも勅撰集に散見するものを集めた故か大抵同じものである

（後撰二二四・二五二・六二九・七二一・八九二・九六八・一〇八四・一一二六・一三五三・二二三二・一二四五・一三五三　拾遺三八一・七二八・一二三四　新古今一〇五・八五一・九〇三・九九四・一〇八〇・一一五一・一四〇八・一四〇九・一五、八・一五八九・一六一四　新勅撰五三八・六三七・六五一・八二三・九四四　續後撰八一六・八三六・八五二・九七八・一二五八　續古今二七〇・九五二・一二七〇・一二九三　新千載一〇一六・一二一四　新後拾遺九六七　玉葉・一〇六六・一二七二・一六〇六　續千載一五四二等　但、後撰の二首は伊勢との贈答で「なかひら」が「なりひら」となつたもの歟）

業平を去つて康秀に就くとまるで眞晝の太陽から暗闇の螢に眼を轉じたやうな思ひがする。傳記不明家系も不明家集も傳はらず、歷代の集に採られた咏も少い。にも拘らず歌仙の一人に數へられたのはなぜか、彼は地位こそ低けれ歌人としては認められて居たものであらうことは、東宮御息所の御前で折から降る春の淡雪を題に一首咏めと仰せられたのでもわかる（八）二四九の「うべ山風」も今日からこそ何の詩味もない拙咏と評し去られようが、あの當時にあつ

てはひどく時代の風尙に當て嵌まつたものであつたに違ひない。貫之評していふ。「ぶんやのやすひでは詞は巧にてそのさま身に負はずいはゞ商人のよききぬ着たらんが如し」とその卽興の才と譬喩や秀句の巧緻なことは成程「詞は巧み」といつても宜しいし、その又餘韻はいつも老境咨嗟であり榮進欣求であり、さもない場合には暗に自分の技巧に得意がる自巳陶醉であるから、商人の美服も適評だと思ふ。けれども余が而かく許する基礎とても充分確固たるものではない。僅かに左の數首の讀後感たるに過ぎない。

本集八・二四九・二五〇・四四五・八四六　　後撰十七雜三の一二四六

時にあはずして身を恨みてこもり侍りける時

白雲のきやどるみれの小松原えだしげゝれや日の光みぬ

口疾きを悅ぶことも、秀句と緣語と譬喩とを絡ませて刺繡のやうな手機用な技巧を悅ぶことも皆凡て古今集歌人の最も重んじた資格で、これが彼の歌仙の列に入つた所以であると共にこの種歌仙の咏歌の中に我が和歌史は萬葉直後より古今直前に進展しつゝあつたこともわかる。

次に喜撰法師と來ては一層わからない。吾々は唯「我庵は」の一首に縋つて云々するより外仕方がない。思ふにこの法師は時代も早く、境遇も隱遁生活であつた爲めに名ばかり喧傳してゐて、その咏は延喜當時にすら傳はつてゐなかつたものであらう。それでこの序にも流石に彼を默殺することは世評の手前も如何なり、さればといつて批評しようにもその材料が無く困つたといふ處それが文章化してあの序文になつたと想はれる。(尙序註參照)

(玉葉二夏四〇〇に
木の間よりもゆるは谷の螢かもいさりに蜑の海へゆくかも
が喜撰の作とあるが此も他人の作だと謂はれて居る)

業平が戀をアルトで歌つたと稍前行して同じく戀をソプラノで歌つた女流歌人は即ち小野小町である。その容姿は優艶妖麗その詞藻は平明の中に高い感激を寓して居る。否な彼女こそは六歌仙中唯一、戀を全人格に生きた歌人と謂つて宜い。貫之は彼女を古の衣通姫の亞流といふ。玉津島に齋かれて和歌三神の一つにかぞへられた衣通姫と等しなみに言はれることは一面彼女の名譽であると共に實は有難迷惑の評である。衣通姫の歌として傳はるものはささがにの歌を外にしては極めて少いのに比べて小町の歌は少くとも百首以上は傳はつて居る。量に於てその通りだが、質に於ても小町の方が大分優れて居る。亞流と謂つたのは「美人で高貴の愛があつて歌を咏んだ」といふ大まかな相似から出たことか次に「あはれなるやうにて强からず謂はゞよき女のなやめる所あるに似たり。强からぬは女の歌なればなるべし」といふ。弱いとは調か、想か、調に於ては成程助辭止め助動詞止め動詞止めが多く

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ　人目つゝむと見るぞ詫びしき
みちのくの玉造り江にこぐ船の　ほにこそ出でれ君を戀ふれど
空を行く月の光を雲井より見でや闇にて世は果てぬべき
いとせめて戀しき時はうば玉の　夜の衣をかへしてぞぬる　五五四
うたゝれに戀しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき　五五三
思ひつゝ寢ればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを　五五二
千早振神も見まさば立騷ぎ天の戸川の樋口あけ玉へ
我のみや世を鶯となきわびて　人の心の花と散りなば
山里はさを鹿の音にさよふけて　我が片戀をあかしぬるかな
露のいのちはかなきものを朝夕に　いきたる限り逢ひ見てしかな

色見えでうつろふものは世の中の　人の心の花にぞありける　七九七

花の色はうつりにけりな徒に我身世にふる眺めせしまに　一一三

わびぬれば身をうきくさのれを絕えて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ　九三八

など彼女の代表作は皆それで、單にその止め詞のみならず全體の歌調そのものが柳にとまる春の蝶といつたやうにあえかになよ〳〵として居る。そしてその想には限りなき思慕と情熱と痛根と悲戀と自愍とを慟哭して居る。で「あはれなるやうにて强からず」はこの點に於て適評である。が、一轉してその着想を見るに彼女の貞操觀は嚴霜烈日凛として侵すべからざる强さが線太く咏ひ出されてある。

ともすれば仇なる風にさゞなみの靡くてふごとわれ靡けとや

みるめなき我身を浦と知らればや　かれなで蜑の足たゆくくる　六二三

結びきといひけるものを結び松　いかでか君にとけて見ゆべき

時には藤原氏の迫害に柳眉を逆立てて

物をこそいはねの松も思ふらめ　千代ふる末も傾きにけり

時には形式も體言に止めて

いつとても戀しからぬはなけれども　あやしかりけり秋の夕暮　五四六

で「弱い」といふことは着想については當らないものがある。のみならず全體この評は歌を評しやうとして知らず識らず美人小町の人物評にそれたかの觀がある。現傳の小町集百十三首は怪しいものだと云はれて居る。成程この集に無くて勅撰に入る（六歌仙の中小町のに限つて最後の新續古今に至るまで各集大抵數首採られて居る）ものに、

後撰一一九六　新古今八、哀傷七五八

題しらず

哀なりわが身のはてやあさ綠つひには野べの霞と思へば

同五〇・一四〇四　新勅撰六九三・六五四・一三〇二　續後撰九八九　續古今一一九六・一一九七・十五　戀五の一三三九

題しらず

人心わが身の秋になればこそうき言の葉の茂く散るらめ

同五八五　風雅の一二二一　新千載一一五六　新拾遺五秋下四六四

題しらず

妻戀ふる小男鹿の音に小夜更けて身の類なら有りと知ぬる

（小町集下句「我片戀を明しかれつる」とあるは拙い）

などがあるし、終の他本十一首又他本五首に本集中讀人知らずの歌も大分ある。（否本集の中にも同様のがある）併しこの集には勅撰に洩れた咏も四十首許あるからこの集とても從來評せられたやうに無價値なものではない。

最後の黒主に至つては當代大嘗會の屛風繪の歌を召された位だから、田舍住まひこそして居れ、斯道の閱歷は貫之などよりは古い。今ならばその古いといふだけで相當敬意も表されたであらうが當時新進名家の貫之は忌憚なく彼を俎上に載せて居る。彼には家集もないから今通覽の便宜の爲め勅撰集に散見するものを集錄すると

古今集二、春下八八

題しらず

一、春雨のふるは涙かさくら花ちるを惜しまぬ人しなければ

同十四　戀四の七三五

人を忍びにあひしりてあひかたく有ければその家のあたりをまかりありきけるをりにかりのなくをきゝてよみてつかはしける

二、思出て戀しき時ははつかりの鳴てわたると人しるらめや

同二十　大歌所御歌一〇八六

今上の御への近江のうた

三、あふみのや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君が千とせは

後撰十戀二の六七一

四、白浪のよするゝ磯まをこぐ舟の舵とりあへぬ戀もするかな

同十一　戀三の七六九

題しらず

五　玉津島深き入江をこぐ舟のうきたる戀も我はするかな

同十五　雜一の一一〇

志賀の辛崎にてはらへしける人のしもづかへに「みる」といふ侍りけり。大伴の黒主そこにまできて、かの「みる」に心をつけて、いひ戯ぶれけり、はらへはてて車より黒主に物かづけける、其裳のこしにかきつけて「みる」に送り侍ける。

六、何せむにへだのみるめを思ひけむ沖つ玉もを潜く身にして

拾遺七　物名四〇四と四〇五　つぐみ

七、わが心怪しく仇に春くればはなにつくみと爭でなりけむ

八、咲く花に思付くみの味氣なさ身に疾病のいるもしらずて

續後拾遺十　賀六二六

仁和の御時大嘗會の悠紀方の伊勢國の風俗の歌

九、伊勢の海の渚を清み住む鶴の千とせの聲を君に聞かせむ

新千載十六　雜上一六五五

亭子院石山に詣でさせ給へりける日、近江國のつかさ打出の濱に御まうけつかうまつりたりけるを、たゞに過ぎなむとせさせ給うければ詠める

一〇、さゞら波ひまなく岸を洗ふなり渚清くばきてもみよとや

（大日本史・大和物語には「さゞら波まもなく岸を洗ふめり渚清くば君とまれとか」）

此外本集、八九九には左註擬作者として「鏡山いざたちよりて」といふがある。序に曰はく「大伴のくろぬしはことばをかしくてそのさまいやし」と、若もこの「ことば」を立意とか趣向とかの意にとるならこの評の通り上掲の各咏何れも逸興に富んで居るからこの評は當つてをるが、立意趣向は寧ろ想の方面にいふことである。では詞の續け方の巧みなのを指したものか、それなら二の歌の如きこの集のよき意味に於ける代表的なものである。それと六七八のやうな咏みぶりをさして貫之が斯う評したとすれば彼の評としては一應尤もと肯づかれる。けれども黒主の序歌の使ひ方は全然萬葉と同じく二・四・五・九を見ればわかる通り、古今集歌人のやうな疊音（後にいふ）で下につゞくものは一つもない。それに一〇の如きも實景と實感とで立意したもので古今集のやうに詞の技巧で仕立てたものではない。僅かに十首ではあるが、こゝにも萬葉直後と古今直前の歌態が見出される。（黒主と聞くと吾々は謠曲の草子洗小町や戲曲の小野道風青柳硯を想ひ出し何となく腹黒い人のやうな先入見があるが事實はさうではない。十訓抄には彼の律義さを傳へ大和物語には彼の名譽を傳へ　後世黒ぬしの明神とまで祟められて居る。黒主といひ黒人といひ白女といひ赤人といひ、青玉・黄文王等原色を名にした古人の名も異様に思はれる）次に「そのさまいやし」との評は少し酷ではあるまいか。彼の歌には康秀のやうな愚痴も自

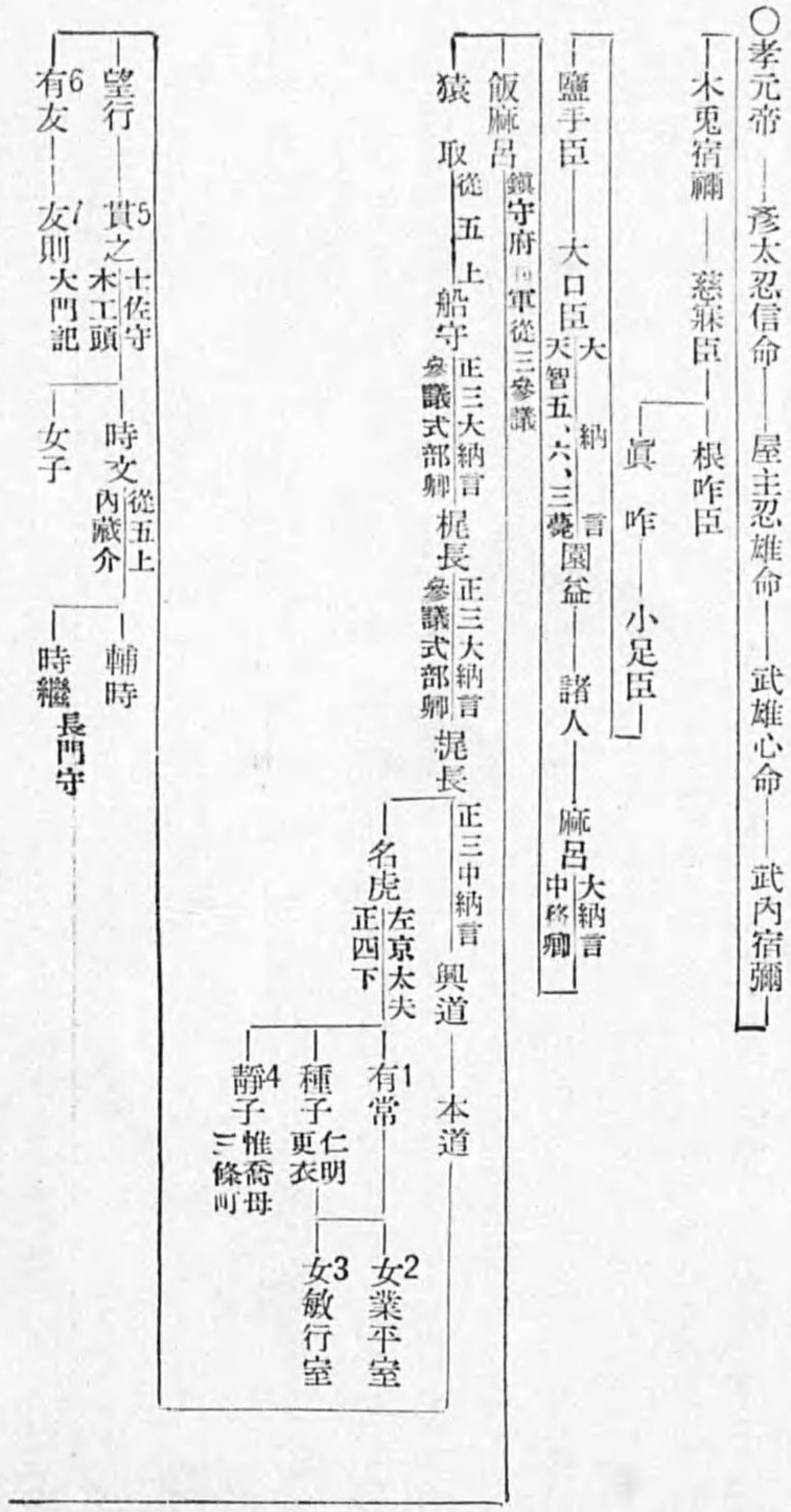
愍もなく、趣味的にも道德的にも氣品の卑しいと思はれるものはない。（貫之はよく志賀の山越をして「花の下蔭に憩ふ賤山がつ」を見馴れてゐたので黑主出自の國に聯想附會してこんな評を下したものではなからうか、但しこれは唯無稽の想像である）

以上六歌仙を通覽して歌人としての優劣順にいふと業平・遍昭・小町・黑主・康秀・喜撰といふが至當で、その歌風の古今に近いものから順位をつけると康秀・黑主・遍昭・喜撰・小町・業平ではなからうか、何にしても此五六の人が「讀人知らず」から「古今集」への過渡をつなぐ歌態を比較的よく代表してをる。（尤も他にこの六人に比すべき名流のあることは後に云はう）

第四　四撰家上

一　紀貫之

一、文學に惠まれたる一族　事の順序として有觸れたものだが略系をあげると



古佐美（征夷将軍正三 大納言）
麻呂名（正五下）―眞人―國守―貞範―長谷雄（遣唐使式部大 従二、中納言文章博士）―淑望（従四下 信濃守）

（貫之の父を文幹とした、古今集序註、羅山先生文集等の說は採らず）

武邊に古佐美將軍のやうなのもあるが、大體文學に緣故深い一族で父望行の官は藏人に至り、和歌を以て稱せられたとあるし、一の有常は惟喬親王に代つて業平と贈答もしその咏み口も平凡ではなかつた。その長女は六歌仙の隨一業平に嫁ぎ、その二女は此も喜撰と取替へて歌仙に入れても可い程優れた咏を遺した藤原敏行の室となつた。四の靜子は三條の町といふ名で屛風繪の歌に女性的な優婉なものを留め、六の有友もその作本集に僅かしか入つてないが、可なり澤山の咏草があつたであらうことは、その死後惟喬親王から集を見せよと御沙汰があつた位、七の友則は貫之よりも年輩で、共にこの集の撰者であり、八の淑望はその咏も本集に採られその作といはれる漢文序も名高い。貫之の子の時文は梨壺五人の一人として後撰集の撰に與り、貫之の女は土佐から歸京の垂髫兒時代から秀咏があつて、紅梅の内侍の才名を馳せた。又淑望の父長谷雄は一代の漢學者漢詩人として世に鳴つた。このやうに擧族文學の天分豐かな血の流れてゐる中に產まれた貫之は已に遺傳的に文藝に惠まれた人であつた。

二、貫之の生ひ立ち　處で、とかく昔の偉人や文豪の傳記は不明勝なもので、この貫之も生死年月日すら明らかでない。從來普通には元慶六年（一五四二）に生れて天慶九年（一六〇六）六十五歲を以て逝くとあつたが、香川景樹が否定して、「若しこの通りなら逆算すると古今集を撰んだ延喜五年（一五六五）には貫之は廿三歲といふ未だしき齡だし、これはまだ可いとして今一つ「寛平の御時后宮歌合」といふのを假に寛平五年とすると、貫之はわづか八九才の幼年で、それがこの歌合に參加して立派な歌を咏むことはあるまじきことだ。で、自分は撰集當時彼の年齡を四十五六歲と推定し、亡くなつたのは八十五歲内外だと想ふ」と云つたのは稍合理的に推したものであらう。伴信友の假字本末には空海寂後卅三年即ち承和二年（一四九五）に生れたとあるが、そしておいて一方元慶九年歿とすると百十一歲となり、撰集は七十歲となる。然るに貫之はこの四人の撰者の中では少壯の意氣を以て新進を氣負うて起つた人だといふのだから、これも信ぜられない。今一つ「月の刈藻」（古事類苑文學部より引く）といふには元慶八年（一五四四）二月十一日に生れて、元慶九年十一月十三日に逝くと月日まで明記してあるが、若し之を採ると撰は廿一歲歿は六十三歲となる。けれどもこれは何も根據が示されてないし、前掲景樹の說とてもその依據は單なる臆測に過ぎないから、同じ推測ならばまことしきものをと思つて、今は富士谷御杖の土佐日記燈に元慶九年卒七十九歲とあるのに從つておいた。此から逆算すると撰集當時は卅八歲となり、生れたのは貞觀十年（一五二八）となる。卽ち清和・陽成・光孝・宇多・醍醐・朱雀・村上と七代の御代を閱歷し

貞觀一〇―一八　元慶八　仁和四　寛平九　昌泰三　延喜二二　延長八　承平七　天慶九

の中、寛平以後を文歷歌歷に入れれば丁度餘他關係の事象とも一致すると思ふ。

さて貫之といふ名は論語の「予一以貫之」といふ聖語から來たものだといふ。（同じ聖語でも今日ならば「貫一」とつけるのが多い）俗說には始め實定といつたが宮中で頭をかしげた拍子に過つて冠をおとしたので、左右大臣から「たゞでは濟まされぬから、歌を一首よめ」とあるに

けふよりは紀の貫之とめさるべし紀の實定が冠おとせり

と咏んで赦された。實も定もウ冠をとつて貫之（疋に近い）としたものだといふ（謠曲拾葉抄引用雨夜物語）或は又貫之は

長谷の觀世音の申し兒だといふ。（季吟の説）貫之が幼時より少年青年の時代にかけてどういふ生活をしたものか、今考證の資料を缺いてゐるから何とも斷定出來ないが、後年土佐日記を書いて隨所に漢土の故事を引いたことや新撰和歌の序を作つたことを見ると、彼も亦漢詩漢文に堪能であつたことがわかるが、それにもまして萬葉集や此節人々の口に喧傳する和歌に趣味を覺えたものと見える。家學は漢學であり、當時一般仕官の登龍門は文章生であつたに拘らず・彼がこの徑路を採らなかつたのを見ると、寧ろ早くから家學に對しては左傾してゐたものなので、それが幸にも歌道勃興の機運に際會し、畏きあたりに召され義に遺傳的に惠まれた兒は、今亦環境の惠を受けて彌が上にもその歌才を發揮したものと想はれる。

三、閲歴・歌歴　承香殿の東、御書所に召された歌人は何れも斯道にゆりたる大家であつた。彼はその間に伍して寧ろ一座の首腦として古歌を蒐集した。その得意想ふべしだが、それだけに責任も重く苦心も一通でなかつたことは一〇〇二の長歌に「大宮にのみ、久かたの、ひるよるわかず、つかふとて、かへりみもせぬ、わがやどの、忍ぶ草生ふる」をも顧る暇がなかつたとあるのにも察せられる。風雅四夏三三〇に

延喜の御時古今集撰び始められけるに、夜更くるまで御前にさぶらふに時鳥の鳴きければ
こと夏は如何なきけむ郭公今宵ばかりはあらじとぞ聞く

と印銘深い述懷がある。（此歌詞大鏡・貫之集等記載の書により少しづつちがつて居る）

古今和歌集廿卷の勅撰は、實に前代未聞の快擧であり後葉不朽の盛典であることは、皆人共にいふ通りである。又貫之自身の口吻を借りていへば「これは君も臣も趣味を共にせられた」ものであらう。唯夫れ延喜朝廷は果して彼の後世文學史家の謂ふが如く國風に目さめ、歌道に目さめ、日本趣味に目さめられたかどうか、此は聊か疑問だと思ふ。此より前延喜元年には三代實錄も撰ばれたが、撰に與つたものは藤原時平・菅原道眞（中途左遷）といふやうな歴々であつた。又此後には延喜五年に延喜式をも撰ばれた。撰者の顔觸は

左大臣正二位兼行左近衞大將皇太子傅臣藤原朝臣忠平。
大納言正三位兼行民部卿臣藤原朝臣淸貫。
從四位上行神祇伯臣大中臣朝臣安則。
從五位上行勘解由次官兼大外記紀伊權介臣伴宿彌久永。
外從五位下行左大史臣阿刀宿彌忠行。

等ある、肩書の恐ろしく長い儼しいものだ。此に比べて古今集撰者の肩書の微々たることよ・御書所は宮中の圖書を藏する所だがあまり振はない司で、後には圖書寮に合併せられた。それも別當ではなく二等官の預となると官位相當表にもない位だが、まあ八位相當位なものであらう。躬恒は前甲斐目とあるが目は國司の五等官でこれとても微々たるものだ。忠岑の右衞門府生に至つては等外の屬官であり、中で友則の大内記が稍上だが、それも六位相當で延喜式撰者の最下の人にも及ばない。斯うした微賤の者を撰者にして別に大臣級親王級の總裁も監修もおかれなかつた處を見ると、延喜朝廷では矢張在來慣習の眼で「マアノ\あれ位のものにさせておけば可い」との考からでなかつたらうか？　それとも歌才は別才だからその方の天才をよりすぐつたのだといふのならば、特にこの撰者に拔擢する爲めに榮進させて然るべきではないか。若又さうした暇もなかつたとならば、せめてこの大事業が完成して愈々撰進した時を俟つてそれ等四人の官位をずつと引上げられるべきであらう。然るに延喜六七八年頃の四人の肩書を見るに、別に大した飛躍もなく極めて牛歩的な榮えのない昇等振を示して居る。當の貫之は間もなく延喜六年二月越前權少掾に任ぜられた、これは八位相當で、稍ましなものが七位を贏ち得る程度の地位だ。躬恒は延喜七年正月十三日に丹波權大目となつた、甲斐と丹波と比べると都近くといふだけの發展である。忠岑は撰後御厨子所出仕・定外膳部・を經て攝津權

大目とある。攝津は國級は上だが權大目といふのだからこれも大した地位ではない。友則は不幸にして撰半ばにして物故した(?)から大内記が出世の頂である。かう事々しく官位ばかりを喋々するもをかしいが、併し當時の朝廷で三代實錄と古今集と延喜式とこの三つの撰にどう輕重をつけたかを觀るにはこの種の考察が一番捷徑だと思つたからである。けれども貫之は幸にからだも健康を持ち續けてその出發が卑位微官であつた爲めに、大した榮達は出來なかつたものの、漸を追うて少しづゝ昇進してをる、即ちその後の官歷は

延喜七、二、二七	内膳典膳	延喜一〇、二、	少内記
同　一三、四、	大内記	同　一七、正、七	從五位下
同　一七、正、	加賀介	同　一八、二、	美濃介
延長元、六、	大監物	延長七、九、	右京亮
同　八、正、	土佐守	天慶三、三、	玄蕃頭
天慶六、正、七、	從五位上	同　八、三、	木工權頭　從四位下

となつて居る。或は云ふ、彼も亦終生天才不遇の歎きに逝いたと、本集中

見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり　二九七

も自分を北山の紅葉に顯榮順境の徒を都大路の花に比して「夜の錦」と嗟いたものだといひ

わがせこが衣はるさめふる每に野邊の綠ぞ色まさりける　二五

といふをすら、宮廷歌を召すを機として、我が妻の述懷を裝うて六位の縹色も褪めはてた境をば暗に哀訴したものだといふ。なる程彼の數多い歌の中には身の蹉跎をはかなんだ述懷も見えてゐて、後撰三春下一三五に

やよひにうるふ月ある年つかさめしのころ申文に添へて左大臣の家につかはしける

餘りさへ有りて行くべき年だにもはるに必逢ふ由もがな

とある。左大臣は之に好意の返しをして居る。同十六雜二の一一七七に

題しらず

世の中はうき物なれや人事のとにもかくにも聞え苦しき

拾遺十七雜秋一一五五

霜枯に見えこし梅は咲きにけり春には我身あはむとはすや

同隣の三統元夏からの歌の答として一一五七

梅も皆春近しとて咲く物を待つ時もなきわれや何なる

家集卷九に「つかさ給はらで歎く頃おほき大い殿の物書かせ給へる奥に詠みてかける

思ふ事心にあるをありとのみ賴める君に爭で知せむ

徒に世にふるものと高砂の松も我をや友と見るらむ」

これ等を見ると、彼とても世路難・行路難はあつたらうとは想ふが、そは寧ろ一般慣習の思想と自家謙遜の禮儀との混融した社交的會話の代用とも見るべく、衷心自分一個の不遇に詫びたことはなかつたと觀るのが至當であらう。政治的には大した發展は無かつたが、文壇的には、彼にとつてはこの古今集の撰進こそは劃期的な大飛躍であつたと思しく、これを境として以後の彼はいつも名譽の歌人として宮廷の御用は勿論當時の富貴顯榮、若くは新進の誰彼となく歌といへば先づ貫之の處へ持つて來るやうになつた。英の桂冠詩人に加ふるに民衆詩宗とも謂ふべき彼はその方で心窃に慰める點があつたらう。(尤之には例の古朴簡淨と遊絲連綿をとり交ぜたやうな草書や假名の能筆も關聯して居る)乃ち

一、延喜五年二月には泉大將四十の算賀の屛風繪に夏と冬

二、同六年月次の御屏風八帖が御料の四十五首
三、同十年十月十四日女八宮陽成院の一のみこの四十の賀つかうまつる時の屏風
四、同十三年十月十四日尙侍の四十賀の御屏風
五、同十四年十二月女四宮の御屏風の料の歌十五首
六、同十五年齋院の御屏風
七、同年九月廿二日右大將の御六十賀淸和の七宮の催された時の屏風
八、同年十二月保忠の左大辨の、左大臣の北の方五十の賀を奉られる時の屏風
九、同十六年齋院の御屏風六首
一〇、同十七年八月宣旨によつて三十首
一一、同十八年二月女四宮のみこの御かみあげの屏風
一二、同年四月東宮の御屏風
一三、同十九年同十六首
一四、延長四年八月廿四日淸貫の民部卿の六十賀恒佐中納言の北の方が催した時の屏風
一五、延長四年九月廿四日法皇御六十の賀を京極御息所が催された時の屏風に十一首
一六、延長六年中宮の御屏風に四首
一七、承平五年十二月内裏御屏風
一八、承平六年春左大臣家の障子
一九、同　　左衞門督の屏風
二〇、同七年右大臣家の屏風

二一　同八年八條の右大將木院の北の方の七十の賀の屏風
二二、天慶　年四月右大將の屏風に二十首
二三、同　　年七月右衞門督の屏風に十五首
二四、同四年七月右大將家の屏風に十二首
二五、同五年亭子院の御屏風の料に二十一首
二六、同年四月内侍の屏風に十二首
二七、同　年九月内裏の御屏風に五首
二八、同八年二月内の御屏風の料二十首
（御屏風に、屏風には貫之が自ら作り自ら書いたと想はれるもの屏風の料・御屏風の料は貫之が歌だけを詠んだ筆者は他にあつたと想はれるもの）

などはその主なもので、此外にも個人的に臨時に詠を乞ふものが澤山あつたことであらう。これだけ文勳があれば相當酬いられて然るべきであつたらうに、延長八年には土佐の守に　ぜられた。國守といへば聞えは宜いが、土佐といへばその頃では單に一邊陬の未開國でお負けに罪人遠流の候補地とまでなつてゐたので、彼は内心甚だ平かならぬものがあつたといふ。それの眞僞は別として彼はこの遠國に在任して俗務に鞅掌する側にも尙時のみかど（醍醐）から命を拜してゐた自分一個の見識を以てする撰集の手入を怠らなかつた。足かけ五年の在任は隨分わびしかつたらう、わけてもその間に最愛の女兒を亡くした哀しみはいとゞ深刻でもあつたらう。にも拘らず地方民の徵税賦課や、海賊取締や尙且つ有力者との交際には可なりの敏腕をも揮へば、又如才のない常識をも運用して、治績の見るべきものも多かつたと見えて承平四年任解けて歸京の際に於ける官民惜別の情は非常に厚かつた。歸京途次の旅日記、これが即ち土佐

日記で、國文の翹祖・紀行文の嚆矢として文學史上特筆稱讃せられるものである。歸來完成の撰集を奉つて之が第二の勅撰集になる筈だつたのに、此より前延長八年九月廿九日に天皇崩御の爲め空しくお流れとなつたが、貫之の歌風を研究する側面資料としては有力な參考にもなり、又當時の秀詠を見るにも究竟の撰である。今新撰和歌と題して群木などに入つて居るのがそれである。

彼は素性などに比べては探勝の旅行をするなどのことは、ずつと少かつた、一つは實社會に即した生活境遇からでもあつたらう。越前・加賀・美濃・土佐は任地關係でよく知つてゐた（それにしてはその地方の風物の味が少い）紀州を旅したことは蟻通明神の歌話に遺り、長谷へ度々參つたことは「人はいさ」やその他の傳說で有名なことなり、大三輪へも參拜したといふし、和泉國廳在任の形績は忠房との贈答に知られてをり、羇旅の哥にはあづまへも行つたとある。彼の接觸範圍は上は上皇・天皇・皇族・攝關・大臣より下は士庶人、一地方民に至るまで可なり彈力性があつたが、家集や勅撰集に散見する範圍で、詠進・贈答・慶弔・代詠などの交渉あるものは、清原深養父・壬生忠岑・中務・中納言兼輔・藤原雅正・左大臣時平・右大臣恒佐・北の宮・藤原敦忠・小野宮右大臣・右大臣源光・藤原利貞・清愼公の實賴・源公忠・三統元夏・三條尙侍・藤原忠房・紀友則・素性・三條右大臣・麗景殿の女御・躬恒等でこの內友則は從兄でもあり、撰者の同人でもありしたが彼よりも早く亡くなつたのでその哀傷歌がある。素性の寂を哀しんだものもある。躬恒とは殊に親しかつたと見えて本集並に家集にも躬恒集にもその交情を忍ばせる歌がある。又上流で彼の愛護者となつて居たのは太政大臣忠平父子で、承平五年歸京後第一着に訪うたのも忠平邸で、彼のお供をして白河行をした歌もあり、忠平の子の師輔からは魚袋の禮歌の代作を賴まれたし、師輔の弟の實資の男子の元服女子の裳着にも歌の用をつとめ、師輔の二男兼通が祖父忠平を訪うて、貰つた引出物の禮歌も彼が賴まれて代作した。彼と戀愛關係のあつた婦人も家集によると四五人はあつたやうで、「思ひかね妹がりゆけば」の名歌は机上題詠の空想ではないと想ふ。

彼の終焉は委しく知るに由なしだが家集十に

「世の中心細くおぼえ常のこゝちせられざりければ源公忠朝臣の許に」

贈つた旨を詞書して

手に掬ぶ水にやどれる月影のあるかなきかの世にぞありける

とあり、左註には、公忠がこの報に驚いて往つて見ると早や亡くなつてゐたので、驚き哀しんで、この歌の返しの詠草諸共、亡骸を愛宕で荼毘にしたとある。けれども彼には相當遺族や近親があつた筈で、いくら親しくとも他人の公忠に骨を拾つて貰はねばならぬやうな、みじめな晩年であつたとは想はれない。この左註は虛傳だと思ふ。唯この歌が絕詠であつたといふことは本當であらう。貫之の墓は扶桑拾葉集・本朝諸墓一覽などにも見えて居るが、明治元年九月十八日景樹の高足渡忠秋が師翁の遺志をついで、貫之の趾を尋ねて參拜したといふ比叡山內、無動寺の總山淨明寺山と金藏院山の山境字十三割里俗に所謂キノツラといふ所にあるのが確かで、同十一月に忠秋の建てた高さ二尺五寸幅六寸厚さ六寸の碑がある筈だ。（この事は鳥野幸次氏の校註土佐日記卷末にも載つてゐるが好古叢纂一、二の米山宗臣氏の紀氏攷に、委しく出て居る）碑の表には

木工頭紀貫之朝臣之墳

裏には

是貫之朝臣之古墳也明治元年秋九月十有八日登山以弔千載之遺蹟景仰之餘與大僧都完洞大和尙定靜俱謀建石以表焉別有勘文刻于世

しかし其勘文の方は石には彫られなかつたが、その文によると師翁景樹が熱心に貫之の趾を尋ね、洛陽堀川の西、猪猥の東一條大路の南にある福大明神といふがその祭神貫之と聽いて、之を修繕したこともあり終焉遺言の主なる一つも

「貫之の遺跡を尋ねてくれよ」と我子景恒と高弟忠秋とに委囑して瞑目した位であつたが、その嗣子の景恒も早く世を去つたので今一方の自分忠秋がこの重大なる責任を果たし得た譯だとある。道に執するあまり古への歌聖を景仰したこの顚末は貫之の傳と共に語り傳ふべき美譚であらう。ついで明治十八年十月九日には矢張この忠秋の努力で、貫之筆で土佐國松山寺に傳へた「月」の一字をそのまゝに模刻して「月の碑」といふのを右の墓所に建てた。越えて明治卅七年四月十八日古今撰進一千年に相當するといふので、畏きあたりでは、態々御歌所長官故高崎男爵を遣はし「いよ〳〵これが本當の墳墓に相違ないこと」をお確かめの上、勅使御差遣從二位追贈の旨を御告げになつた。聖恩枯骨を潤ほし千載の英靈もさこそ地下に感泣拜謝したことであらう……と同時に、古今集學徒の共に厚く感佩すべき有がたきお沙汰であつた。貫之がこゝに香夢を閉ぢてより以來主なる參拜者は三條內大臣實隆・木下長嘯子（これは分らぬなりで歸つたとある）渡忠秋・高崎男爵・須川信行（忠秋の高弟で宮中御歌所寄人）などである。

四、歌態　彼が六歌仙の何ものなるかを論ずる處はやがて彼の歌態が何ものなるかを說く所以である。人は他人を批評するつもりで可い氣に喋々することによつて自己をさらけ出すのである。山柿二聖の情を採つたまだその上に遍昭の歌のさま業平の情思豐富康秀の興趣小町の優婉黑主の逸趣此等衆美を鍾めたものが、貫之の目標とする歌態であつたことは謂ふまでもない。殊に業平は彼の遠緣にも當り、伊勢物語が含む傳說の流布する時代でもあり旁々この天才歌人に私淑する點が多かつたであらうことは、土佐の歸りに二ケ處まで業平を想ひ出した記事を見てもわかる。貫之の詠に情思さながらの表現とも謂ふべき裸體詩の少いことは從來衆評の一致する處だが、併しさうした業平的の詠歌は全然無い譯ではない。後撰九戀一の五〇九

忍びたりける人に物語し侍りけるを人の騷がしく侍りければ罷り歸りて遣はしける

曉と何かいひけむ別るればよひもいとこそ佗しかりけれ

同十一戀三の七四四

やむことなきことによりて遠き所にまかりてたゞむ月ばかりになむ歸るべきといひてまかりくだりて道よりつかはしける

月かへて君をば見むと云しかど日だに隔てず戀しき物を

拾遺二　夏一六九

延喜の御時月次の御屛風に

あふ坂の關の淸水にかげ見えていまや引く覽望月の駒

同〇四　冬二一七

「しぐれし侍りける日」

かき暮らししぐるゝ空を詠めつゝ思ひ社やれ神なびの森

同二二四

「題しらず」

思ひかね妹がり行けば冬の夜の川風寒みちどり鳴くなり

（此は殊に有名なもので、後の俚謠にまでも「川風寒く千鳥鳴く」など踏襲がある）

新古今一　春上八一

「亭子院の歌合に」

我心春の山邊にあくがれてなが〳〵し日を今日も暮しつ

同九　離別八五七

みちの國に下り侍りける人に裝束おくるとてよみ侍りける
玉ほこの道の山風寒からば形見がてらにきなむとぞ思ふ

同八六一

「みちの國に下り侍りける人に」
見てだにも飽かぬ心を玉鉾の道のおくまで人の行くらむ

續古今十六　哀傷一四八九

「世のはかなきを思ひてよめる」
うけれ共いけるは侍もある物を死ぬる身のみぞ悲しかりける

續後拾遺八　離別五四七

「信濃へ下る人に餞すとて詠める」
（先方は紀淑望であらう）
君が行く所と聞けば月見つゝをばすて山ぞ戀しかるべき

風雅十三　戀四の一二一七

「題　し　ら　ず」
歸るかり我が言傳てよ草枕たびはいもこそ戀しかりけれ

本集にも「櫻花さきにけらしも五九」など斯樣の秀咏が多いことはそれ〳〵の解釋にいふ通りである。けれども貫之の歌にはいつも理知を含んで、何がな一理窟捏ねてかゝらねば歌にはならないといつた風に見える。感情の殿堂は知識の扉を開いてからといつたやうなものが多數であることは、從來先輩の評せられた通である。已に前揭の例歌にすらも純然たる直覺詩とはいへないものがある。鶯はなぜ嬾げになくか？　それは花がないからだ（一二八）時鳥をきくと戀心をそそるのはなぜか？　あれは人まつ山に啼いてゐるから（一六一）女郎花が早くもうつろうたなぜにさう早く凋むのか？　誰も飽いても居ないのに（二三二）菊の花がうつろうたのはなぜか？　それは植ゑかへて宿が變つたから色も變つたのだ（二八〇）と次々見てゆくとこの種の着想が一番多い。けれども貫之が斯うした作風になつた動機には尤もな點もある。彼が作歌の栞とした唯一の萬葉には無技巧の直覺詩が非常に多くてそれ等大抵は素朴純眞の愛誦すべきものがあること、萬葉推奬の歌學者でなくとも一般人の認める處であつて、事實その通りには相違ない。けれども事實そのまゝ直覺そのまゝの呈露といふことが詩歌の唯一能事ではない。詩といひ歌といひそれが藝術である以上、何等かの藝術的作爲なしには詩歌は成立たない。吾々は歌集を見て如何に多くの無技巧のたゞこと歌を見ることであらう。萬葉の四千幾百首言々凡て金玉と謂ふわけにはゆかぬ。試に萬葉卷一を開くと

中皇命往二于紀伊溫泉一之時御歌
一一、わがせこはかりほつくらす草無くば小松が下の草をからされ
一二、わがほりし野島はみせつ底深きあこねの下の草をからされ

はよし鑑賞の想をめぐらすとも結局は日常些事の對話以上のものではない

中大兄近江宮御宇天皇三山歌の反歌
かぐやまと耳梨山とあひし時立ちて見にこしいなみ國原

も後世めではやすのは歌として本質的に眺めたものでなく多くは傳說の興味をよしとするのである。

越二勢能山一時阿閉皇女御作歌
三五、これやこのやまとにしてはわがこふるきぢにありとふ名に負ふせの山

「ハハアこれがあの「せの山」といふのか」といふ一瞥の感以上何も殘らぬたゞことに過ぎない。かうした歌の數々を見、顧みて興言利巧滔々風をなす當時の中上流の生活に想到した彼は、こゝに何等か一節ある歌をと思ひついたものに相違ない。そこで彼の歌にはいつも當時にあつては氣のきいた趣向を含んだものが多くなつた。

後撰二十　賀一三八六

十二月ばかりにかうぶりする所にて

祝ふ事ありと成べし今日なれど年の此方に春は來にけり

「今日はまだ春ではないけれども、こゝのめでたさはまるで春のやうだ」と悅び「それは春が心あつてこの家にだけ特に祝ふ事があるといふので訪づれて來たものかと想ふ」と無心の春に向つて善意の解釋を下す處、之が趣向といふものでその結果は滿座が手を拍つて「成程こりや面白い」「思ひつきが宜い」「イヤ御趣向で」などと褒める。かう立意するにはどうしても理窟ぬきには出來ない譯で、それを否定するとなつては、歌は——少くとも貫之の歌は大部分削られねばならない。

玉葉十六　雜三の二一八

「題しらず」

雨とのみ吹く松風は聞ゆれど聲には人もぬれずぞ有ける

集一

屛風繪水無月祓

御禊する河の瀨みれば唐衣ひも夕暮に波ぞ立ちける

同

十二月佛名

年の內に積れる罪は搔暮らしふる白雪と共に消えなむ

同

月夜に衣うつ處

唐衣うつ聲きけば月きよみまだねぬ人を空に知るかな

同

梅が枝に降懸りてぞ白雪も花の便に折らるべらなる

集二

同　　上

春近く成ぬる冬の大空は花なかれてぞ雪はふりける

本集中の「咲きそめし時より後は」「且見れどうとくもあるかな」「思ひやるこしの白山」など殊にこの種の顯著なものである。

この趣向の意圖が切實になればなる程その想形は微に入り細に入り、遂に彼の特色——やがては本集の主なる特色の纖細巧緻の歌態となつた。これが爲めには彼は在來發達のあらゆる修辭の技巧を運用した、第一には秀句（一語兩義・いひかけ・懸詞法・洒落）を用ひた。

九一六　なにはがた生ふる玉藻をかりそめのあまとぞ我は成ぬべらなり

在二大唐一時憶二本郷一歌

第二には序詞をも用ひた。この序詞の中疊音的なものは萬葉にも卷一雜歌山上憶良の

いざ子ども早やひのもとへ大伴の御津の濱松待戀ひぬらむ

など少しはあるが、貫之は盛にこれをも使ひ尚又古體の序とても必らず本詞と有機的の聯接を保つて所謂「有心の序」

といふものに仕上げた。

九一四　君をおもひおきつのはまに鳴たづのたづねくればぞありとだにきく

と樣なのは前の例で

八四二　あさ露のおくての山田かりそめにうき世の中を思ひぬる哉

などが後の例である。

第三は擬人法

幾世經し磯べの松ぞ昔よりたちよる波や數は知る覽

第四に枕詞前掲「から衣ひも夕ぐれに」

第五に反覆法

九　霞たちこのめもはる　雪ふれば花なき里も花ぞちりける

の「はる」は秀句だが下の句はこゝの反覆法の例歌になる。第六に直喩法

同じ色に散りしまがへば櫻花降りにし雪のかたみとぞ見る

第七に暗喩法、前掲五のやうなものでこれは貫之の歌では主要な役を演じてをる。

白雪のふりしく時は三吉野の山下風に花ぞ散りける——雪を花に

雪ふれば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲ける——同上

山のかひたなびき渡る白雲は遠き櫻の見ゆる也けり——櫻を雲に

よる人もなき青柳の糸なれば吹來る風に且亂れつゝ——柳を糸に

流れくる紅葉ば見れば唐錦瀧の糸しておれる也けり　紅葉を錦に瀧を糸に

やな見れば川風痛くふく時は波の花さへ落増りけり——波を花に

と後世平凡と看做さるゝものながら當時にあつては淸新な着想である。

第七に引喩法

二九七　見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるの錦なりける

第八に對照法

春の色はまだ淺けれどかれてよりみどり深くも染むる松かな

尙此に飽かずとして更に工夫したものは緣語法でこれが本集を特色づける一つとなつてをる。

今はとてのこれる岸の藤波は春の湊のとまりなりけり

藤の花房を波に見立てたのは暗喩だが、「一旦波」にたとへるとその波に緣のある港や泊(トマリ)を想ひついて、而かも想の方では藤は春の最終に咲いて春のとまりといふにふさはしいから、この緣語によつて一段强調せられるといふ効果的な技巧で、これが錦絲の繡のやうにうまくかゞられて優雅艶麗の歌態となる。劇に舞臺効果といふ語があるが、この緣語は語調の上では朗誦効果を高め、味讀の上では鑑賞効果を高めて居る。

七二九　色もなき心を人にそめしよりうつろはんとはおもほえなくに

二六　柳の　とよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにけり

三一一　としごとに紅葉ばながるたつた川みなとや秋のとまりなるらん

拾遺三秋一八〇屛風に

秋くれば機おる虫のあるなべに唐錦にもみゆるのべ哉

そして上述の技巧は又誇張法によつて强調することも彼の始終忘れなかつた用意である。　拾遺十七雜秋一〇九四

七夕後朝に躬恒がもとより歌よみておこせ侍りける返ごとに

あひ見ずてひとひも君に倣はれば七夕よりも我ぞ勝れる

同十四戀四の八七六

「題しらず」

涙川落つる水上はやければせきぞかれつる袖のしがらみ

新古今七　賀七一〇

「題しらず」

君が世の年の數なば白妙の濱のまさごにたれかしきけむ

玉葉九戀一の一三〇四

「題しらず」

逢ひみずてわが戀ひ死なむ命なば流石に人や哀と思はむ

など戀や賀に誇張はつきものだが、前掲各法の例歌とても針小を針小として歌つたものは少く、寧ろ美的な針小棒大を作歌の要諦と看做したあとがある。

此等修辭に苦心した結果として貫之の歌は大抵語句の聯接が圓轉滑脫である。

四〇四　むすぶての雫に濁る山の井のあかでも人にわかれぬるかな

二二　春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人の行らん

二五　我せこが衣はるさめふるごとにのべのみどりぞ色まさりける

一二四　よし野川岸の山吹ふく風にそこのかげさへうつろひにけり

など本集中にも澤山優れたものがある。　此の體が後年江戸派や桂園派に伸びてあの絹漉しの豆腐のやうな、否な天鵞絨か羽二重のやうな優麗調となつた。

唯彼の歌に遺憾とする處は趣向に渇仰するの極あまりにも論理めいた構想が、あらはに呈露したもののあることである。

三九　梅花匂ふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞありける

九一八　雨によりたみののしまをけふゆけばなにはかくれぬ物にぞ有ける

拾遺三秋二〇九

「題しらず」

心もて散らむだにこそ惜からめなどか紅葉に風の吹く覽

風雅八　冬八八二

「歳のうちの梅をよみ侍りける」

一年にふたゝび匂ふ梅の花春の心にあかぬなるべし

新續古今五　秋下五六六

「秋の歌の中に」

なべてしも色變られば常磐なる山には秋も知られざり鳧

の如きは趣向食傷・理趣偏重の拙咏であらう。

それと今一つは彼が折角佛教的厭世觀にも味到し·社會苦にも體驗を積みながら一向その詩境に開展なく、古今撰進當時已に老大歌人として既成大家として認められて、そのまゝ何の進境もなしに晩年にまで及んでゐることも物足りない。貫之集を讀んで見るとどこを見ても、唯一つの出來上つた貫之を見せて居るだけで、出來つゝある貫之新しき殼を破りつゝある貫之なるものが見出されない。彼とても人生の無常迅速は切實に味はせられた。さうならこそ、友則を哭し、素性を哭し、彼自らの臨終を哀觀し

八三四　夢とこそいふべかりけれ世中にうつゝあるものと思ひける哉

八四二　あさつゆのおくての山田…… ………

二七六　秋の菊匂ふかぎりはかざしてん花よりさきとしらぬわが身を

宇治拾遺·土佐日記都へと思ふも物のかなしきはかへらぬ人のあればなりけり

土佐日記あるものと忘れつゝなほなき人をいづらと問ふぞ悲しかりける

とも咏んだ。又刹那流轉の宇宙の法則は些々たる人力の之を如何ともすべからざるに想到しては

四五　くるとあくとめかれぬ物を梅の花いつの人まにうつろひぬらん

二六二　ちはやふる神のいがきにはふくずも秋にはあへずうつろひにけり

我宿のものなりながら櫻花ちるをばえこそとゞめざりけれ

とも謂つたが、惜しいことにはこの想を更に深化し切實化する處までには到らなかつた。是併しながら享樂生活·耽美生活·官能高調の生活をモツトーのやうにした王朝詩人に要求することは無理なことかも知れない。

現傳貫之集は九卷あつて一から四までは屛風繪の歌五戀六賀七別八哀傷九雜と、類別して八百八十首内外、此時代の家集としてはよく類集されてあるが、それでも屛風繪の歌の排列は、前後顚倒の箇處もあり、貫之自身の絶咏から愛宕での葬式まで出てゐるのだから、或一派の人のいふやうに自撰とは想へない。但此は貫之存命中の手稿があつてそれを土臺に補綴したといふのが一ばん穩當であらう。

貫之の歌態については、まだ〳〵云ひ足りないものもあるが、それは本集各歌の評と、單行本の貫之評傳もあることだからそんなのについて研究せられたい。

第五　四撰家　下

凡河内躬恒

萬葉に人丸、赤人あるが如く古今に貫之・躬恒ありとは久しく斯道に並べ稱せられたことで、實に彼はその咏歌の才に於て質に於て量に於て貫之に優るとも劣るまじき名人であつた。否な人によつては彼こそは延喜歌壇の第一人者であつたとまで激賞する位だ。が併し躬恒と貫之と云ふ時、何かしら吾人の胸に感ずることはその門地が劣つて居たこと、その漢學や萬葉學の素養が劣つて居たこと、その歌壇的野心の燃燒が貫之程に烈しくはなかつた事などによつて彼に一歩を輸するもののあることである。

躬恒の出自は貫之に比して更に不明である。前賢故實に「家本寒微善二和歌一」とあるのは本當であつたらう。大和物語抄に「古傳云、先祖不ㇾ見、祇註云、行氏孫湛利男云々、又甲斐小目良高子云々、愚按、日本紀神代上、天津彥根命、是凡川内直躬代直等祖也云々」要するに祖先は未詳といふの外は無い。その官歷は目錄に

寛平六、二、二八、　甲斐權少目

延喜七、正、一三、　丹波權大目。御厨子所

同　一一、正、一三、　和泉權椽

とある。彼が歌態とても貫之と共通の點が多いが特に彼の秀でた點は即興の才に富んだことである。延喜の帝彼を階下に召して「照る月をなぜに弓張といふか歌を以て答へよ」との勅問に

てる月を弓張としもいふことはやまべをさしていればなりけり

そこで叡感斜ならず引出物として御衣を被けさせられると、復もや

白雲のこの肩にしもおりゐるは天つ風こそ吹きてきぬらし

と咏んでほめられたことは名高いが、彼の機知を見るには拾遺九秋下の參議伊衡との五問五答の歌が宜い。

一、躬恒・忠岑にとひ侍りける　　參議伊衡

五一四　白露は上より置くをいかなれば萩の下葉のまづもみづ覽

こたふ　　躬恒

五一四　小男鹿のしがらみふする秋萩は下葉や上になり返るらむ

忠岑

五一五　秋萩はまづさすえより移ふを露のわくとは思はざらなむ

二、又とふ（以下問は伊衡答は躬恒）

五一六　千歳ふる松の下葉の色づくはたがしたかみに懸て返すぞ

こたふ

五一七　松といへば千歳の秋に逢來れば忍びにおつる下葉なりけり

三問五一八　白妙の白き月をも紅の色をもなどかあかしといふらむ

三答五一九　昔よりいひしきにける事なれば我らはいかゞ今は定めむ

四問五二〇　影見れば光なきをも衣ぬふ糸をもなどかよるといふらむ

四答五二一　うば玉の夜は戀しき人に逢て糸をもよれば逢ふとやはみぬ

五問五二二　夜晝の數はみそぢにあまらぬをなど長月といひ始めけむ

五答五二三　秋深み戀する人の明かれ夜を長月といふにやあるらむ

第五　四撰家　下

問ひ方伊衡の才もさることながら言下に歌ひ解く躬恒の頓機逸才は眞に驚かれるばかりである。思ふに王朝の逸早き趣味は斯うした咏歌にまで即興を悦ぶやうになつて、これが正しい詩作の態度かどうかは別として、當時名のある歌人は大抵この種の機智に富んで居たので、遅吟苦咏といはれた貫之とても「人はいさ」「おきつなみ」「家にゐてわかるゝ時は山の井の」と様なのが大分あるが、この傾向の傑出した代表作家としては、どうしてもこの躬恒を推さねばなるまい。躬恒が毎回答へたのに忠岑は始めにたつた一回答へた切り何も答へ得なかつたのを見ると、この點にかけて忠岑は到底躬恒の敵ではなかつたと想はれる。

それに又貫之は意識的に業平に私淑して或度の成功を收め得たことは前に謂つた通りだつたが、今日吾々が虚心で觀ると寧ろ遍昭の衣鉢を傳へて成功した分子が多く、業平の作風はこの躬恒こそ直系の繼承であつた。即ち彼の咏み口を見ると何さま「歌は産まれるものであつて作るものでないこと」が思はれる。　後撰七、秋下三六五

「人の雁はきにけると申すを聞きて」

年毎に雲路まどはぬかりがれは心づからや秋をしるらむ

同十六　雜二の一一〇八

「淡路のまつりごと人の任はてて、のぼりまうできての頃、兼輔朝臣の粟田の家にて」

引植ゑし人はむべこそ老にけれ松の小高くなりにける哉

拾遺一春八

「定文が家の歌合に」

春立ちて猶ふる雪は梅の花咲く程もなく散るかとぞみる

同二〇

「題しらず」

吹く風を何いとひけむ梅の花ちりくる時ぞ香は勝りける

同三　秋一八二

「題しらず」

露けくてわが衣手はぬれぬとも折りてを行かむ秋萩の花

同十六　雜春一〇三六

「題しらず」

咲かざらむ物とはなしに櫻花面影にのみまだきみゆらむ

續後撰十八　雜下

「素性法師身まかりて後によめる」

ゐしなくてふるの山べの春霞いたづらにこそ立渡りけれ

續千載一　春上一八

「延喜の御時御屏風に」

梅が枝になく鶯のこゑ聞けど山には今日も雪はふりつゝ

本集中一一〇・一二〇・一二七・一三二・一三四・四一六など殆ど毎咏感情自然の流れを表して云ひしれぬ情趣の横溢するものが多い。

彼の技巧は貫之に比べてずつと放膽で荒削り式のものだがそれに零落した名匠の鉋のやうな冴えを見せてをる。

四一　春の夜のやみはあやなし梅の花色こそみえねかやはかくるゝ

の擬人と誇張にしても

一六一　郭公こゑもきこえず山びこは外に鳴くれなこたへやはせぬ

の警句と擬人にしても

一六七　ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしよりいもとわがぬるとこ夏の花

の序歌にしても、

一九〇　かくばかりをしとおもふ夜をいたづらにれてあかすらん人さへぞうき

の誇張にしても

二七〇　心あてにをらばやをらんはつ霜のおきまどはせる白菊の花

の誇張した譬喩にしても

三一三　道しらばたづれもゆかむもみぢばをぬさとたむけて秋はいにけり

の擬人の誇張にしても、三九九の警句、六〇〇の誇張した譬喩、六一一・六一四・六八六の誇張七九四の序歌八四〇の暗喩一〇一五の誇張一〇六七の秀句皆さうした感じがする。

それと今一つ目立つのは彼の皮肉は貫之よりも冷たさに於て優つて居る。

六七　わがやどの花見がてらにくる人はちりなむ後ぞ戀しかるべき

三八二　かへる山なにそはありてあるかひはきてもとまらぬなにこそ有けれ

九五六　よを捨てて山に入る人山にてもなほうき時はいづちゆくらん

後撰十一　雜一の一〇八五

「我をしりがほにないひそと女のいひ侍りける返事に」

足引の山におひたる白樫のしらじな人を朽木なりとも

の如き後のものほど鋭い。　けれども彼も亦本集歌人と同様

理知的着想（拾遺一・八一・一一二五　續古今一三七・五六五）

誇張法（拾遺一一四〇　新古今一〇六　新勅撰三四〇・三〇〇　續古今八三五）

緣語法（本集に澤山あるが尙玉葉三一六　續後拾遺六三七など）

譬喩法・對照法・懸詞法・枕詞・序詞を驅使し尙且つ

あはぢにてあはとはるかに見し月の近きこよひは處がらかも　（新古今一五一三）

のやうな頭韻などもふんで居る。

現傳の躬恒集上下二卷に約三百餘首の詠が集めてあるが、これも後人の撰で、順序は亂雜だが彼が歌風を通覽するには便利である。

壬生忠岑

從五位下安綱の子で藤原定國の隨身として奉公中、その歌才を認められて撰者に選ばれ、御厨子所出仕となり撰進後は定外膳部、攝津大目に歴任したとばかりはわかるがその後の經歴が一向わからない。　九十八歲までも長命したのだから、もつと斯道に大きな足跡を遺しさうなものだのに、この集の合撰と忠岑集一卷六十首との外さして傳ふる所がないのは聊か腑に落ちない。

彼は嘗て歌を貫之について敎はつたといふが、　その歌風は寧ろ小躬恒とも謂ふべく、　彼も亦頗る卽興の達人であつた。大和物語・百人一首一夕話などにある有名な歌話に、一夕、泉大將定國のお供をして外出したが、定國はどこかで酒をのんで大分醉つてから深更に及んで左大臣師尹の館を訪うた處、師尹は大の不機嫌で「いつたいどこへ行かれた序

か」と言葉にも劍がある。その時忠岑階下に松明を持ちながら、彼の家持のを本歌に

かさゝぎのわたせる橋の霜のうへをよはにふみわけてことさらにこそ

と答へたので師尹も機嫌を直して快く迎へ請じ、定國も悦び、師尹からは彼に褒美まで與へたとある。後年新古今時代に流行した本歌取の歌態はこの忠岑のなどが早い秀咏である。その他

君が代にあふさか山の石淸水木がくれたりと思ひけるかな　一〇〇四

修辭には推敲の餘地もあらうが、彼が撰者に拔擢せられた悦びは實にさもと想はれる。

夏の夜郭公を聞きて

暮るゝかと見れば明ぬる夏の夜を飽ずとや鳴く山時鳥　一五七

夏の短夜を婉曲に强調したもので一五六・一六六と等類にして想は一段と複雜なもの

春日野の雪間を分けて生出來る草のはつかに見えし君はも　四七八

風ふけば峯にわかるゝ白雲の絕えてつれなき君が心か　六〇一

序詞の巧緻な失戀の歌

寬平の御時后の宮の歌合に

三吉野の山の白雪踏分けて入にし人の音づれもせぬ　三二七

友則が亡くなりにし後

時しもあれ秋やは人の別るべき有るを見るだに戀しきものを　八三九

は眞情流露の佳什

夏果つる扇と秋の白露と孰れかまづは置かむとすら覽

朧くともいざ白露と身を做て君があたりの草に消なむ

は、とりぐ作意のをかしきもの　だが併し彼は逸氣奔放の餘り時に修辭の洗練を缺くものもある。

昔物など云ひはべりし女のなくなりしが曉方の夢にみはて侍らで、さめ侍りしかば

命にも增りて惜くある物は見果ぬ夢の覺むる也けり　六〇九

の上句などは散文としても拙い云ひ方だ。又貫之の餘弊のみをまねたやうな纎細なものもある。

后の宮の御屛風に瀧おちたる所

落ちたぎつ瀧の水上年つもり老いにけらしな黑き筋なし　九二八

思ひに籠りたる人を訪ふとて

墨ぞめの君が袂は雲なれや絕えず淚の雨とのみ降る　八四三

現傳忠岑集は皆で、六十首四十九首から六十首迄はその前に「從來の家集にはなくて世々の勅撰集から拔いて加へた」旨が斷つてある。因て今忠岑集と勅撰集とを對照して見ると、（詞）とあるのは詞書の內容がちがふもの）

忠岑集	勅撰集	忠岑集	勅撰集
一	古今 一〇〇三	七	古今 一八三
二	古今 一〇〇四	八	古今 一九四
三	拾遺 一三六	九（三句思ひおきて）	古今 五八（三句おきながら）
四（下句露の心のわくるとなみそ）	拾遺五一五（下句露の分くとは思はざらなむ）	一〇（初二句秋の野の萩の白露）	（詞）後撰三〇九（初二句秋の野におく白露を）
五	古今 一五七	一一	
六	古今 一六三	一二	

一三	古今	五六六	三二	古今	一一
一四	古今	五八六	三三	古今	二六三
一五	古今	五九二	三四	古今	二九六
一六	古今	六〇一	三五	古今	三〇六
一七	古今	六〇九	三六	古今	三二七
一八	後撰	六〇三	三七	古今	三二八
一九			三八（四句逢夜のかずと）	玉葉一〇三八（四句御代の數とぞ）	
二〇	後撰	七四二	三九	古今	四七八
二一	後撰（題しらず）	一七〇	四〇		
二二			四一（四句思はぬ人も）	古今六〇二（四句つれなき人も）拾遺	七九三
二三	古今	八三五	四二	古今	八三九
二四	古今	八三六	四三	古今	八四三
二五	古今	六二八	四四（四句れぬなはたたで）	古今一〇三六（句れぬなはたゝじ）	
二六	（詞）古今	九二八	四五		
二七	（詞）拾遺	一	四六	後撰	六六二
二八	（詞）拾遺	四三	四七	後撰	一一七九
二九	古今	二一四	四八		
三〇			四九	（詞）後撰	一一〇六
三一（結句色變りゆく）	（詞）古今（結局色まさりゆく）拾遺	三六一 一八六	五〇	拾遺	一二三
五一			五六	續後撰	八六
五二	新古今	二八三	五七	續後撰	三〇一
五三	新古今	一五九二	五八	續後撰	七六九
五四			五九	續古今	五四四
五五	新勅撰	八八五	六〇	續古今	一二三五

勅撰集にあつて家集に洩れてゐるものは左の二十四首

古今二三五　題しらず

人のくることやくるしき女郎花秋霧にのみ立かくるらむ

同二三六　題しらず

ひとりのみながむるよりは女郎花わがすむ宿に植ゑて見ましを

同三六二　内侍のかみの右大將藤原朝臣の四十賀しける時に四季のゑかけるうしろの屏風にかきたりける哥

秋くれど色もかはらぬときは山よその紅葉を風ぞかしける

同四二五　物名「うつせみ」在原滋春への返し

たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなんそれとうつせみんかし

同四六二　物名「かたの」

夏草のうへはしげれるぬま水のゆくかたのなき我心かな

同六二五　題しらず

有明のつれなく見えし別より　ばかりうき物はなし

同八四一　「父がおもひにてよめる」
藤衣はつるゝいとはわび人の涙の玉のをとぞ成ける
同九一七　「あひしれりける人の住吉にまうでけるによみてつかはしける」
住吉とあまはつぐともながゐすな人忘草おふといふなり
後撰三八七　「人々もろともに濱づらをまかる道に山の紅葉をこれかれよみ侍りけるに」
幾きともえこそ見わかれ秋山の紅葉の錦よそにたてれば
同一〇三七　「つれなく侍りける人に」
戀侘びてしぬてふ事はまだなきを世の例にも成ぬべき哉
同一一〇一　「月の面白かりけるを見て」
晝なれや見ぞ紛へつる月影を今日とやいはむ昨日とやいはむ
拾遺三六七　物名「かるかや」
白露の懸るかやがて消えざらば草葉ぞ玉の櫛笥ならまし
同三六八　物名「はぎのはな」
山川はきのはながれず淺きせをせけばふちとぞ秋はなる覽
同三六九　物名「松むし」
瀧つせの中に玉つむしらなみは流るゝ水を緒にぞぬきける
玉葉八七六　「題しらず」
紅葉ばの流るゝ瀧は紅に染めたる糸をくるかとぞみる
同一三三二　「題しらず」

相思はぬ人の心は山なれや岩ほよりけに動かざるらむ
同一三七三　「題しらず」
我玉を君が心に入れかへて思ふとだにもいはせてしがな
同一六八二　「題しらず」
鳥ならばあたりの木々に木傳ひてわびたる聲になかましものを
續千載三九六　「題しらず」
秋はぎの下に隱れてなく鹿の涙や花の色を染む覽
續後拾遺三〇四　「題しらず」
山里に秋聲高く啼くものは妻まどはせる鹿にぞ有りける
同六三八　「題しらず」
から國のよその濱邊にやく鹽の思ひ遙けき我や何なる
新千載二一四一　物名「かるかや」
咲く花のはかなかるかや匂ひつゝ人の心をあだになす覽
新拾遺一七一　「紀貫之曲水の宴し侍ける時、月入$_=$花灘$_一$暗といふ事を」
散紛ふ花は衣にかゝれどもみなせなぞ思ふ月の入る間は
新後拾遺一七八　「題しらず」
郭公おのが初音を心から鳴かでや人にうらみらるらむ

反對に忠岑集にあつて諸集にないものは左の九首である。

中宮の御屏風に山田ある所

一一、蛙鳴く井手の山田に蒔きし稲は君待なへと生立に鳬

菊の花の露に袖を濡してあるじにかく云ふ

一二、折る菊の雫を多みわかゆてふ濡衣をこそ老の身に着れ

女の許へ始めてやりはべりし

一九、須磨の蜑のこれる鹽木か燃る共人に知られぬ我戀ならむ

寛平の御時中宮の御屏風にあまのかづきたる所

二二、心ざし深く水底かづきつゝむなしくいづな沖つ島守

泉の右大將の四十賀の屏風に

三〇、濁なき清瀧川のきよければ底よりせくと見ゆる藤波

戀　歌

四〇、獨ぬる我敷妙の鹽竈はうき玉なれやよるかたもなし

松風を聞きて

四五、松の音に風の調を合せては立田姫こそ秋はひくらし

三月三日ある處にて土器とりて

四八、三千歳へてなるてふ桃の今年より花咲春に成にける哉

雖レ入レ集不レ見ニ家集一歌

五三、東路のさやの中山清かにも見えぬ雲居によをや盡さむ

紀　友　則

貫之の系圖にあげた通り貫之の從兄に當り、年齡からも地位からも、撰進當時の歌歴から見ても貫之の先輩であつた。その官歴は目錄によると

寛平　九、正、一一、　土佐掾　同　一〇、正、二九、　少內記

延喜　四、正、二五　大內記

とあつてその大內記時代に本集の撰に與り、撰集半ばにして病歿した。彼が四撰者の首席でありながら後輩の貫之をして、その思ふが儘の手腕を振はせたことは一つには貫之が非凡の才識に因るけれども又彼にそれだけの雅量があつたからで、この點實に奥ゆかしい先輩氣質である。

彼の歌風は貫之と酷似するものがある處から世に忠岑を小躬恒といふに對して彼を小貫之といふ。その實は貫之が友則にまねたものか、友則が彼に學んだものか、若くは相互相共鳴し、相影響しあつたものか此は容易に斷定を下すことは出來なからう。何しろ年が二十近くも違つてゐて貫之が七八つの幼童の頃、友則は三十前後の青壯年で已に斯道を嗜んで居つたものであらう。

貫之はいふ

霞たちこのめも春の雪ふれば花なき里も花ぞちりける　（九）

と、友則もいふ

雪降れば木毎に花ぞ咲きにける孰を梅とわきて折らまし　（三三七）

貫之はいふ

みわ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花や咲くらむ　（九四）

と、友則もいふ

たが爲めの錦なればか秋霧の佐保の山べを立隱すらむ　（二六五）

と、貫之はいふ

夢とこそいふべかりけれ世の中にうつゝある物と思ひける哉　（八三四）

と、友則もいふ

ねてもみゆねでもみえけり大かたは空蟬のよぞ夢には有ける　（八三三）

と、啻に題材・着想の相似たるのみならず。その作意に理趣を含んで、

珍しき聲ならなくに時鳥こゝらの年をあかずも有哉

斯計りもみづる色の濃ければや錦立田の山と云らむ

一本と思ひし菊を大澤の池の底にも（家集底まで）誰か植ゑけむ　（二七五）

秋風は身を分てしも吹かねども人の心の空になるらむ　（七八七）

數妙の枕の下に海はあれど人をみるめは生ずぞ有ける　（五九五）

年を經て消えぬ思ひはありながら夜の袂は尙凍りつゝ　（九七一）

蟬の羽のよるの衣は薄けれどうつり香濃くもなりにける哉　（八七六）

などいふことも疊語的の序詞を使つて

東路のさやの中山なかなかに何しか人を思ひ初けむ　（五九四）

などいふことも古體の序詞を使つて

春霞たなびく山の櫻花見れども飽かぬ君にもある哉　（六八四）

などいふことも、修辭を緊密整齊に仕立てて

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る　（三八）

夜やくらき道やまどへる時鳥我宿をしも過ぎがてに鳴く　（一五四）

など云ひ、漢文的聯想を歌ひこんで

色も香も同じ昔に咲くらめど年ふる人ぞ改まりける　（五七）

秋風に初雁がねぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來つらむ　（二〇七）

などいひ、時に無技巧の實感呈露に成功して

音羽山けさこえくれば時鳥梢はるかに今ぞ鳴くなる　（一四二）

夕されば佐保の河原の河霧に友惑はせる千鳥鳴く也

など云ひ、貫之が忠房と高師の濱の松をかけて應答したやうな秀句と如才のない社交振とは

故鄕は見しごともあらず斧の柄の朽ちし處ぞ戀しかりける　（九九一）

に見られ、その纖細食傷の弱點までも相似て

雲もなく凪たる朝の空なれやいとはれてのみ世をばへぬ覽　（七五三）

と樣の拙歌が數首ある。

けれども彼が流麗婉轉の調を以て

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ　（八四）

といひ、思ひきつた情熱を以て

命やは何ぞは露のあだものを逢ふにしかへばをしからなくに　（六一五）

といつた處は最早貫之の圈外に出て數歩の長があつて、裕に貫之の纖細型と躬恒忠岑の天才型とを當時の水準の最高處

に於て併せ得た趣が見られる。彼に覇氣なく野心なくその歌才に都合よき斯壇勃興の頃は早くも易簀の不幸を見たが爲めにその一代の咏として遺したものはさほどに多くはないが、若し一身にして古今集正調を咏歌に示し得たものは四家の中誰かといふことになると彼こそはその唯一の人であつたと謂ひたい。古今集を華實兼備といふが、彼はその華實兼備中の華實兼備の歌人であつた。

にも拘らず後の代々の勅撰集に採られた彼の歌の數は四家の中一番少いのはどういふ譯か？思ふに彼の秀咏は大部分を古今集に載せられて後を拾ふとしては、どうしても二番煎じの感があつたからであらう。他の三家は寧ろこの集を動機として多々益々好咏を賦したのに、彼一人はこの集を頂點として物故した爲めに、拾遺の餘地がなかつた爲めであらう。そしてこゝにも彼一人が既成作家たるの趣が看取せられる。現傳の友則集收むるところ七十二首内一首（五七）は本院のおとど時平の答歌一首（六一）は藤原たゞゆきの贈歌である。前例によつて代々の勅撰に採られたものを對照すると

是則集	勅撰集	是則集	勅撰集
一	後撰 一一	七	古今 三三七
二	古今 一一三	八	古今 一四二
三	古今 三八	九	古今 三五九
四	古今 五七	一〇	古今 一五三
五	古今 六〇	一一	古今 一五四
六	古今 八四	一二	古今 五六二

一三	後　一三
一四	
一五	
一六	新千載　三三四
一七	（詞）古今一七七
一八	後撰　三七二
一九	續古今　四五二
二〇	
二一	拾遺　二三八
二二	古今　二〇七
二三	古今　二六五
二四	古今　二七四
二五	古今　二七〇
二六	後撰　三八二
二七	
二八	
二九	
三〇（四句池の底迄）	古今　二七五（四句池の底にも）
三一	古今　六八四
三二	古今　六六八
三三（題しらず）	古今　五六一　寛平歌合）
三四	古今　七一五

三五	古今　六六一
三六（初二句玉潜く蜑ならねども）	後撰　七九九（初二句玉藻かる蜑にはあらねど）
三七	（詞）後撰八〇〇
三八	後撰　六〇四
三九（題しらず）	古今　五六四（寛平歌合）
四〇（結句戀にざりける）	玉葉一二四八（結句戀にぞありける）
四一	古今　七八七
四二（題しらず）	古今　五六二　寛平歌合）
四三	
四四（題しらず）	古今　五六五（寛平歌合）
四五	古今　五九三
四六	古今　五九四
四七	古今　五九五
四八	古今　五九六
四九	古今　六〇七
五〇（初句命かも）	古今　六一五（初句命やは）
五一（二句思ひ出づれど結句忘られにけり）	續千載（二句思ひすつれど結句忘れざりけり）
五二	古今　六六七
五三	古今　七九二
五四	古今　八二七
五五	古今　七五三
五六	

欠

五七	
五八	(詞)古　八七六
五九	古今　九九一
六〇	(詞)古今四〇五
六一	
六二	後撰　四三三
六三	古今　八五四
六四	古今　八三三
六五	
六六	古今　四三七
六七	古今　四三八
六八	古今　四三一
六九	古今　四四
七〇	古今　四四二
七一	
七二	

勅撰集にあつて家集に洩れたものは

拾遺四、二三二冬

とびかよふをしの羽風の寒ければ池の氷ぞさえ増りける

續古今四秋上三〇八「秋の歌の中に」

吹きよれば身にもしみける秋風を色なき物と思ひける哉

續千載一春上六二「寛平の御時后宮の歌合のうた」

春雨の色は濃しとも見えなくに野べの綠を爭で染むらむ

續後拾遺七物名五〇七「亭子院の歌合に、子日松」

片戀を駿河の富士の山よりも我胸の火のまづも燃ゆるか

新拾遺五、秋下四九五「題しらず」

初雁の鳴き渡りぬる雲間より名殘おほくて明くる月かげ

第六　其他の歌人

古今集歌人として名あるもの百を以て計ふべきだが、中に就き漢詩の法格から和歌に入つて秀咏を遺したもの、之を前にしては參議篁あり之を後にしては道眞・千里あり。篁の「天の原八十島かけて」「おもひきや鄙の別れに」「忘れては夢かとぞおもふ」道眞の「秋風の吹上に立てる」「このたびはぬさもとりあへず」千里の句題和歌の佳咏などは爾餘の作品に比べても遜色が無いのみか、實はこの集の精彩となつてゐる位である。

業平の兄行平（一四七九―一五五三・弘仁一〇―寬平五）は、どちらかといふと經世濟民の才に秀で歌は弟に數籌を輸してはゐるが、歌合をも催し（在民部卿家歌合）布引の瀧や須磨の侘住まひや因幡赴任の別れの歌などは孰れもよく人口に膾炙して居る。

業平の子に棟梁、滋春があり、棟梁の子に元方があつたが矢張り乃父の後繼といふには稍劣つて居つた、それよりも寧ろ業平の姻戚の藤原敏行（？―一五六七？・延喜七）こそは彼の衣鉢を傳へたものだと稱せられて居る。　その咏多くは傳はつてないが「秋きぬとめにはさやかに」「ちはやふる賀茂のやしろの」「住の江の岸による波」など纔に殘つた一二首を採つても天才の閃きが看取せられる。　人によつては彼こそは喜撰に代つて六歌仙にも入るべき名家だといふ位で晚年にはその書と共に認められて東遊の歌など召されるやうにもなつた。　この敏行と平貞文（？―一五八三？・延長元）とを併せて更に優れたものが業平だと想へば略三家の天分と咏み口が察せられよう

阪上是則（？―一五九〇？―延長八）には大和の風物を咏んだものに佳い歌があり、編者は不明だが家集の詞書には特色

欠

がある。

清原深養父の歌は、十六首もとられ措辭平明で着想も詩趣や逸趣に富んだものが多いがどういふものか家集は傳はつてない。孫娘の清少納言がある程なら是非深養父集もあるべきだが枕草子が有名な爲めに此不權衡が出來たものか、

中納言兼輔（一五三七—一五九三　元慶元—承平三）は堤中納言といつて物語の方で有名、地位も上なり交際も廣く、戀愛事件も多い閲歷から歌は澤山殘つて居るが、個性的なものは少い。

源宗于（?　一五九九　?—天慶二）「常磐なる松の緑も」「雪降りて年の暮れぬる」「山里は冬ぞさびしさ」など名歌も多いが先づ兼輔と同一程度であらう。

興風の歌は右の二人に比べてはその情熱の表現といふ點に於て一段優れて居る「何かその名のたつことの」「誰をかも知る人にせん」など本集に二十首を採られ尚興風集といふもある。前の深養父と同班であらう

業平の子は不肖であつたが、遍昭の子素性はよく父の歌風をついで而かもその自然美の觀照には父よりも一歩を進めて居る。但し遍昭程の體驗と敎養と名望と地位とはなく、遍昭の歌態の輕快洒脱の一面を進展させたもので眞摯熱烈の趣致は未だしと思ふ。その地位敏行に配すべきだ。

此外女流歌人として小町に對すべきものは伊勢である。小町程の敏才は見えないが女性らしい情緒を練れた形で歌つて居る。その味の多かつたこと、その技巧の優れてゐること、その生活は小町程純ではなかつたが、和泉式部程奔放でもなかつたことなどがこの三才媛を並べて目立つ特色であつた。

そこで今假に古今集歌人の聖壇を築くとすれば、自分ならば左の配置を採りたい。

時代	歌人
六歌仙時代	遍昭　業平
	行平　喜撰　康秀　小町　黒主　篁
撰集時代	貫之　躬恒
	友則　忠岑
	千里　素性　敏行　伊勢　道眞
	是則　深養父　興風　貞文
	兼輔　宗于
	爾餘の古今集歌人

尚此等歌人の中家集の遺つてゐるものの歌數と本集に採られた歌數を左に掲げる。此は隨分曖昧なもので伊勢の集や兼輔の集などは見る人によつて他人の咏と認めるものもあり必ずしも精確な數ではなく唯便覽の一助にあげる。

名	本集入撰	家集		
		家集總數	他人の作	自家の作
敏行	一九	二〇	一	一九
是則	八	五〇	〇	五〇
兼輔	三	一五九	三〇	一二九
宗于	六	二八	五	二三
興風	二〇	五一	〇	五一
素性	三七	九九	〇	九九
伊勢	二二	五一五	一〇〇	四一五

第七　形　態

一　字餘り

萬葉三に人麿の

あふみのうみ夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへおもほゆ

といふがある。夕浪千鳥は「七ゆく少女」と同様、此頃の面白い熟語だと思ふが、そのことよりも上の二句の出が字餘りになつてゐる爲めに悠揚逼らずといつた感じがあり、それを「汝が鳴けば」の三句で過渡して「心もしぬに」で短促調に一轉し「いにしへおもほゆ」の字餘りで詩人が舊都の夕闇に懷古憑弔の感無量なる趣が見られる。作者に成意があつて殊更に斯の種の音律を構成したものではなからうが、この一首の音律に作者當時の心臓の鼓動がさながらに流れ出てゐるかの感じがする。字餘りが含む音律的意義はいつもその句の感觸を豐かならしめ、その一首の風格を調律するといふにあらう。謂はゞ音數律の遊軍で、必要に應じてどの句にでも附くが、附くからには、附いただけの使命を果さなくてはならない。萬葉の反歌　短歌を承け繼いで始めて短歌中心の撰集となつたこの古今集に二百數十(字餘一覽參照)の字餘が用ひられてあるのは大抵上述の場合である。先づ開卷第一に

としのうちに春は來にけりひととせをこぞとやいはむことしとやいはむ

と、初句と結句に字餘がある。　初句の音調が、花下逍遙に春の総日を送る王朝人らしい暢氣さを表して居る。それを「年のうち春立ちにけり」などすると、賣上帳でも繰つて居る店頭の現代人の口調になる。又結句の字餘りはこそ、ことしの對語に應じ韻をふませる爲めにどうしてもかういはなくてはならない處で之をもし「ことしといはむ」など七言に縮めれば全く一首の調子を破すことになる。二一に光孝天皇の

君がためはるののにいでて若菜つむ我衣でに雪はふりつゝ

の句は後世ならば「春野(はるの)にいでて」とでも云はう。こゝもわざ〳〵「の」を二つも並べて「はるのの」とまでしなくともよささうだが、作意はさうではなく「今は春の野原だのに今以て冬の雪が降りつ〳〵した」といふので、どうしても「春の野と」ありたい處だと想ふ。四五　貫之の

くるとあくとめかれぬものをうめのはないつの人まにうつろひぬらん

の初句の如き暗に「日がくれるとは寄つて見、夜が明けるとは寄つて見、二六時中終日終夜目も離さずにもてはやしてゐるものを」といふ心持の音律化となつてをる。五二の「しかはあれど」の決然生後三七七の「命あらば」の開き直つた調子、四一〇の「つましあれば」のしみ〴〵した郷愁、九四三の「あはれとやいはん」の偕調と一つ〳〵を味つて見ると此集の字餘りは(中には例外もあるが)大抵成果を收め得て居る。特に結句に字餘りが多い(九五)のは一面七五基底の歌調の弱點たる輕浮を救うて一首の音律におちつきを得しめる必要からであらう。

これと關聯して思ふのに「みだれそめにしわれならなくに」「見ても心のなぐさまなくに」「忘るゝこともあらましものを」「花のさかりにあはましものを」などは實は一音を二音に延ばして整調したものなのに拘らず　耳に聽いては字餘の錯覺を起させてのんびりと響くが、この種の延音も隨分多く使はれて居る。

二　切と連續

古今集の歌の調子は一體になだらかだといふのは、一つはその意が途中で切れないで、連綿遊絲の態に歌ひ續けられたものが過半數だからではあるまいか。

四三　春ごとに流るゝ川を花と見て折られぬ水に袖やぬれなん

二九三　紅葉のながれてとまるみなとには紅ふかき浪やたつらん
五三一　早き瀨にみるめおひせば我袖の涙のかはにうゑてみましを
八六七　むらさきの一もと故にむさし野の草はみながらあはれとぞ見る
一〇八八　みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ船のつなでかなしも

など、まるで美しい假名書の一行を見ると似た感じを耳に響かせる

字餘り一覽表

句	
初句	一　四　四五　六六　七〇　九一　九三　一一四　一四八　一六八　二六八　二七七
二句	二一　三四　六五　八二　九二　一五三　一六七　一七〇　一九〇　二〇八　二一二　二四四
三句	七　二三　五二　九三　一四七　三四三　三六五　三七七　三八九　四〇七　四一〇　四七〇
四句	一二　一八　四九　六三　一五　一八九　二二〇　二二一　二四二　二四三　二四五　三八八
五句	一　一〇　一一　一六　三九　四四　四五　五二　七九　八三　九九　一一〇

句	
初句	二七九　三〇七　三三三　三三五　三四一　三四四　三五四　四〇八　四一一　四五〇　四五七　四七六　四九五　五〇九　五一〇　五一二　五一三　五二三　五二五　五六八　六〇七　六六二
二句	二七二　三〇六　三〇九　三三二　三三六　三四二　三五〇　三八六　三九九　四七四　四七五　五四八　五九八　六二二　六六六　六九四　六九七　七五六　八三八　八四五　八四八　八七七
三句	四七七　四七八　四八四　五三二　五八三　五九五　六七二　六八一　六九四　七〇八　七三七　七五四　七五八　八二八　八三九　八九一　八九二　八九六　九〇〇　九一〇　九二二　九三六
四句	四九五　五〇三　五一一　五四九　五五〇　五五七　五六六　六七〇　六九一　七〇二　七二四　七四八　八三四　九〇四　九三八　九四三　一〇一九　一〇四一　一〇四九　一〇五九
五句	一三〇　一三三　一七六　一八七　一九三　二〇四　二〇九　二一〇　二一二　二二七　二四九　二八五　三一五　三四二　三五六　三五九　三八二　三八五　三九〇　三九五　四〇五　四〇九

初句	六七六 六八〇 六八三 七一八 七三五 七三九 七四七 七五六 七五八 七七四 七七六 七八三 八一八 八二四 八三五 八三九 八四五 八五三 八七七 八八九
二句	八八〇 九一〇 九二三 九五七 九七〇 九九一 九九七 一〇七三 一〇八一
三句	九六二 九六三 九七一 一〇一四 一〇三〇 一〇五四 一〇七二 一〇九五
四句	
五句	四一四 四一九 四三〇 四八一 五〇八 五二〇 五二七 五三九 五六八 五九五 六二四 六三〇 六三四 六四九 六五二 六五八 六六六 六六八 六八二 六八四

	八九二 八九八 九一〇 九一四 九二〇 九五九 九七六 九七八 九八九 一〇三〇 一〇四一 一〇四三 一〇九九
	六九一 六九二 七〇三 七一四 七一五 七二一 七三八 七七八 七八〇 七八六 七九二 七九五 七九七 八〇六 八一七 八一八 八二四 八三〇 八三三 八四六 八四九

句	歌番号	計
初句		計 六七
二句		計 四三
三句		計 四二
四句		計 三二
五句	八六五 八七三 八七四 八八〇 八八九 九二九 九三八 九四三 九四五 九六七 九七八 一〇一三 一〇三二 一〇三五 一〇五九 一〇六五 一〇六七 一〇七四 一〇七九 一〇九〇	計 九五

外に長歌　一〇〇一　三五、四一、四三の三句　一〇〇二　四五、四七、六〇の三句
一〇〇五　九、一七の二句　一〇〇六　五の一句

又外形では初句で切れて居ても一讀連續律と同じ感じのする歌も多い。

三一　春霞(の)たつを見すてて行く雁は花なき里にすみやならへる

三八四　音羽山(のあた)りこだかくなきて時鳥(までも)君がわれを惜しむべらなり

次に多いのは三句切である。

二〇　梓弓おして春雨今日ふりぬあすさへふらば若菜つみてむ

一五二　やよやまて山時鳥ことづてん我よの中にすみわびぬとよ

四一八　かりくらしたなばたつめに宿からん天のかはらに我は來にけり

七四八　花すゝき我こそしたに思ひしかほにいでて人にむすばれにけり

九一七　住吉とあまはつぐともながゐすな人忘草おふといふなり

此は後來新古今の頃まで此切の次第に增加する傾向を豫兆するもので、何が故にこの切が發達したかに就ては從來あまり說明せられてないが、一つには歌會の盛行と共に各人咏歌の朗誦せらるゝ機會も多く(後には朗咏といふこともある)隨つて息繼として三句に休止符の切れを入れる三句切になつてゐない歌までも三句目で切つて讀みあげるので、その口調が自然歌人の心に親熟した結果であらうとも想はれるが、今一つには、三十一音の詩形に於て十七音(三句目の終)は

略中間に當るので、發聲のリヅムからいつても着想の意識流の單位から觀てもこゝで一段落をつけることが、作者の心持にも適合したものかと想ふ。つまり讀む人の感じも作る人の感じも切るとすれば三句が最も恰好な處から後來この切が次第に榮えて行つたものであらう。」

次に多いのは二句切である。この切の特徴は初二句に平凡なことをいつて後に詩味を盛ること宛ら歩を前について後から飛車、角で攻める將棊の手のやうな構想に好都合なことである。

三四　やどちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人のかにあやまたれけり

「家の近くに梅は植ゑまい」とだけでは單なる平語であるが、「それはなぜか、梅の花は薫りが高いので、ひよつとその香を待人の袖とあやまつて、あゝちがつた、あらぬ香であつたと失望するに堪へないから」といふので詩になる。

五二　年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし

「多くの年を經たのでわが年齡も老いた」は餘りに知れ切つた平凡な語だが作者の良房が人の花（我子染殿の后）と花の花（滿開の櫻）とを併せめでての滿悦の心境が以下に出て、なるほどと首肯せられる。

三〇五　たちとまりみてをわたらん紅葉ばは雨と降るとも水はまさらじ

三一七　夕されば衣手さむしみよしのの吉野の山にみ雪ふるらし

九五四　世の中のうけくにあきぬ奥山のこのはにふれる雪や消なまし

一〇七七　み山には霰ふるらしとやまなるまさきのかづらいろづきにけり

又この切法は初二句に逆說的な警句を措いて、何樣一感激なくてはたゞでは濟まされさうもない想を盛つて三句以下の詩情を隱約の裡に豫覺せしめる底の味風をも助けてをる。前掲「やどちかく」などもその例に入るが、四二の「人はいさ心もしらず」五四の「いは走る瀧なくもがな」七七の「いざ櫻我もちりなん」一一〇の「しるしなきねをもなくかな」三七五の「から衣たつ日はきかじ」など皆同型である。尚一例をあげると、

七四六　かたみこそ今はあだなれこれなくば忘るゝ時もあらましものを

といふと誰しもそのまゝ肯く譯には行かぬがと續いて悲戀の作者を髣髴することが出來るやうなものである。二句で切れたものが再び四句でも切れてゐるものも若干あるが多くは音調上の關係から來て居る。

二八五　戀しくば見てもしのばんもみぢばを吹きな散らしそ山おろしの風

九四二　世の中は夢かうつゝかうつゝとも夢とも知らずありてなければ

「初句切」とも謂ふべき第一句で切れたものは名詞切を併せて五十首内外しかない。

三七七　えぞ知らぬ今こゝろみよ命あらば我や忘るゝ人やとはぬと

四三二　秋はきぬ今やまがきのきりぎりす夜な夜ななかん風の寒きに

六九五　あな戀し今も見てしが山がつのかきほに咲けるやまとなでしこ

九四六　知りにけんきゝてもいとへ世の中は浪のさわぎに風ぞしくめる

九六一　思ひきや鄙のわかれにおとろへてあまの繩たぎいさりせんとは

この切では初句に强い表現があつて大抵は例置句法に出來て居る。最後の「思ひきや」の如きは後世澤山の類型があつて、凡て最後は「とは」で結ばれる倒置法に定まつて居る。又初句を名詞にして

三五　梅の花たちよるばかりありしより人のとがむるかにぞしみける

三八二　かへる山なにそはありてあるかひは來てもとまらぬ名にこそありけれ

四四七　郭公みれのくもにやまじりにしありとはきけどみるよしもなき

八四一　藤衣はつるゝ糸はわび人の涙の玉のをとぞなりける
八九九　鏡山いざたちよりて見てゆかん年へぬる身は老いやしぬると

などいふものは、初めに一首の中心的視點を提示する句法で以下に歌はれようとするものか何であるかを示して居る。尤も

四〇七　わたの原(に)やそじまかけてこぎ出でぬと人にはつげよ蜑の釣舟
四一七　夕づく夜(にて)おぼつかなきを玉くしげ二見の浦はあけてこそみめ
七八七　あすか川(の)淵は瀬になる世なりとも思ひそめてん人は忘れじ
七一五　蟬のこゑ(を)聞けば悲しな夏衣うすくや人のならんと思へば
八四〇　神無月(の)時雨にぬるゝもみぢ葉はたゞわび人のたもとなりけり
九九〇　あすか川(の)淵にもあらぬ我宿もせにかはりゆく物にぞありける

などは括弧内の助詞を入れて解くべきものだといふことが、一見してわかるから、いはゞ準連續躰の句法であるし、

七九四　よしの川よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れじ

などは枕詞ですぐ二句に連なることを本質としておかれたものだから本當は初句切ではない。又

七四七　月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

の初句の形は切れては居るが、實は

月や昔の月ならぬ
春や昔の春ならぬ

といふ對句の省略格として成功した表現であるから矢張本來の初句切ではない。

併しこの切は後來もつと強い表現が發達したので、例へば左にあげるやうな初句切に比べると本集の方がやゝ劣つて見える

後拾遺十四、戀四、七七〇「心變りける女に、人に代りて」　清原元輔
契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山浪こさじとは

新古今十羇旅九八〇「和歌所にてをのこども歌つかうまつりしに」　藤原定家朝臣
袖にふけさぞな旅ねの夢も見じ思ふかたより通ふ浦風

同四秋上四〇〇「八月十五日夜和歌所の歌合に海邊秋月といふことを」　宜秋門院丹後
忘れじな難波の秋の夜半の空こと浦にすむ月は見るとも

集中一番少いのは四句で切れたものである。

七五　櫻ちる花のところは春ながら雪ぞ降つつきえがてにする
二一〇　春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴くなる秋霧の上に
二二四　萩が花ちるらんをのの露しもにぬれてをゆかむさ夜はふくとも
七五四　花がたみめならぶ人のあまたあればわすられぬらん數ならぬ身は
一〇六〇　そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに

この切では、四句までで一通り叙述の體は具はつては居るもののそれだけでは龍を描いて睛を點じない物足りなさがある。でその後につゞく結句は僅か一句だけれども全體に強い生彩あらしめる強い力がなければならぬ。つまり四句切は畫龍點睛の構想である。隨て上の四句だけを讀むと、丁度長歌二聯と似たものになる。(四句切の歌は同時に二句切にもなつてゐるものが往々ある)記紀萬葉にあつて、この切は略同じ割合に混じてあるが古今集になると、ずつと減つて居

る。古今集の内でも「讀人知らず」の歌はまだ大分此切のがあるが、純古今集歌人の味となると、滅多と四句切はない。それが新古今時代になると又一段と少くなつて居る。でこの切は長歌や準長歌から分離した古體で後世次第に衰へた調だと思ふ。

又切の如何に拘らず斷句的な味ひ方をしたものは修辭としては勿論優れて居るし、口調の上から見ても成功して居る

二七二　秋風の吹上にたてる白菊は花か、あらぬか、浪のよするか　（これは韻の方からもめでられてなる）

二八七　あきはきぬ、紅葉は宿にふりしきぬ、道ふみ分けてとふ人はなし

六四五　君やこし、我や行きけむ思ほえず、夢か、うつゝか、ねてか、さめてか　（これも下句は脚韻をふんでなる）

三　止め

古今集の「止め」は凡てが用言止と助詞止とであると謂つて可い。助詞止で多いのは感歎助詞の「かな」で止めたもので五十六首もある。

一〇	二九	一〇〇	一二七	二〇六	二六七	三五九	三七九	〇四
四一五	四三五	四六二	四六九	四七三	四八一	四八二	四九〇	四九八
五二一	五五〇	五六一	五六五	五六六	五七九	五八三	五八五	五八八
五九二	六四四	六四八	六七〇	六八二	六八四	六八六	六九一	七九二
八〇八	八一六	八二三	八三四	八四二	八四五	八五二	八五三	八七六
八九四	八九七	九〇〇	九〇二	九九三	一〇〇四	一〇四三	一〇五九	一〇七〇
一一〇三	一一〇七							

以下多いものから順にあげると

を（のにそれにの意	三八	ば	三二	に（不順當）	一九
なん（希望）	一五	つつ	一二	も（咏歎）	一二
に（體言助詞	一〇	なむ（指定）	九	とも	九
や・か・（疑問）	各八	やは	七	と（限定）	七
がな	七	やは	七	は	六
づつ	六	して	六	かは	六
か（咏歎）	五	に（原因）	四	な（勿）	四
は（體言助詞）	三	や（反語）	三	ものから	三
はも	三	ぞ	二	よ	二
まに〳〵	二	とて	二	ものゆゑ	二
や（咏歎）	二	かも	二	は（咏歎）	二

後は各一首宛

まで　の（體言助詞）　ばかり　ながら　か（反語）　かも（反語）　ど　にして　で　が（希望）

かし　こそ

などである。次には助動詞で、斷定を避けて推定の形を好んだ當時の歌人が好んで、「む」とか「め」とか「らむ」とか「らめ」とか柔かい結びを用ひた有様がよくわかる。又過去の助動詞から一轉して「かな」と同様の咏歎を示した過去の「けり」も澤山用ひられて居る。

助動詞

一、想像	らむ八〇	らめ七	む六〇	め一一	まし一九	けむ一五	べく六	べき五
	べし五	らし三	める一	けり七九	ける七二	けれ二〇		
二、時	り二	る四	にき二	し二	たる二	ぬ六	ぬる六	ぬれ一
	て三	てむ五	てき一	てし一	にき二	なむ三	なめ一	つ一
	つる五	つれ二						
三、否定	ず七	ぬ一一	ぬる二	ね二	じ八			
四、指定	なり二六	なる九						
五、詠歎	なり一	なる四						
六、比況	ごと一							

動詞止は百十九首形容詞止は五十七首二つを併せて用言止六百九十五首の四分の一强に當る。その他副詞止が七首體言止が八十五首（その中代名詞止はたつた一つ九九七にある）體言止は記紀時代・萬葉時代・古今集讀人知らず時代の何れよりも遙かに少く、僅八パーセント弱しかない。それが新古今に至つては遙かに多くなつたことは別表の通りである。此の體言止と結句字餘りの歌態は所謂ピラミッド型で一首引締つた形ともなり、體格雄渾とか歌調雄勁とか評せられる歌態になるといふ。それは極めて一般的な格調論としては正しくもあらうが、實際の和歌について觀ると他の立意・構想・修辭の關係上體言止必ずしも雄勁ならず、用言止必ずしも纖弱ならずと云ひたい。今これを立證するには勢、甲の最も短きものを採つて乙の最も長きものに比べるやうな辯證に墮するから止めるが、とにかく歌といふものを止め詞一つで評し去られるべきものではないと思ふ。

一五三　さみだれに物思ひをれば郭公夜深くなきていづち行くらん

六三五　秋の夜も名のみなりけり逢ふといへばことぞともなく明けぬるものを

の前のは「らん」といふ助動詞、後のは「を」といふ助詞を幹部にした止めだが、これ等を纖弱と評することは不當であらう。

左の表は古今集の「切」と「止」とを觀る爲めに他と並べて一覽に便したものである。古事記には百十二首日本書紀には百二十四首併せて二百三十六首の歌謠があるといふが、その實、紀にあるものは凡て記にあつて記と紀との歌謠の差といふものは極めて僅少である。その記の百十二首中の片歌・旋頭歌・長歌・准長歌の歌態も多いが、一番多いのは短歌調の三十九首であるから之を始めに採つた。

次に萬葉二十卷は長期に亘る詠歌の集大成であるから、その中時代の古い卷一の短歌全部を第二に採り、卷二十は防人の歌などが多いから卷十九の大伴家持の作の多くを含んだ部の短歌全部を採つた。此は古今集直前の歌調を代表するものである。

第四には古今集中讀人知らずの作につき四季の部六卷にあるものを採つた。これは本集中の古體で、前の萬葉十九卷につぐ歌調を觀る爲めである。

第五には本集全部を採り、第六には新古今集の始めから　卷春下の二まで採つた。この中には中世上世の歌人の作もあるが、凡て撰者の好み、やがては時代の風調を表すものだから省かず順に採つた。

又、切の總數が採歌數より多いのは一首にして二句切にも四句切にも入つて居るものがあるからである。

第七　形態

六種歌格對照表

		切										止							
		採歌數	初句切	百分比	二句切	百分比	三句切	百分比	四句切	百分比	連續	百分比	體言止 數	百分比	副詞止 數	百分比	用言止 數	百分比	助詞止 數	百分比
古事記短歌調		三九			四	八、八九	六	一三、三三	一〇	二二、二二	二五	五五、五六	六	一五、三八	一	二、五六	一六	四一、〇三	一六	四一、〇三
萬葉	巻一	六五	一	一、五四	一四	二一、五四	八	一二、三一	一一	一六、九二	三一	四七、六九	七	一〇、七七	一	一、五四	二七	四一、五三	三〇	四六、一八
萬葉	巻十九	一二二	三	二、四六	二一	一七、三〇	一七	一三、九三	三五	二八、六七	四六	三七、七二	二〇	一六、三九	〇	〇	五二	四二、六二	五〇	四〇、九九
古今	一巻―六巻讀人しらずの歌	一一八	一二	一〇、一七	三一	二六、二七	二一	一七、八〇	九	七、六三	四五	三八、一四	一二	一〇、六二	一	〇、八八	七三	六四、六〇	二七	二三、八九
古今	全部	一一一一	五三	四、六三	一八七	一六、六七	二六九	二三、九八	四五	四、〇〇	五六九	五〇、七二	八五	七、六五	七	〇、六三	六九四	六二、四七	三二五	二九、二五
新古今集の始め		一〇〇	二五	二三、一五	一四	一二、九六	二八	二五、九三	二	一、八五	三九	三六、一一	三三	三三、〇〇	〇		五〇	五〇、〇〇	一七	一七、〇〇

四　修辭

1、**餘情法**　韻文の秘訣は一隅を擧げて三隅を想はせる工夫にある。餘韻があるとか、含蓄に富んで居るなどいふのは皆この餘情法の運用によるものである。そこで古今集歌人とても此技巧をば至る處に發揮して居る。

五六　見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

一〇〇　まつ人もこぬ物ゆゑに鶯のなきつる枝を折りてけるかな

など一々列擧するの煩に堪へぬ程多い。（それら各自の解について見られたい）

2、**倒置句法**（倒裝法）

一八七　物ごとに秋ぞ悲しきもみぢつゝうつろひ行くを限りとおもへば

は順裝すると

うつろひ行くを限りとおもへば秋ぞ物ごとに悲しき

となるし

八五六　誰みよと花さけるらん白雲のたつのとはやく成にし物を

は順裝すると

白雲のたつのと早く成にしものを花（は）誰（に）見よと（て）さけるらん

となる。これも音數に制約ある短歌としては極めて必要な技巧で、本集歌人亦之が運用を怠らない。唯之が拙くなると徒に晦澁となり繁褥となる。

3、**秀句**

邦人の秀句を好む傾向は早く神代に八百萬諸神の名義や「雉子のひた使」などから風土記地名考・記紀萬葉の枕詞・序詞の有力なる一淵源、並びにそれ等歌謠長短各種歌の修辭として認められたが、古今集歌人はそれをいやが上に愛用して宛ら「秀句にあらざるものは歌にあらず」と謂つた觀がある。

七九〇　時すぎてかれゆくをのゝあさぢには今はおもひぞたえずもえける

七九一　冬がれの野べと我身を思ひせばもえても春を待たましものを

七九二　水の泡の消えてうき身といひながら流れて猶もたのまるゝ哉

などは、ずつと續いて居るし、二二六以下の女郎花など凡て花そのものの擬人を趣向したものだが、その趣向は又皆女郎花と女との秀句で、仕立てられて居る。秀句は輕快な想を咏つたものには佳いのがあるが、拙く使つて失敗してゐるのも稀にはある。

八六二　かりそめのゆきかひぢぞと思ひこし今はかぎりのかどで成けり

は在原滋春臨終の咏で、旅に病んで、末期の水の一滴をだに惠んでくれる近親は誰一人ない邊境の哀愁は一通りは聞えるが、甲斐へ行く途中だとて「ゆきかひぢ」と秀句にしたのはひどく一首の哀調を破して居る。命旦夕に迫つて居る人の口から斯うした駄洒落が出ることかと思ふと何だか浮いたものに見える。

4、**誇張法**　自然味のある誇張は詩には是非入るものだ。藝術の眞とは科學の眞ではない。そこで

六〇　みよし野の山べに咲ける櫻花雪かとのみぞあやまたれける

二六九　久かたの雲の上にてみる菊はあまつほしとぞあやまたれぬる

三八七　いのちだに心にかなふ物ならば何か別のかなしからまし

などの詩味は尤もと肯づかれる。この修辭も本集にはよく用ひられて居るが、時には態とらしい嫌味に墮したものもある。

三九　梅花匂ふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有け。

を始め、六六・一〇五・一六〇などは稍かうした嫌がある。又誇張を底に含めて婉曲に强調したものがあつて此は皆よく出來て居る。

一三四　けふのみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかげかは

一九一　白雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月

六八七　あすか川淵はせになる世なりとも思ひそめてん人は忘れじ

八六〇　露をなどあだなる物と思ひけん我身も草におかぬばかりを

5、**譬喩法**　この期に入つて長足の進歩を迹づけたものの一つである。その中直喩法は萬葉にも可なり多いが、古今では

六　春たてば花とや見らん白雪のかゝれる枝にうぐひすのなく

二七　あさ緑いとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

八一　枝よりもあだに散りにし花なればおちても水のあはとこそなれ

など唯「ごと」とか「ごとし」とか「似たり」とかいふ單調を救ふ爲めに、色々と形に苦心もし又その被喩語と譬喩語との題材花を雪に、柳を絲に落花を泡沫にと樣に當時にあつては目先の新しいものを考へ、尙又それ一つでは不充分と見て大抵は他の技巧をも加勢に加へて精緻な手法となつて居る。

暗喩法は萬葉よりは大分進んだといはれ、數量に於ても他の譬喩に比べて一番多く使はれた。この暗喩の技巧を見ると略當時の歌人が、どんな點に着想したかもよくわかるから左に繁を厭はずその種類を列べておく。

被喩語	譬喩語	歌
雪	花	九・三二三・三三〇
涙	花	一二・二五〇・琴の緒九二一　玉四二四・四二五・八四一
霞	衣	二三
柳條	絲	二六
都花	錦	五六

第七　形態

櫻花	白雲	五九・染殿の后五二
落花	雪	六三・七五・涙八九
容色	花	一一三
雁	舟	二一二
露	涙	二二一・三〇六　緯絲二九一　玉二七・一六五・二二五
山里籠居の身	奥山のいはかき紅葉二八二	
霜	經絲	二九一
雨	經緯の綠	三一四
天皇	月	二八二・八四六・一〇〇三の三五句目
東宮	日	三六四
白髪	雪	四六〇
片戀・忍ぶ戀の心	浮草しげる淵	五三八
契ることば	命	六一三
我身	みるめなき浦	六二三
いひ寄る人	蜑	六二三　山田のそほづ一〇二七
戀	川	六二　・七四九・七九三
戀心	闇	六四六　忘草八〇一・八〇二
戀人	やまと撫子	六九五　郭公七一九　橋姫六八九　須磨の蜑七〇八　武藏野八二一
多情の人・心	大幣	七〇六・一〇四〇

戀人の心	贓焼く煙	七〇八　花染七九五　花七九七　秋八〇四・八二〇
多情の人	玉かづら	七〇九
涙	時雨	七六三　雨八二九・八四三　露七五七　白玉四〇〇・五五六・五五七 川五二七・五三一・五七三・六一七・六一八
我身	三輪の山	七八〇
紅葉	錦	二六五・二八三・二九一・二九六・三一四・四二〇・四二一 つれなき人の言葉七八八　わび人の秋八四〇　幣三〇〇・四二〇　柵三〇三
現し世	夢	八三三・八三四・八三五
死別	川瀬	八三六　流水八三七
生死	今日と明日	八三八
秩	雲	八四三
叙爵	花の衣	八四七
嬉しき心	物品	八六五
五節の舞姫	天女	八七二
雲	水脈	八八二　泡一一〇五
青天白日の身	月	八八五
讒謗	雲	八八五
青壯年の住期	男山	八八九
瀧の飛沫	白玉	九二二・九二三
瀧	布	九二四・九二七　白絲九二五　白髪九二八　白雲九二九
瀧の屏風繪	思ひせく心	九三〇

第七　形態

花の屏風繪	不斷の春	九三一	
世の中	飛鳥川	九三三	浜風九四六
我身	竹のよのはし	九五九	
七條中后	月の光	九六八	
前任地	斧の柄の朽ちし處	九九一	
ふみ	濱千鳥	九九六	
梅の花	衣笠	一〇八一	
細谷川	帶	一〇八二	

又、一一八二の

おく山のいはがき紅葉ちりぬべしてる日の光見る時なくて

のやうに一首を擧げて暗喩的に立意せられたものに

四六七　四七二　四八三　五三九　五四四　七二二　七四八　七五五　七六九　八二八　八六七

八七〇　八七五　八八〇　八八七　八九二　九六七　九九八　一〇一六　一〇九四　一〇六七

などがある。

次には活喩法とも謂ふべき擬人法で、此とても珍しい想ひつきはあるが前期より飛び拔けて進んで居るとは云へない。但その運用は隨分手まめにされて居る、四・六・一〇・一三・一三と次々と見出すことが出來よう。

次には字喩法で、二四九・二五五・三三七の三首あるが、此は格別歌として價値のあるものではない。唯かうした技巧を當時悅ぶ風があつて、此後次第に文學的遊戯(源順の千年五月五日の樣な)に表滑りした歌壇の一病弊は已にこゝに胚胎して居る。

次に諷喩法にも左の三首があつて、此は文學的にも効果を收めてをる。

九五六　よを捨てて山にいる人山にてもなほうき時はいづちゆくらん

一〇六一　世の中のうきたびごとに身をなげば深き谷こそあさくなりなめ

一〇六二　世の中はいかにくるしと思ふらんこゝらの人にうらみらるれば

(その他六二・六三・六七・七四・七七・三八二・九六七なども)

最後に今一つ面白いのは擬物法とも謂ふべき換喩の技巧で、抽象的な「心」を具象化してうまく情趣を活躍させたものがあることだ。

八六四　うれしきをなにつゝまんから衣たもとゆたかにたてといはましを

一〇三八　思ふてふ人の心のくまごとにたちかくれつゝみるよしもがな

6、**緣語法**　此こそは本集歌人の特技とも謂ふべく、若し大膽な臆測を許されるならば、この緣語法こそはこの集修辭の根本的なものである。

二一二　秋風に聲をほにあげてくる舟はあまのとわたる雁にぞ有りける

といふ菅根の歌は大空を海原に、雲を浪に雁を舟に、聲を帆に天の川を港に譬へたものだが、それが咏まれた場面を想ふと、先づ始めに雁を見て「あゝまるで舟のやうだ」と面白く見たのが、抑々でこれは類似聯想から來たといつても單なる譬喩的着想である。記紀萬葉の歌人ならばもうそこに止まつて直ぐにそれだけの直覺を歌にする處だが、一つ小口がほぐれると「サア雁が舟なら海は何だらう、さうだ、丁度あの大空が持つてこいだ、海には波があるが大空で何ぞ似たものはないかな——おつとあるく雲がさうだ……」と斯て一方には舟・海・波・港と緣のある一系列を立て一方には雁

大空・雲・天の川と又縁のある一系列を立てゝきて斯うした一首が出來上つたもので、かう見ると譬喩も對句も疊句さへもこの縁語的着想から派生して居ると謂ひ得よう。

八一　枝よりもあだに散にし花なればおちても水のあわとこそなれ

上の句の「あだに散る」といふ縁で、はかない「あわ」を出したもので矢張縁語から生まれた暗喩である。

一一四　なしと思ふ心はいとによられなんちる花ごとにぬきてとゞめん

絲の脉を曳いて三語を配置せられ「ぬき」は絲が物を貫くことと心の絲が貫くこととをかけたもの、次の「とどめ」も矢張同様の秀句的な意がある。

二六一　雨ふれど露ももらじを笠取の山はいかでかもみぢそめけん

これなどは明らかに縁語と秀句で仕立てられたもので唯これは始め「笠取山」といふ題材があつて、それから上下の縁語と笠をかぶつて雨を防ぐといふ秀句とを想ひついたものである。

七二一　淀川のよどむと人はみるらめどながれてふかき心ある物を

「淀川の」は「よど」にかゝる序詞ともいはれ五音だから枕詞とも見られるが、作意は「淀川のごとくによどむ」と「淀川」が一首の題材を基調づけて、次の淀むは疊音でもあり縁語でもある。それが「ながれて」に至つて淀川の縁語と「ながらへて」の約語との秀句を兼ね、次の「深き」も淀川の縁語でもあり、暗に「淀川も深いしわたしの心も深い」と秀句をも含めたものである

七三三　わたつみと荒れにしとこを今更にはらはゞ袖やあわと浮きなん

七四八　花すゝき我こそしたに思ひしかほにいでて人にむすばれにけり

「わたつみ」の縁語で「あわ」を思ひつきその「あわとうきなん」が、やがて誇張法にもなつて居る。

これも仲平が戀人(伊勢)を「花すゝき」に暗喩したのが始めで、次々縁語を並べたものだが、したは薄の下と心の下との秀句「ほにいでて」は「大びらに、公然と」などの暗喩「結ばれ」は「あだし男に愛せられる」の暗喩であるが、又「下に思ふ」と「ほにいづる」とは對照法でもある。

七八二　今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへにうつろひにけり

も「時雨」の縁語で繋がつて居るが「時雨にふり」は「時雨の如くにふり」で直喩その「ふり」は「降り」と「ふるび」の「ふり」の秀句「言の葉」の「葉」は「木の葉」の秀句「うつろひ」も對手の愛の衰へと木の葉の凋落とをかけた秀句である。その他

八八二　天川雲の水脈にてはやければ光とゞめず月ぞ流るゝ

九七二　野とならば鶉となきて年はへんかりにだにやは君はこざらん

九七三　我を君なにはの浦にありしかばうきめをみつのあまとなりにき

一〇〇〇　山川の音にのみきくもゝしきを身をはやながらみるよしもがな

一〇〇六　おきつなみあれのみまさる宮のうちは年へてすみしいせのあまも舟ながしたる心地して寄らんかたなくかなしきに云々

一〇二〇　秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりすなく

等何れも同趣のもので、古今集歌人得意の技といふのは實にこの縁語の綾絲をかゞつてうまく一首の題材を繋ぎ、まるで左官師が「こて」で上塗りをするやうな手法を自在に操縦するに在つたといつても過言ではあるまい。で、縁語法と銘打つ程でなくとも大抵の歌にはこの種の技巧が陰になり日なたに廻りして趣向なり調子なりを整へて居る。

7、**對照法**　これも亦澤山あるが、これは極めて原始的な手法で已に文學始源の上代からずつと慣用されてをる手法である。

一九　み山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜つみけり
二六　青柳のいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにけり
二八　もゝちどりさえづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく
八〇　たれこめて春のゆくへもしらぬまに待ちし櫻もうつろひにけり
二一〇　春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋霧の上に

などを見ると、同じ對照法と謂つても祝詞や宣命にあるやうな大味なものではなく、相當强い感激が盛られてある。

8、**警句法**

五三　世の中に絶えて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

と様のものは數は少いが佳いものが多い。(五四・七一・八二・九二・三八七・四一八・五二〇・八七九・九〇三・一〇四九・一〇五二等)

9、**疊句・疊語・疊音**　古い修辭法だが、古今集歌人はこれをも倣うて調の流麗を助け又趣向の美をすら發揮して居る。

七四　櫻花ちらばちらなむちらずとて故郷人のきてもみなくに
五六六　かきくらし降る白雪の下ぎえにきえて物おもふ頃にもあるかな
九四二　よの中は夢かうつゝかうつゝとも夢とも知らず有りてなければ
九四三　世の中にいづら我身のありてなし哀とやいはんあなうとやいはん
一〇四一　われをおもふ人をおもはぬ報にやわがおもふ人の我をおもはぬ
二四八　里は荒れて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる

10、**其他省略法・引用法**　もいくらか用ひられ、折句が二首(四一〇・四三九)おなじ文字なき歌が一首(九五五)物名が五十二首(四二二—四六八、一一〇一—一一〇五)ある。

11、**統計**　尙主なる修辭法の類は

一、餘情法　一九四　二、倒置法　二〇六　三、秀句法　二〇二　四、誇張法　一一九
五、譬喩法　四五七
內、1、直喩法一〇九　2、暗喩法一三七　3、活喩法一八九　4、字喩法三　5、諷喩法一〇　6、換喩法二
六、緣語法　七五(外に他の諸法に混じて澤山ある)　七、對照法　六一　八、警句法　一三
九、疊音・疊語・疊句　九三

12、**索引**　以上の中接頭語・接尾語・枕詞序詞は左に索引風に列擧しおく。この中序詞の中の「あさぢふの小野のしのはらしのぶとも」のやうに疊音で連ねるものは此期に入つて頓に增加したもので、皆で三十四種ある。之を全體の百四十五種で割ると約二割四分を占めてをる。これは特に注意すべきものかと思ふ。

イ、接頭語(五種)
たま(藻)　五六五、九一六　ふり(さけみれば)　四〇六　み　へ(やま)　一九、一一八、一〇七七
み(よしの)　六〇、三一七、三二五、三二七、四三一　み(雪)　三一七、三三三

ロ、接尾語(一種)
み　山高み八七、三五八、四四六、四九四、九三七　ちりぬべみ二八一　水きよみ三〇四
夜を寒み四一六、六六三　よるべなみ六一九　風をいたみ七〇八　おさを荒み七五八
野風を寒み七八一　板間荒み一〇〇二　里遠み一〇七九

第七　形　態

八、枕　詞（三三種）

あさぢふの（小野）　五〇五　　あしがきの（まぢかけれども）　五〇六
あしびきの（山）　五九、一四〇、二一六、三一九、四三〇、四六一、四九一、四九九、一〇〇一、一〇二七、一〇六七、一一〇三、八七七、八四四、九五三
あづさゆみ（春）　二〇、一一五、一二七　（いそべの小松）　九〇七　　あまびこの（音づれじとぞ）　九六三
あらたまの（年）　三三九、一〇〇二、一〇〇四　　いそのかみ（ふりにし）　一〇二二、八七〇
うつせみの（世）　四四三、七一六　　おきつなみ（荒れのみまさる）　一〇〇六
おくつゆの（消なば消ぬべく）　一〇〇一　　かくなはに（思ひみだれて）　一〇〇一
からごろも（たつ）　三七五　（ひも夕暮に）五一五　　からにしき（たつたの山の）　一〇〇二
くれたけの（よゝ）　一〇〇二、一〇〇三　　さゝがにの（蜘蛛）　一一一〇
しろたえの（衣）　一〇〇一　（袖）二二　　すみぞめの（夕）　一〇〇一
たまくしげ（あけば）六四二　（二見の浦）四一七　　たまのをの（短き）　一〇〇二
たまほこの（道）　七三八　　たらちねの（おや）　三六八
ちはやふる（神）二五四、二六二、三四八、一〇〇二、一〇〇五　（うぢの橋守）九〇四　（賀茂のやしろ）四八七、一一〇〇
ぬばたまの（我黒髪）四六〇　（闇）・四七　（夢）四四九　　むばたまの（よる）　五二六　五五四
まがねふく（きびの中山）　一〇八二　　はるがすみ（よそにも人に）　一〇一
ひさかたの（雲）二六九　（天）一七三、一七四、三三四、七五一　（月）一九四、四五二　（光）八四　（晝）一〇〇二
ふじのねの（もえつゝとはに）　一〇〇一　　ふるゆきの（けなばけぬべく）　一〇〇一
ゆくみづの（絶ゆるときなく）　一〇〇一　　ゆふづくよ（小倉の山）　三一二
わかくさの（妻）　一七　　わたつみの（沖）　一〇〇一

あ
二四

二、序　詞（一四五種）

あきかぜにあへずちりぬる紅葉ばの（行くへ定めぬ）　二八六
あきかぜの吹きうらがへす葛の葉の（うらみてもなほ）　八二三
あきのたのいなばの（そよと）　五八四
あきのたの（いれてふことも　八〇三
あきののにみだれて咲ける花の色の（千ぐさにものを）　五八三
あきののをばなにまじり咲く花の（色にやこひむ）　四九七
あさぢふの小野の篠原（しのぶとも）　五〇
あさつゆの（おきてし行けば）　三七五
あさつゆのおくての山田（かりそめに）　八四二
あさなあさな立つ川霧の（空にのみ）　五一三
あしかものさわぐ入江の白浪の（しらずや人を）　五三三
あしたづの音に（なかぬ日はなし　七七九
あしびきの山たちばなの（色にいでぬべし）　六六八
あしびきのやまより月の（いでてこそ來れ）　六三三
あづさゆみ（おしてはるさめ）　二〇

あづさゆみ（ひきののつゞら） 七〇二
あづさゆみ引けばもとすゑ我かたに よるこそまされ） 六一〇
あづまぢのさやの中山（なかなかに） 五九四
あふさかやまの篠すゝき（ほには出ずも） 一一〇七
あまぐもの（よそにも人の） 七八四
あまごろも（田簑の島に） 九一三
あまのかる藻にすむ蟲の（我からと） 八〇七
あまびとの（おとはの山の） 一〇〇二
ありあけの（つれなく見えし） 六二五

い

九

いかほのぬまの（いかにして） 一〇〇三
いけにすむ名をなし鳥の水をあさみ（かくるとすれどあらはれにけり） 六七二
いせのうみのあまのつりなは（打はへて） 五一〇
いせのうみのうらのしほがひ（拾ひ集め） 一〇〇二
いそのかみふるからをののもとがしは（もとの心は） 八八六
いそのかみふるのなかみち（なかなかに） 五九四
いはまゆく水の白浪（立かへり） 六八二
いぬかみのとこの山なるいさや川（いさとこたへよ） 一一〇八

いもとわがぬる（とこなつの花） 一六七

う

二

うぐひすのこぞのやどりの（ふるすとや） 一〇四
うのはなの（憂き世の中） 一六四

お

九

おきつなみ（たかしのはまの） 九一六
おきべにもよらぬ玉藻の浪の上に（亂れてのみや） 五三二
おくやまの菅の根しのぎ降る雪の（けぬとかいはん） 五五一
おしてるやなにはの浦に燒くしほの（からくも我は） 八九四
おとにのみきくの白露（よるは起きて） 四七二
おとはのたきの（音にきく） 一〇〇三
おとはやま 音にきゝつゝ 四七三
おほふれの（ゆたのたゆたに） 五〇八
おもひいづるときはの山のいはつゝじ（いはねばこそあれ） 四九五

か

一四

かすがのの雪間をわけておひ出くる草の（はつかに見えし君はも） 四七八

かくれぬの(したにかよひて) 六六一
かくれぬのしたよりおふるれぬなはの(れぬ名は苦し) 一〇三六
かぜふけばおきつしらなみ(立田山) 九九四
かぜふけば峯にわかるゝ横雲の(絶えてつれなき) 六〇一
かはのせになびくたまもの(みがくれて) 五六五
からくれなゐの(ふりでてぞなく) 一四八
からごろも(きつゝなれにし) 四一〇
からごろも(たもとゆたかに) 八六五
からごろも(なればみにこそ) 七八五
からにしき(たゝまくをしき) 八六四
かりてほす山田の稲の(こきたれて) 九三二
かりのくるみねのあさぎり(晴れずのみ) 九三五
かるかやの(亂れてあれど) 一〇五二

き 二

きみがさす(みかさの山の) 一〇一〇
きみをおもひ沖津の濱になくたづの(たづねくればぞ) 九一四

く 五

くもはれぬあさまの山の(あさましや) 一〇五〇
くれたけの(うきふしごとに) 九五八
くれなゐの(色には出でじ) 六六一
くれなゐの末摘花の(色に出でなむ) 四九六
くれなゐの初花染の色(深く思ひし心) 七二三

こ 一

こしのくになるしら山の(頭は白く) 一〇〇三

さ 三

さつきやま梢を高み時鳥(なく音空なる) 五七九
さゝのはにおく初霜の夜を寒み(しみはつくとも) 六六三
さゝのはにふりつむ雪のうれを重みもと(くだり行く) 八九一

ち 八

しきしまのやまとにはあらぬからころも(頃もへずして) 六九七
しずのをだまき(いやしきも) 八八八
しほがまのまがきがしまの松ぞ戀しき 一〇八九
しもとゆふかつらぎ山に降る雪の(まなく時なく) 一〇七〇

しらかはの（しらずともいはじ）　六六六
しらつゆの（おくとはなげき）　四八六
しらまゆみ（おきふしよるは）　六〇五
しらゆきのやへふりしけるかへる山（かへるがへるも）　九〇二

す　二

すまのあまの鹽燒くころも筬をあらみ（間遠にあれや）　七五八
すみのえの岸による波（よるさへや）　五五九

た　四

たえずゆく飛鳥の川の（よどみなば）　七二〇
たきつせに根ざしとゞめぬ浮草の（うきたる戀も）　五九二
たまかづら（今は絕ゆとや）　七六二
たまのをの短き心思ひあへずなほあらたまの年をへて大宮にのみひさかたのひるよるわかず仕ふとてかへりみもせぬ我庵のしのぶ草おふる板間荒み降る春雨の（もりやしぬらん）　一〇〇二

ち　一

ちはやふるかものやしろのゆふだすき（ひとひも君をかけぬ日はなし）　四八七

つ　二

つきくさの（うつし心は）　七一一
つのくにのなにはのあしのめもはるに（しげき我戀）　六〇四

と　一

とぶとりの聲もきこえぬ奧山の（深き心を）　五三五

な　一〇

ながらのはしの（ながらへて）　八二六、一〇〇三
なつくさのうへはしげれる沼水の（行くかたのなき我心かな）　四六二
なつくさの（深くも人の）　六八六
なつごろも（うすくや人の）　七一五
なつのの（繁くとも）　七〇四
なつびきの手引のいとを（くりかへし）　一一六
なとりがはせゞのうもれ木（あらはれば）　六五〇
なにはのうらに立つ波の（なみのしはにやおぼほれん）　一〇〇三
なよたけの（よながきうへに）　九九三
なるかみの（音にきゝつゝ）　四八二

は　一二

はつかりの　なきこそわたれ）　八〇四
はつかりの（なきてわたると）　七三五
はつかりの（音にぞなきぬる）　七七六
はつしもの（おきゐてものを）　九九三
はながたみ（めならぶ人の）　七五四
はなすゝき（などかほにいでゝ）　五四九
はなすゝき（ほにいでてこひば）　六五三
はなにはるがすみ野にも山にも（立ちみちにけり）　六七五
はるがすみ（立出でて君が）　九九九
はるたてば消ゆる氷の（殘りなく）　五四二
はるがすみたなびく山の櫻花（見れども飽かぬ）　六八四
はるのひの　ながくや人を）　六二四

ふ　三

ふきまよふ野風を寒み秋萩の（うつりも行くか）　七八一
ふゆくさの（かれにし人は）　三三八
ふゆのいけにすむにほ鳥の（つれもなく底にかよふと）　六六二

ほ　二

ほとゝぎすなくやさつきのあやめ草　あやめもしらぬ　四六九
ほりえこぐたななし小舟こぎかへり（同じ人にや）　七三二

ま　一

まこもかる淀の澤水雨ふれば（常よりことに）　五八七

み　一〇

みちのくにありといふなる名取川（なき名とりては）　六二八
みちのくのあさかの沼の花がつみ（かつみる人に）　六七七
みちのくのあだちのまゆみ我ひかば（末さへよりこ）　一〇七八
みちのくのしのぶ文字摺誰故に亂れむと思ふ）　七二四
みつしほのながれ（ひるまをあひがたみ）　六六五
みづのもに生ふるさつきの浮草の（うきことあれや）　九七六
みなせがは（何にふかめて）　七六〇
みののくに關の藤川（絶えずして）　一〇八四
みまさかや久米の皿山（さらく＼に）　一〇八三
みよしのの大川の邊の藤波の（なみに思はゞ）　六九九

む　二

むすぶての雫に濁る山の井の（飽かでも人に）　四〇四
むらさきのねずりの衣　色にいづな夢）　六五二

も　一

もがみがはのぼればくだる稲舟の（いなにはあらず）　一〇九二

や　六

やまがつのかきほにはへる靑つゞら（人はくれども）　七四三
やまかはの（音にのみきく）　一〇〇〇
やましなのおとはのたきの（音にだに）　一一〇九
やましなのおとはのやまの（音にだに）　六六四
やましろの淀のわかごも（かりにだに）　七五九
やまのゐの（淺き心も）　七六四

よ　六

よしのがはいはきり通し行く水の（音にはたてじ）　四九二
よしのがはいはなみたかく行く水の（早くぞ人を）　四七一
よしのがは（よしやひとこそ）　七九四

よどがはの（淀むと人は）　七二一
よひのまにいでて入りぬる三日月の（われてもの思ふ）　一〇五九
よひよひにぬぎてわがぬるかり衣（かけて思はぬ）　五九三

わ　四

わがそのの梅のほずゑに鶯の（音になきぬべき）　四九八
わがやどの菊のかきねにおく霜の（きえかへりてぞ）　五六四
わたつうみの沖つ汐合に浮ぶ泡の（消えぬものから寄るかたもなし）　九一〇
わたのはらよせくるなみの（しばしばも）　九一二

を　一

をふのうらに片枝さしおほひなる梨の（なりもならずも）　一〇九九

第八　趣味と思想と題材と

古今集二十卷は思想的に何を示すか、今日吾々が之を讀んで何等か示唆と暗示を受容する處があるか？　かうした質問をするものは餅屋へ行つて「正宗の罎詰があるか？」といつたやうなお門違ひをした人である。古今集は聖典でも經典でもない。それで居て時には經典や聖典と同じく崇拜の對象ともなつた。それは宗敎や哲學としてでなく趣味の寶庫としての崇拜であつた。趣味の寶庫――殊に日本趣味の寶庫として詞藻界に此程偉大な跡を遺した集は他に匹儔を見ない。暫らく視野を他の姉妹藝術や文化に擴げて見ると、本集中よく歌材になつたものに繪畫がある。瀧の繪を見ては「思ひせく心の中の瀧」といひ秋の田園を描いたものには「刈りてほす山田の稻のこきたれて」といひ、花の屛風繪には久遠の春とたゝへ、住吉を描いたものには秋風を想像して「聲打そふる沖津白浪」と歌ふ。この繪畫は奈良朝の餘風を承けて始めは專ら佛畫の（曼荼羅繪のやうな）やうな題材ばかり書いてゐたものが百濟河成・巨勢金岡の巨臂が出て次第に日本的な畫風となり、西の京や宇治の網代や年中行事をも題材とし、天井板や引目鍵鼻の骨法をも始め徒に唐朝の畫風に追隨しないで、現下の眞に迫る寫實に眼きめて來た。河成の描いた死屍の幻怪は飛驒内匠を驚かし、金岡の馬は夜な〳〵萩の戸の庭を荒れるので更に描きそへて、繫ぎ止めて以來おとなしくなつたといふ傳說もそのまゝ本當ではないまでも如何にも當時の繪畫の寫實風を物語つて居る。その三世の孫廣高は五重の山を描き分けたが、倘父祖十五重の描寫には及ばなかつたともある。（花鳥餘情　內裡中には式乾門內に繪所を設けさせられ、宇多上皇・花山上皇と次第に上流趣味となり、花山法皇の牛車の走る處や貧富生活種々相を描きわけられたあて繪は、いつのまにかうした細かな點まで御觀察になつたことかと大鏡の翁が時人の驚歎した評を物語つて居る程であつた。それが段々と發達して寬弘朝になると文學とも提携し附帶裝飾とも相俟つて今日それを聞いても如何にも古めかしく、みやびかなものと想はれる。源氏物語繪合の卷は即ち當時の繪畫の發達の度を反映するもので一方が竹取物語の繪を出した處には「繪は巨勢相覽、手は紀貫之書けり。かんや紙にからの綺をばいして、あかむらさきの表紙紫檀の軸よのつねのよそひなり」と秋好中宮方の古典的な好みを見せると、次は文に對抗する弘徽殿女御方の近代趣味を見せてうつぼの俊蔭の繪卷とし「白き色紙青き表紙　黃なる玉の軸なり。繪は常則手は道風なればいまめかしうをかしげに目もかゞやくまで見ゆ」と次々にかうした取合せをして最後に源氏が須磨の侘住居に書かれたもので秋好中宮に贈られたものが出ると、右方は顏色なしと云つて勝利は見事中宮に歸したとあるは、須磨のスケツチに團扇をあげた描き方だ。

（この一卷は當時の世相の反映として實に興深いものがあつて、彼の一條天皇を中心として道隆對道長、定子對彰子、紫女對淸女云々と前に云つた通りのことを小評化して、冷泉院を中心に源氏對頭中將、秋好中宮（前齋宮女御・梅壺女御）對弘徽殿、平典侍・侍從內侍・少將命婦對大貳內侍・中將命婦・兵衞命婦としこの繪合に中宮方勝利となりそれより君寵も政權（但しこれはその以前から）もこの系統に集まると樣に描かれてある）

この頃に書かれたもので現傳するものは多くないからとかくの評は下しかねるが、唐風を脫して日本畫の一派を開いたといふ點は漢詩集を離れて和歌集を出した傾向とよく似て居るといひ、條繪の方は今日から見ては恐らくは粗硬稚拙なもので後年土佐派の鼻祖隆能、隆親などが出て源氏物語繪卷・扇面古寫經などを描くに至つて始めて古今集程度の纖細巧緻さとなつたものである

又この集には所々屛風繪の歌を召すのに歌も上手書も上手の人を選ばれた事が出て居る（賀歌や大歌所御歌）書道は今日から見ても上代の方が遙に優れて居る。東瀛珠光などにある聖武天皇や光明皇后の御宸筆御筆蹟は中々立派なものだが、まだ支那風を脫しきらないものだといふ。僧空海が渡唐して韓方明に書を學び之を自家の書風に結體したもの

是即ち我國入木道の始めである。（「入木道」といふその名からが已に藝術の尊貴を高揚して居る。晋代の能書王羲之成帝の朝に北郊の祀の祝版を書いたが、後にその版を削つて見ると墨痕の浸透深さ七寸に達して居たといふ。入木の名は此から出た）空海と前後して嵯峨天皇・橘逸勢の筆が名高く三筆の目は小學生すら知る位になつた。弘仁九年（一四七八）殿閣諸門の額を改められる時北面の額は時のみかど嵯峨天皇の御宸筆東面は逸勢、南面と應天門は空海が書いた。その一部は寫眞版などで現に見られる通り大體晋唐瑰麗の風を傳へたものだが、それで居てどこかに敏活快利の筆致の閃きがあると稱せられて居る。唐制模倣から純日本への眼さめはかうした文字の端々にまで仄見えた譯である。後に小野道風・藤原佐理・藤原行成の三蹟が出るやうになつて野蹟・佐蹟・權蹟（世尊寺流）の目は純日本風書體の正系として後世永くその流風餘韻が榮えた。その一人の道風は實にこの延喜の御代の人なのである。三筆の目にこそ入らね古今集の篁や敏行や道眞はそれ等にも劣らない能筆であつた。處で一方平假名の廣布と共に全く日本特有の平假名や後世所謂變態假名（當時は之も正式の平假名）を美しく書き續けることによつて此方の名手として、敏行や素性や貫之などは毎度朝廷の御用に奉仕して居る。當時の平假名がどこまで美しく書かれたものか、今日では考察の資料がないが、傳貫之筆と稱せられる王朝末期のものを見ても略想像されるやうに、近世江戸派の千蔭や春海の平假名に比べては是亦粗硬なもので、此を一歩溯つた王朝初期ならばもつと硬々しくぎごちなくまだ〳〵漢字離れのしない、雄勁な骨法が隨處に見え隱れすること宛ら拙い男俳優が女性に扮した肩付き手つきを見るやうな趣もあつたらうと思ふが、それは書道史的に沿革を眺めていふことで、吾々のやうに鉛筆と萬年筆とで毎日金釘を陳列させて居るものの眼から見ては如何にもしなやかで、みやびやかで流水の如く飛煙の如く遊絲の如く絹縷の如しとでも謂ひたいもので、和歌の扮裝としては少くとも萬葉假名よりは遙かにふさはしいものであつたらうと思ふ。唯併し、これとても歌の優美纖麗と同じ程度にまで優美であり纖麗であつたかどうかといふことになると、臆測ではあるが尚歌は書に比して一歩の長があつたと想ふ。

次に古今集には大歌所御歌といふがあり酒をたうべてあそびを催した時の歌といふものもあり、歌の幾分には當時の俚謠や歌謠も混じて居る。當時の「あそび」といふは此節の「あそび」とは大分内容を異にし、主として管絃樂や舞踊を意味したものである。そして其樂舞なるものも外來の輸入のものが大部分で振舞（エンブ）・皇帝破陣樂（武德太平樂）春鶯囀（天長寶壽春鶯囀天壽樂・長壽樂）等は支那から菩薩・迦陵頻・胡飲酒等は天竺から新鳥蘇・古鳥蘇・退走禿（タイシヤウトク）等は高麗から傳つたものだといふ。然るに王朝に入るとこゝにも日本化の手が染められて嵯峨の御代には秋風樂・賀皇恩を改められ、仁明天皇は御親ら拾翠・應天・河南・長生・西王の五樂を製作あらせられ、宇多天皇も北庭樂を御親製あり、延喜當代には春庭樂・胡蝶・延喜樂を作出されたし、溢金樂・承和樂・十天樂・和風樂・散手・天人樂・喜春樂・海青樂・央宮樂・承燕樂・夏引樂・夏草井等も嵯峨・仁明の兩朝に亘つて作り出されたものだといふ。處でそれにも嫌らずとして此等舞樂を掌る雅樂寮の外別に純日本舞樂を教習する大歌所なるものが設けられた　それはいつの事であつたか正確な記錄は無いが文德實錄嘉祥三年十一月の記事もあり本集には承和の御への吉備の國の歌もあるから、先づは古今集時代と觀て宜しからう斯して廷儀・私儀・宴遊・神事・佛會の折節毎に在來の雅樂と共に神樂・催馬樂・風俗・東遊の歌などが奏せられるやうになつた。さてかう併行する漢和樂舞の中果してどちらが當時の人々の胸にピタリと響くものがあつたらうか、余想ふに唐樂はそれが外來樂であり古典樂であるが故に空間時間のヴェールを被せた錯覺で「あゝ面白い」「あゝ美事」などと謂つたものの實をいへば彼等の心から享樂したのは後の日本舞樂であつたらう。さうならこそこの系統の神樂歌や催馬樂や風俗は段々流布し民衆化さへされるやうになつたのである。處でその青海波の樂舞など源氏物語紅葉賀などではどんな立派な舞であらうと想はれるし、現傳の繪を見ても古雅な趣は想像せられるが、殊に之に合せて作つた小野篁の味

桂殿迎初歳　桐樓媚早年　折花梅樹下　蝶燕畫梁遊　（愚考一本「舞蝶」とあるが宜いと思ふ）

は、まるで神仙の境と神女の境を一つにしたやうな詞だがその舞の振は果してどうあつたらう。今日朝鮮から歸つた或先輩が、在鮮當時町の富豪に招かれて庭苑を漫歩して居ると植込の向ふに瀧があるからといふので見に行くと「飛流直下三千尺」と李太白の一句が麗々しく榜示してあるからいよ〳〵好奇の胸を躍らせて、さていよ〳〵本物の瀧は？と見れば何のことはない丁度日本の子供が夏になると、バケツに水を入れて硝子の管でする噴水大の水がショロ〳〵と二筋三筋流れてゐるだけであつたとのことだが、當時の舞樂とても青海波・賀王恩と名のみ徒らに大袈裟でその實は唯服裝や道具が少しばかり變つただけで波のうねりの舞の振とても單に一左一右の緩歩漫歩に止まつたらう。

では新興舞樂の大歌所の樂舞はどうかといふに、此とてもあまり大した進歩ではなかつたらうことは歌謠史資料傳へる所の神樂歌譜などを見ても別かる。唯これが當時の人々に觸れる點があるといつたのはその歌詞が、生々しい現實味を持つて居つたからであらう。して見るとこの舞樂の方とても矢張古今集と同じ方向に進展はしたもののそれが古今集を提撕するまでには至つてゐない。否寧ろ古今集並にこの種和歌の力によつてその進展を促された氣味がある。

斯う觀て來ると、當時の繪畫にしても書にしても樂舞にしても日本趣味に眼さめようとする傾向に於てはこの集と歸趣を一にしては居るものの、この集程に大きな痕跡を遺すまでには生長してゐないことがわかる。この外にまだ彫刻があるが、これは技術そのものは別としてその理想は全然佛教の範疇を逸脱し得ないものであつた。即ち木彫にしても、乾漆像にしても塑像にしてもその題材は皆佛教的なものばかりであつた。（武藏村主多科丸、紀州能應寺の十一面觀音像・傳弘法作の京都東寺の不動明王像等）

古今集を通讀して見出される趣味の一つに「調和」がある。枕詞といひ序詞といひ對照法といひ緣語法といひ乃至その他の格といひ所詮はその調和の趣味から派生した表現美なのである。「白露の消なば消ぬべく」といひ「からにしきたつたの山」といひ「あさつゆのおくての山田かりそめに」といひ「いせの海の浦のしほがひ拾ひ集め」といふ皆その聯接に調和を求めたものだ。「久かたの光のどけき春の日」を歌つては結びを想像の「らむ」にして全體のなごかな調子に合はせ、上に刺戟的な語句があれば、下に字餘りを工夫して輕重の均衡を考へたのも調和なり「今日こずばあすは雪とぞ降りなまし」として「散りなまし」といはないのも調和で、古今集秀歌の凡ては意味の調和か音調の調和か時には意調双方の調和によつて詠まれたものだ。この傾向は服裝の趣味とも一致するもので表を白裏を赤にして櫻襲とに表裏の色の配合から工夫せられた青朽葉・赤朽葉・裏山吹・紅梅匂と二百種内外ある配合は矢張調和美の要求から出たものだ。又當時の住宅の寢殿造の寢殿を中心に東の渡殿があると西の渡殿があり東の對と西の對、甲の釣殿と乙の泉殿とシムメトリカルに均齊を保つたのも又この調和美を發揮したものだ。

長德元年二月十日一條后定子の妹淑景舍の君が春宮に御入内後始めての御對面とて、登花殿の二間で中宮を始め道隆夫妻以下殆どこの近親の家族會議のやうなものを催された處を寫した清女の筆は殊に冴えたものだが、その中に當時の上流が如何に服裝の調和を悦んだかがわかる數節がある。始めに中宮のことを

紅梅の固紋浮紋の御衣ども、紅の打ちたる御衣三重がうへにたゞ引重ねて奉りたるに、宮「紅梅には濃き衣こそをかしけれ。今は紅梅は着でもありぬべし。されど萌黄などのにくければ紅にはあはぬなり」と宣はすれど、只いとめでたく見えさせ給ふ」

とあつて、中宮の容姿の美しいこと、何を召してもよく着こなされるのでうつりの佳くていらせられることをめで奉りつゞいて御屏風の蔭から方々のを覗いて例の縫針目までも見遁すまじき彼女の觀察をば、事も細かに叙して居る。

うへは白き御衣ども紅の張りたる二つばかり、女房の裳なめり引き掛けて、奥によりて、東面におはすれば、たゞ御衣などぞ見ゆる。淑景舍は北にすこし寄りて、南向におはす。紅梅どもあまた濃く薄くて、濃き綾の御衣、すこし赤き蘇芳の織物の袿萌黄の固紋の若やかなる御衣奉りて扇をつとさし隱し給へり いといみじくげにめでたく美しと見え給ふ。殿は薄色の直衣萌黄の織物の御指貫、紅の御衣ども御紐さして、廂の柱にうしろをあてて、此方ざまに向きておはします　め

でたき御有樣どもなうち笑みて、例のたはぶれ言なせさせ給ふ。
淑景舎の繪に描きたるやうに美しげにて居させ給へるに宮いと安らかに、今すこし大人びさせ給へる御氣色の、紅の御衣に匂ひ合はせ給ひて、なほ類はいかでかと見えさせ給ふ。

同じ筆致で、彼女は「淸涼殿の丑寅の隅」の一段に勾欄のあたり咲きも殘らず散りも始めぬ滿開の櫻を靑磁の花瓶に活けた春快晴の眞晝美男の兄君伊周が「櫻の直衣の少しなよらかなるに濃き紫の指貫白き御衣ども、うへに濃き綾のいとあでやかなるを出だして」參內した有樣を折ふさはしい美として口を極めてめでてをる。これ等は丁度本集五二の良房の歌と同じく調和美享受の悅樂を表したものと思ふ。

又住宅建築の方で一例をあげるなら、宮城の中工藝美術的に見て、一番立派なものは八省院の一構だといふ。傳說によるとこの一廓は特に桓武天皇御親ら工事を御監督になつたが、正面の應天門の高さが一尺高過ぎるとあつて低めるやうに仰せられたが、心なの大工は「さうさう低くする必要はない」と云つて內證で五寸だけ低くして「一尺低めました」と申上げた。それを御覽になつて天皇が「これは朕の見損であつた。まだ五寸高い。これなら一尺五寸低くせよといへばよかつた」と仰せになる。承つた大工ども恐入つてその實を申して御赦しを得て事濟みになつたが、天皇がこの一廓の建築が高くて後日果せる哉烈風の時、中の建物はビクともせなかつたが、應天門だけが倒れたといふ。天皇がこの一廓の建築に御苦心あらせられたことも建築の微妙な工藝美術であることもこれによつて察せられるが（此と似た話は橘南谿の東遊記にもある）若しこれが事實だとすれば　天皇の思召は力學的な御眼識もさることながら又一面調和の趣味にあつたことと察し奉ることが出來る。つまり中の建物と比べて不恰好だと思召されたからであらう。といふのは左に引用する伊東博士のお話によつてこの建築が如何に調和均齊の美に苦心して出來たものであるかが察せられるからだ。

大極殿の形は長方形であつて、廣さ十一楹百七十六尺、深さ四楹五十二尺、即ち二百五十四坪餘の建物で、中は仕切なしで一間である。眞中に高御座があつて御出御になるだけであります。其建物は所謂丹楹碧甍と云ふのでありまして、外は全部丹で塗つてあり、屋根は碧甍で葺いてあり四注造りの棟の兩端に金銅の鴟尾が輝いて居た。床は五色の甃即ち敷瓦であり、朱欄靑瑣と云つて、欄干は朱塗りで綠靑の櫺子窓が付いて居る。或は又金瑠玉礎と云つて瑠は即ち瓦當、即ち巴瓦のことを言ふので、それに金箔が押してあつた。玉礎と云ふのは大理石の礎である。斯う云ふ譯で洵に美しい建築である。大きさから云つても宮室建築の王でありますが、それよりも面白い事と思ふことは、大極殿以下の建築が非常に意匠に富んで居つて、實に技工を盡した建築であつた事である。

大極殿の前に左右一對の樓があり、折れ曲つた廓に由て接續して居る。この左右均勢の思想は勿論支那傳來で、樓は東の方を蒼龍、西の方を白虎と云ふ。同大同形で、その屋根の上に五つの小樓が五の目に載つて居る。五小樓は互に連結を取つて居つたらしいのであるが確實には分りませぬ。繪卷物などを見ても要領を得ない　斯んな不思議な意匠考案は此以後に見た事はない。それからもつと不思議なものは應天門の前に左右均齊に奇拔な樓が對峙して居る。東方を棲鳳と云ひ、西方を翔鳳と言ふ。建物の形が左右均齊であるばかりでなく、命名も左右相對である。樓の平面圖は乙字形と云へる。その姿はやゝ複雜であつて玆に詳細は悉し兼ねますが、頗る奇巧なものであります。兩樓と應天門とは閣廊を以て連結して居る。この閣廊は、應天門とその次にある會昌門の間の中庭を繞つて、兩門を連結して居る。斯の多き奇巧を盡した建築は恐らくは支那にもその他の國にも餘り類例が無い樣に思ひます。（日本趣味十種四一七―四一九）

次には自然美享樂といふことである。少くとも古今集最初の六卷はこの趣味の文學化と謂つて可い。近頃は行旅の便と趣味の向上につれて日本內地の山水のみでは慊らずとして朝鮮金剛の雄姿南蜀の三峽五嶽の嶮奇を見たり、エヴェレストの雄大、ナイアガラの壯美を語る人もふえたが、王朝時代の我等の祖先はさうした大自然を見ようといふのではない。唯眼前視野に展開する花に鳥に風に月に、行雲に流水に心目を托して悠々適樂するのである。是併しながら萬人の已に齊しく認めて居る處だから今更喋々するまでもなからう。

自然を愛好する王朝人は又その自然を模倣して小自然――ミクロネーチユアを作つて之を一つの樂しみにした。二七二には寛平の御時の菊合の歌があるが、當時の光景は群書類從に入れてある記錄で略察せられる。あの場に使つた洲濱は今日の「島臺」の前身で小さい臺の上に山川花鳥自然の情趣を寫して樂しまうといふので、左方一番に山城の皆瀨二番に嵯峨の大澤の池三番紫野 四番大井戸雞瀨五番津の國田簑島 六番奈良の棹河七番和泉吹居八番紀州吹上濱九番紀州網代濱十番逢坂の關と意匠したものだ。菊合・女郎合・前栽合など皆この小自然趣味から來たものだ。

又二四八には僧正遍昭がその實家へ光孝天皇が御來泊になるので庭を秋の野にしつらつたともある。當時の園藝が何の程度まで進んでゐたかは別として、その小自然の愛好享樂の純心に至つては今日よりも遙かに高く深いものがあつた。八五二に「君まさで煙たえにし」と弔はれた河原左大臣の邸宅はみちのくの千賀の浦回をさながらに、鹽釜までも据ゑつけて果ては難波の海から月々幾十斛の潮水を淀の川瀨の舟運によつて取寄せて、鹽燒く蜑のすさびまでもまねて自悅びもしたし、他もその雅懷をめでたゝへた。大鏡には小野宮實賴が邸內東南の隅に三間四面の佛堂を建てその參拜路を二つにして一つは陸路花野を分けて參詣すべく、道傍を野に仕立て一つは水路舟して直ちに堂下の岸に着くやうに堀江を巡らしたともあり、一條兼良の東齋隨筆には梨壺五人の一人大中臣能宣の子祝輔親が六條の南室町の東一町に宏大な邸を構へ中に天橋立をまねて池の中島を遙かに差し出し姬松小松を數多く植ゑしげらせたとある。後世一個の根附によく鳥獸を模し、一顆の胡桃に百匹の猿を刻み、一枚の唐紙に千羽の鶴を書き分ける底の纖巧な美術を產んだ我國民はこの時代已にその傾向をこの種の趣味に示して居る。

この小自然の享樂が調和の趣味と相俟つて面白く出て居るのは、源氏物語少女の卷に源氏が方四町の宏大な邸宅を設けその構內にそれぐ\自分の思ひ人を住まはせ、春の好きな紫上の御住居には五葉・紅葉・櫻・藤・山吹・岩躑躅などを植ゑ、秋の好きな秋好中宮の御庭には「秋の野を遙かにしつらひ秋になつて紅葉のはえさうな木立を造りその向ふから瀧をおとし花散里に夏の吳竹明石の方には、柞原とやうにそれぐ\住む人の向きぐ\の庭造りをする處並に胡蝶の卷春の紫上の方の賑ひについで中宮の季の御讀經にかけての記事で、紫上から中宮へ贈られた供花は童女八人を鳥に四人蝶にも四人と別々の扮裝させ、「鳥には白金の花瓶に櫻をさし、蝶には黃金の瓶に山吹を、おなじき花の房もいかめしう世になき匂をつくさせ給へり」とあつてやがてそれ等童女に賜はる祿までもふさはしく、「鳥には櫻の細長、蝶には山吹襲賜ふ」とある。あの頃の雅遊、紫式部が空想した絕好の住宅は實にこの調和の趣味と小自然憧憬の嗜好とを美しく表して居る。

已にその環境からが東海の濱に卓立する島國である以上に、次嶺生山城と名に負ふ山の峽間の山城の賀茂川と桂川を東西に帶びて造られた平の都のその中に、又一廓をしきつて我邸としてその中の自然模倣に陶醉しようといふのだから、その愛好する美は怒濤澎湃でもなく、千山萬嶽でもなく唯一輪の野花に限りなき愛をそゝいで

二四四　我のみやあはれとおもはんきりぐ\すなく夕かけのやまとなでしこ

といひ、一樹の積雪に山里春遲きをわびて

一九　み山には松の雪だに消えなくに都はのべの若□つみけり

といひ、歸雁の片影を春靄模糊の彼方に眺め興じては

三一　春霞たつを見捨ててゆく鴈は花なき里にすみやならへる

といひ、杜鵑の訪づれを熱心に下待つては

一三七　さつきまつ山ほとゝぎす打はぶきいまもなかなんこぞのふるこゑ

稻葉にそよぐ秋風に烏兎匆々を感じては

一七二　昨日こそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて秋風のふく

山里の秋夜更たけて鹿の遠音に耳をすましては

二一四　山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿のなく音にめをさましつゝ

初雪の珍しさを興じては

三一八　今よりはつぎてふらなん我宿のすゝきをしなみふれる白雪

などいふ類で、その着眼は一に可憐優美を基調にした歡喜であり興趣であり感傷である。枕草子には清女が自分の好きな時鳥を人のけなすのをむきになつて怒つた記事があり、いつぞや黒板博士が石山寺の古文書を調べられた中に京都の公卿から手紙を起して時鳥を鳴かせるやうに觀音様に祈禱してくれよとあつた話なども之と關聯して面白い。尙此等を外にしては

八七四　玉だれのこがめやいづらこよろぎの磯の浪分けおきにいでにけり

と様の可笑美と隨處に見出される秀句のをかしみとが目に立つ。そしてこの可憐美の趣味も亦當代衣食住、凡ての趣味と一致するもので雛遊び・貝合せ・双六・韻塞ぎなどの室内遊戲とも一味通じて居る。

次には「折過ぐさぬ趣味」とも謂ふべきもので凡ての事逸早きを好む國民性は早くこの頃から根ざして居ると思ふ。八には文屋康秀が「かしらの雪」の詠進があり、四二には貫之が長谷の知人に戯れた好笑があり、六二・六三には業平の贈答、二五五には藤原かちをむが綾綺殿の梅の歌、三八二には躬恒が歸山の歌、四一八には業平の「かりくらし」、六一七・六一八には敏行・業平(代咏)六四五・六四六にも業平の贈答、七〇四・七〇五にも敏行・業平(代咏)七三六・七三七に藤原因香典侍と近院右大臣、八九九・九〇〇に業平母子の贈答、九一四・九一五の忠房・貫之の贈答と次々に見られる對話の韻文化の如何に氣のきいたものであるか?

九七一　年をへてすみこしさとをいでていなばいとゞ深草野とやなりなん

返し

九七二　野とならば鶉となきて年はへんかりにだにやは君はこざらん

甲はいふ「わたしが出て行くとこの邊は深草の名のやうに草深い野つぱらになることでせう」とすると乙が早速「すればわたしはこの名物の鶉と共になき暮らしませう――ですが、あなたは此からは出世の御身だから、恐らくは見向きもなさいますまい。イイエ碌々狩にさへも御出かけになりますまいよ」と。

九七八　君がおもひ雪とつもらばたのまれず春より後はあらじとおもへば

返し

九七九　君をのみ思ひ越路の白山はいつかは雪の消ゆる時ある

甲「ナニ雪とですか、雪はたよりないですネエ、春になつたら直ぐ消えますからナア」

乙「春になつて消える? そりや都で御覽になる月並の雪でサア、わたしのは北陸道は加賀の白山で仕込んだ四時不斷の特別上等の雪です。だから頼もしいと思召せハ、、、、」これが二日も三日も考へて、雌黄幾たびか加はつた揚句の應答では面白くない。打てば響くが如くさそくに口をついて出るのが妙だ。

一條天皇の御代の四納言の一人頭中將齊信が西の京から歸つて來て中宮の御前で女房と物語る。折節彼と親しい清女は不在で、彼女の推賞してをる宰相の君が應答する、その應接がよかつたといつて後に女房が清女に語る。その又清女がそれを興がつてそのまゝ寫して居る處は僅かの文字でよく斯の趣味を活躍させたものだ。

西の京といふ所の荒れたりつる事もろ共に見る人あらましかばとなむ覺えつる、垣ども皆やぶれて、苔生ひてなど語りつれば宰相の君の「かはらの松はありつや」といらへたりつるをいみじうめでて　頭中將「西のかた都門を去れることいくばくの地ぞ、と口すさびにしつる事などかしがましきまでいひしこそをかしかりしか、

とある。反對に源氏物語には源氏が始めて夕顔から歌と花とを贈られてそれの返しを考へる暇もなく、乳母を見舞つて色々話し込んでゐたので遲くなつてから返しをすると、事情を知らぬ先方ではさては歌は得よまぬ人かとて何だか馬鹿にしたやうなそぶりで受取つたともある。（この折渦ぐさぬ趣味は德川期に入つて輕文學の主人公たる粋人・通人への會話にも見られ江戸趣味を悦んだ故夏目漱石氏の作品などにも見られる）

次には男女の愛――即ち戀愛の享樂である。古今集中十一卷から十五卷まで皆戀歌といふと戀歌が約四分の一と早合點するが、實はその他の卷々にも散在してあるのだから四分の一よりも遙かに多いものと見なければならぬ。古今集と源氏物語この二つは韻文と散文とによつて、王朝戀愛の種々相を描いたものである。今はこれを一々細論しないが讀者は本集全部を通讀し、卷末題材索引「戀」の部を見て自得せられたい。唯一つ言添へておくことは當期の戀愛は從來謂ふが如き本能的享樂ではなく寧ろ大部分は戀愛趣味とも謂ふべきもので、戀を以て一種消閑の裝飾か道樂かのやうに觀た點が多いと思ふことである。戀を實行するとよりは戀を戀する生活に浸らうといふのだから、今日の所謂戀愛神聖觀などは見られない極めて遊戲的な戀愛觀に享樂したものなのである。尤も此頃とても實生活の上に於て隨分ひどい事があつたであらうことは有名な儒者大藏善行すらも八十七で子を産ませ、九十になつても婢妾を蓄へたとあり、僧尼や法師の男女の品行のみだらなことは靈異記下卷十八や延暦十六年二月の官符、弘仁三年四月の官符などにも散見して居る（太田亮氏日本文化史平安朝初期篇、三四四―三五六、久保田辰彦氏日本女性史二二八―二五三などに大分論ぜられてある）が、古今集の戀歌は本當に戀を遂げた人の生の歡喜とよりは戀をゆかしみ、なつかしみ、はかなみ、惱みした表白と謂ふべくそれに交つては例の遊戲的な應答が方々に見られる。後世のものではあるが王朝趣味の憧憬者たる兼好はよくこの集の戀愛觀を體得して居つたと思ふ。彼は例の「始め終り趣味」の中に

> 男女の情も、偏に逢ひ見るをば云ふものかは、逢はで止みにし憂さを思ひ　徒なる契を歎ち、長き夜を獨り明し、遠き雲居を思ひ遣り、淺茅が宿に昔を忍ぶこそ、色好むとは云はめ。

と謂つてをる。古今集歌人の戀は簡結にこの數行に盡されてあると思ふ。（その他日本に固有の風俗に淵源する五節の舞姫とか御禊とか神社や祭禮に關する興趣も本集の歌境になつてをる）この集に見られないもので今一つ王朝に在るものは異國情調趣味である。初期の都市經營や建築物ばかりではなく日常の衣服調度の端々に支那趣味・朝鮮趣味がつきまとつてゐたことは誰も否定し得まいと思ふ。天皇の御召しになる袍など今日から見ては異つた圖案だが、あの日月星辰や亢龍を並べた圖案がずつと襲用せられたものや、御冠などを縮で見ると支那は趣味的に永く我邦に浸潤してゐると思はれる。青磁の花瓶に時の花をつかみ挿しすることが、一般上流のはやりだとあるが、この青磁もその頃支那から傳來したものである。後に扇合の時に行成が美しい細楷で清書して一條の幼帝に奉つた文句も樂府であつた。公事根源によると此頃行はれた年中行事が百七十五あつて、大略二日に一日宛の割になるが、それ等行事中朝賀や賀茂や石清水の祭は別として少しえたいの知れぬ行事は大抵その起源を支那に有してゐるものが多い（五節句などは殊にその顯著なものだ）嵯峨天皇の御世勅命によつて畫かれた紫宸殿の御障子には漢土の賢聖の像を畫き清涼殿の御障子には昆明池の繪樣や、手長足長を主にした荒海の繪や唐人騎馬打毬の圖を描かせられた。殊に今日から見てをかしいのは猫に對する趣味である。山猫は我邦にも以前から居つたといふが此期に入つて支那から渡來した外國種は唐猫といつて、上流階級では非常に愛好したものと見える。寛平御記中元年二月十六日の處に太宰小貳源精が唐から渡つた唐猫を父帝（光孝天皇）に奉つたところが、父帝はその毛色の珍しいのをめでて非常に愛撫せられ後自分（宇多天皇）に賜はつたので、自分も之を大切にして毎日乳粥を與へて居るが、なかなか敏捷で他の猫よりもずつと澤山鼠を捕へる。かくて愛養すること今に五年、今日になつては殆ど以心傳心で主の憂を以て自己の憂とさへするやうになつたとある。一條天皇の長保元年九月十九日宮中の猫（左衞門のめのとと謂つたものであらう）がお産をした。人一倍に猫を好ませられた天皇は早速

馬命婦を以て子猫の乳母に命ぜられた。すると女院や左大臣や右大臣はまるで人間の兒のやうに産養をお祝ひ申した小右記――小野宮實頼の日記――はそれをやゝ憤慨の筆致で書いてをる。處でその翌年の三月になると、子猫は五位に叙せられて「命婦のおもと」といつた。或日……それは春三月の下旬の或日に、日なたぼつこをしてゐると、場處が餘り端近だから「中へお入り――」と馬命婦が嗜めても知らぬ顔で居眠りをつゞけてをるのが癪だといふので、飼犬の翁丸を呼んで、脅かし半分に「命婦のおもとをとつて喰へ」といふと犬は本氣に猫を追ふ。猫は逃げて朝餉の間の方に行く……と丁度そこに天皇がお出でになつて、取敢ず猫を御懷にかばはせられ、事の次第を御聽き糺しの上翁丸は犬島へ追放せよ、馬の命婦も勅勘といふ御仰せが下つた。この一件は枕草子の翁丸追放の件に面白く描かれてある。頭中將の子柏木は源氏の紫上と並べてかしづいて居られる三宮を一目見てから戀悶やる方なく、せめては宮の愛翫して居られる唐猫の子猫なりと貰ひ受けて愛しようとする處があつて、猫が取持つ縁の端とも謂ふべきローマンス――此は源氏物語柏木の悲戀として扱はれて居る。

その他竹取の蓬萊山の玉の枝天竺の佛の御鉢・火鼠の裘。うつぼのはしの國の神仙源氏の若紫北山の聖の源氏への贈物として何れも異國の珍奇をめでた記事がある。

以上述べたやうな異國情調趣味は古今集の中では少しも見られない「もろこしの吉野山」といつてもそれは一首の着想からである、最もこの種の歌人にふさはしい安部仲麿さへも「三笠の山に出でし月かも」と懷鄉の切々を表白して居る位だ。が、一つ例をかへて此と等し並みに趣味とは云ひ得ないまでも多分の趣味識の加はつた思想方面に立入つて考へて見ると、支那と印度の趣味や思想は隨分多く浸潤して居る。

第一には、作意を支那から發してゐるものが多いことで、國文序の和歌六體が毛詩から來、隨處の故事が支那から來、開卷の「立春」も支那の暦名であり、八の東宮を「春の日の光」と秀句にしたのも漢熟語をふまへたものなり、鶯を春の魁と歌つたのも一つは實感でもあらうが、支那で此鳥の一名を報春鳥といふからで、一二の

谷風にとくる氷のひま毎にうち出る浪や春のはつ花

など一見何の關係もないやうなものでも、實は「二十四番花信風」から來た趣向でこの種の見方をして行つて殊に目立つものをあげると

五六　見わたせば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりけり

(劉後村の洛湯　月春如レ錦)

五七　色も香もおなじ昔にさくらめど年ふるひとぞあらたまりぬる

(劉廷芝の年々歳々花相似歳々年々人不同、尚九七の

春毎に花のさかりはありなめどあひみん事は命なりけり

も趣が似て居る)

六七　我やどの花見がてらにくる人はちりなむ後ぞ戀しかるべき

(白樂天の逢見二人家花一便入　不レ論貴賤與二親疎一)

一七三から一八三までの十一首は例の牽牛織女の歌、

一八九　いつはとは時はわかれど秋の夜ぞ物思ふことの限なりける

(白樂天の大抵四時心摠苦就中斷腸是秋天)

一九三　月みればちゞに物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど

(白樂天の關盼々に贈る一聯に燕子樓中霜月夜秋來唯爲二一人一長)

一九四　久方の月のかつらも秋はなほもみぢすればやてりまさるらん　(月中在二桂樹一の傳説)

二三一　秋ならであふことかたき女郎花あまのかはらにおひぬ物ゆゑ　(牽牛織女の傳説)

二五五　おなじえをわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりける

（四季を方角に配して秋は西としたもの）

二六八から二八〇まで十三首は菊の歌だが、この菊花も支那から將來したものだといふ。又菊の雫を不老不死によせるものとして歌つたのは支那南陽縣の傳説からである。

二九七　みる人もなくて散ぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり　（史記項羽列傳などにある）

算賀の風俗も支那から來たもので、鶴龜を長壽のよせとして歌ふのも彼の傳説によつたもの

三四〇　雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ　（論語歳寒知松柏之後凋）

戀歌によくある忘草とは、文選嵆康の養生論にこの草を「忘憂」といつた處から、支那で忘憂草といふによつたもの

八四六　草ふかき霞の谷に影かくし照る日のくれしけふにやはあらぬ

（天皇の崩御を彼には登遐といひ又昇霞といふ）

九五九　木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしに我身はなりぬべら也　（竹譜に非レ草非レ木云々）

九六八は

九七一　故郷はみしごともあらず斧の柄の朽ちし處ぞ戀しかりける　（晉の王質が爛柯山の故事）

二、これ等の中には作家が各自の體驗と融合して、しみ〴〵と人生を觀照したものもある。

二八六　秋風にあへずちりぬるもみぢ葉の行くへ定めぬ我ぞかなしき

九八九　風のうへにありかさだめぬ塵のみは行くへもしらずなりぬべら也

人生の榮枯盛衰とか離合集散とかをつく〴〵と哀感して、心のさすらひ人としての情調が、か細く物哀れに[illegible]

九六五　ありはてぬ命まつまのほどばかりうきことしげく思はずもがな

にも人生のみじめさ痛ましさに遭逢した人の述懐が聞きとられる。それが

九八二　わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり

となり

九八七　世の中はいづれかさしてわがならむゆきとまるをぞ宿とさだむる

となると、最早人生苦を經過して酸いも甘いもかみわけた上の達觀が見えて此を溯れば萬葉の樂天歌人大伴旅人が

この世にし樂しくあらば來む世には蟲に鳥にも吾は成なむ

といふ現世享樂の歌に續き、尚溯れば老莊が虚無恬淡や、支那隱遁者流の人生觀にもつゞくと思ふ

三、佛教思想とても大分歌に取容れられてあるが、唯惜しいことにはこれが單なる概念詩・思想詩とも謂ふべき程度に止まつた。一體王朝の佛教は顯密兩教の始祖、傳教・弘法は鋭意苦心して天台、眞言を日本化して流布したものだが、之を信仰する京の公卿縉紳はその割に深く教義に沈潜する事なく、或は之を醫藥卜筮と等しく治病快癒の方便と見、或は徒に堂塔の建築・供養法會の華麗を事とし、或は佛教そのものを趣味化して讀經は聲樂說經は高等な寄席位に考へ、或はその教義を鵜呑みにし鸚鵡返しにしただけであつた。殊に面白いのは佛教の趣味化にあつて說經の美妙の音で折節墮落しつゝある若い男女を改心させた話もあり、說教僧の美しい顏を見るのが目的で法座に連るといふもあり（枕草子）十三四五の美少年の小僧を集めて濃紫、薄紫、薄鈍、無地、綾と色とり〴〵の衣を着せて顏に紅粉頭に花を飾らせ愛らしい聲で讀經させて三夜の念佛を行つた（榮花物語木の雫）そこで會衆は此世ながらの生菩薩の口から出る迦陵頻伽の妙音に醉うてその當座は寄るとさはるとその噂で持ちきりであつたといふが、此だけの趣味を和歌に發揮すれば面白いものになつたらうが、僅かに遍昭が西大寺の柳はちす葉の玉、伊勢がたちぬはぬ衣などに佳味が見られるだけなのは聊かをしい心地がする。

併しながら所詮人間の世は流轉の姿である。花に月に浮かれ〳〵て享樂維れ日も足らぬ王朝人と雖も眼の前に見る哀別離苦によつて流石に物のあはれを痛感するものがあり、歸せずして佛敎的厭世觀に味到した境を歌つたものにはあはれなものも多い。

七三　うつせみの世にも似たるか花櫻さくとみしまにかつちりにけり

紅花繚亂として地に委する光景にも人生無常を思ひよそへ

八一　枝よりもあだに散にし花なればおちても水のあはとこそなれ

夢幻泡影の歎きを落花に寄せたもの

又八二九から八六二までの哀傷歌にはこの種の秀咏が少くないが、中で思想上の背景のあるものは大抵佛敎である。

九三九　あはれてふことこそうたて世中を思はなれぬほだしなりけれ

出離頓生を欣求しながらも尙人間性の執着の强きをわび　棄恩入無爲眞實報恩者と大勇猛心を奮ひ起しても脆きは人の性なりけりと歎いたもので、憶良が「うしとやさしと歎けども」と歎いたものと遙かに相呼應して居る。この想は更に「同じ文字なき歌」に

九五五　よのうきめみえぬ山路へいらんには思ふ人こそほだしなりけれ

ともある。

九四五から九五五まで九首は世の厭はしいこと、悲しいこと、どこぞうき世と絕緣した境地に行きたいことなどを歌つたもので此亦佛敎的着想である。斯て一轉して山住について稍自信の出來た相對的の自慰（九四四・九四五）となり、厭世から佛敎がりする徒に對する冷罵ともなつてをる（「世の中はいかにくるしと思ふらん」「世をすてて山に入る人山にても」）けれども始めにも云つた通り口調はともかくその歌ひ方が餘りに概念的なものも往々ある。（八三三・八三四・八三五・九四二・九四三など）

最後に古今集の歌にはどんなものが題材となつて居るか、之を一覽的に見たいといふので嘗て題材索引を作つたことがあるが、此は卷末に添へておく。倉卒の試みとて洩れたものもあらうし、分類命名には異論のあるものもあらうが、とにかくかうしたものが無くては、考察上不便を感ずることは我人誰しも同じであらうと思ふから粗漏にも拘らず添附した次第である。

第九　書志と學徒史

上、年譜

特に斷つておきますが、この稿は以前に相當入念に執筆したもの（それとて大したものではありませんが）を紛失し急遽新たに起稿した爲めにわけて杜撰な點が多からうと思ひますから切に御諒恕と御叱正を請ふ次第であります。參考資料としては以下の數種あるのみです。

一、高頭式氏日本太陽暦年表　二、佐村八郎氏國書解題
三、野村八良氏國文學研究史　四、旣讀古今集六十一本
五、尾上柴舟氏歌と草假名　六、西下經一氏古今集傳本の系統論
七、神谷保朗氏帝國歌學史　八、廣文庫第七冊

一、鳥羽天皇の元永三年（一七八〇）七月廿日の日附の古今和歌集は已に知られてゐる限りに於て一番古い完本でその實物は三井男爵家にあり、その一部複寫は精好なものが世に出ても居り、その全部の活本は尾上博士の努力によつて他の流布本や行成切と對校の次第と脚註とを附し「校註古本古今和歌集」と題して出版されたことは最近周知の事である。同書についての考察も同博士の序並にその以前の著「歌と草假名一〇八―一一九」に述べられたもので要が盡せてある。

二、近衞天皇の永治二年（一八〇一、此年十二月七日康治と改元）藤原清輔が手寫した古今集は今前田侯爵家の所藏となつてゐるが完本ではないといふ。

三、近衞天皇康治元年（一八〇二）藤原公信の邸宅が燒失した。然るに公信は貫之筆といはれる小野宮皇太后宮御本の一轉寫本（轉寫本轉寫の疎密を異稱する爲め一等親二等親の用語に倣つて云ふ）を傳へ藏して居たのだからこれもその時類燒してしまつた譯だ。

四、同仁平四年（一八一四、十二月十一日久壽と改元）清輔は再び古今集を手寫した。今竹柏園所藏の傳家隆筆本といふのは實は此の清輔本であらうといふ。

五、後白川天皇の保元二年（一八一七）五月の頃清輔は三たび本集を淨寫して奉つた。これは昨年育德財團から複刻せられた前田侯爵家本二冊で同一手蹟の清輔本はまだ外に土肥慶藏博士が、仙臺伊達家の賣立に購入せられたものや佐佐木信綱博士の愛藏にもあるが皆一部分だけであつて、二十卷完備した清輔本としては唯一前田侯爵家にあるだけだといふ。（卷頭寫眞版參照）

六、二條天皇永曆二年（一八二一）七月十一日藤原俊成が淨寫したものは「以二家秘本一重書寫畢件本紀氏正本也」と奧書があるが、紀氏の正本は疑はしい。俊成本の實物では何々切と稱して數種殘つて居て大抵は確實である。（了佐切など）

七、高倉天皇の安元二年（一八三六）三月太上天皇（後白河）五十の御賀に中宮から小野道風筆古今集を贈られたとあるがその書も今は傳らない。

八、同治承元年（一八三七）九月十二日某藤原敎長について古今集の口授を受けた。是即ち古今集註（又敎長卿註）といふもので纏まつた古今集註釋書としては今のところ一番古いものである。明治時代の（一三三を參照）圖書目錄でも見たが、最近京都の帝大文學部に原本を手に入れられ、日本古典全集にも收めて刊行。同書については吉澤義則博士が雜誌藝文に發表せられた記事が有益である。（その記事は右の古典全集本にも又同博士の國語國文の研究」中にも入つてゐる）尚この註は後の顯註がその大部分を引いてをる。

九、後鳥羽天皇の壽永二年（一八四三）八月二日の奥書がついて俊頼口傳集上下二卷（一名後秘抄）といふがある。中に古今集の歌をあげて之を評して居る。當時の歌學から演繹したものだが此集の評釋、選釋の早いものだ。（今續々群書類從に入る）

一〇、同壽永二年（一八四三）十二月中旬法橋顯昭が古今集序註を書いた此は序の註釋で早いものだ。今群書類從に入る）

一一、同文治二年（一八四四）正月二十四日附で同じく顯昭古今集註が出來た。第二番目の全釋物で、今續々群書類從に入れてある。

一二、建久五年（一八五四）閏八月二十一日附で藤原家隆眞蹟本の古今集がある。六人部是香がその友賀茂（松田）直兄の所藏に係ることを謂つてをる。是は小野宮皇太后宮御本の系統に屬する通宗本の一種であるといふ

一三、土御門天皇建仁元年（一八六一）五月俊成古來風體抄二卷を著す上代以來千載までの歌態を述べたもので、その下の卷には古今集から選んで評釋を加へてをる。此は今續群書類從（刊本第十六輯にある）

一四、同承元二年（一八六八　五月二十九日源實朝の奥方に仕へて居た侍兵衞清綱といふ者、京から鎌倉に歸つた時傳基俊筆の古今集を實朝に獻じたとあるが、その書は今傳はらない。

一五、順德天皇の建保二年（一八七四）秋、藤原定家が古今集を寫した。「以亡父自筆之本凌老眼書之」とある點から推せば、俊成本の儼存してゐたことと、定家本で普通所謂貞應本・嘉祿本の外に建保本の存在したことも推定せられる（類聚名物考早く此ことをいふ）

一六、同建保五年（一八七七　十二月十七日の奥書で定家の著と稱する愚秘抄二卷がある。本集の假名眞名二序について假名前眞名後説をあげて「貫之先づ假名序を書き添へ、更に眞名序を作つて之を我羞子淑望（實は長谷雄の子）に與へ他日必ずおほやけから眞名序をも召されよう、その時には之を奉れといつたが果せるかなその通りであつたといふ。

誠しからぬ説だ。後日（二條冷泉など）黨爭の具として誰かゞ僞作したものであらう。

一七、後堀河天皇の貞應元年（一八八二）十一月二十日定家が手寫した古今集こそは世に貞應本と稱して廣く流布したもので、嘗に二條派の正本たるのみならず近古より近世を經て明治・大正・昭和の今日に至るまで、古今集といへば即ちこの貞應本古今集を意味すると樣にとられるまでに廣布した。（卷頭寫眞版參照）

一八、同嘉祿二年（一八八六）四月九日定家の寸寫した古今集を嘉祿本と謂つて冷泉家の正本だが、あまり廣まらなかつた　此には眞名序はない。

一九、同八月定家は僻案抄を著した　此に古今集が選釋してある（群一八八刊本第十輯）

二〇、四條天皇の嘉禎三年（一八九五）正月十四日（六人部是香正月二十三日）定家は第四回の古今集手寫をした「授鍾愛孫姫訖」とあるもの。だが、この嘉禎本も傳はらない。（尙頓阿の井蛙抄に今一つ定家が信實の女藻壁門院少將の歌才をめでて與へたとある手寫の古今集がある筈だが　それも分らない。が近世に入る前後に定家本とあるのは或は第一次の建保本や第三次の嘉祿本やこの嘉禎本が上流の間に轉々したものではなからうか）

二一、後深草天皇の寶治二年（一九〇八）光俊が手寫した古今集は今黑田家の所藏である。

二二、同建長八年（一九一六　四月から八月三日にかけて源親行が八本對校の古今集定本を作つた。

一、定家本越本　二、同　伊本　三、寂□本（中の字不明）　四、飯本

五、清一本（清輔一本）　六、九條内大臣御本　七、俊本（此大草子也）　八、家隆卿本

（或本に親行は建長六年の四月から八月廿七日にかけて古今集を筆寫して同九月から十二月までに校合したとある古本のことだからさうした奥書のものもあらう強ちに否定出來ないと思ふ）

現存竹柏園の秘藏にはこれの系統本があるといふ。

二三、龜山天皇の文永四年(一九二七)七月二十二日七十桑門融覺は傳爲家筆の古今集を手寫した。此は今井似閑の舊藏本である。

二四、同文永六年(一九二九)親行本古今集の寫本で此日校合終了の奥書はあるが校合者は誰かわからない。親行本には文永十年附のにも同樣なのがある。

二五、同弘安元年(一九三八)二月二十九日、寂惠の古今抄が出た。

二六、伏見天皇の永仁五年(一九五七)三月十三日の日附で右近衞中將藤原爲相の奥書ある「古今切紙口傳」と題する書がある。(古今傳授に關するものは古今學傳統の考察には補ひになるが、說そのものは何等學問的價値のないものであること從來諸家の定評である)

二七、後二條天皇の嘉元三年(一九六五)河﨑延明の古今訓點抄一卷。

二八、同嘉元四年(一九六六)四月二十八日、爲世手寫の古今集があつて此は天文二十二年六月二十二日兼右本の底本となつたもの。

二九、花園天皇の延慶元年(一九六八)十月九日に延慶兩卿訴陳狀(群本に入る)を上つたが中に、爲兼が古今集の俊成本を傳來して居るといふに對して爲世が駁した一節がある。

三〇、同延慶三年(一九七〇)七月七日附傳爲定筆古今集といふのが、今、前田家の架藏となつて居る。

三一、後醍醐天皇の元應元年(一九七九)頓阿古今集の手寫此も今前田家にある。(併し頓阿本系統のものは他にも數本ある)

三二、同元亨二年(一九八二)九月十二日定爲筆の古今集は今、宮內省二十一代集本の中にある。

三三、同元亨三年(一九八三)古今秘傳抄二卷は冷泉爲相の奥書や傳寫奥書があるけれども僞作の俗書である。

三四、同嘉曆元年(一九八六)三月廿六日、慶運は淨辨より古今集の正本及び傳授を受けた。これが整形は即ち宮內省の惠梵本だといふ。

三五、後村上天皇の正平二年(貞和三年)十二月初め光明峯寺道家卿眞筆本成る。此は文永十年の親行本をば定家本を以て校合したもの。(卷頭對校本の項參照)

三六、同觀應二年(二〇一一)頓阿手寫の古今集二冊、宮內省八代集本は此の新しい寫本。

三七、同正平八年(二〇一三)頓阿手寫の古今集がある。奥に良守上人に附屬とある。(今宮內省本)

三八、同正平九年(二〇一四)北畠親房薨、その公餘賸餘の名著の一つに古今集序註一卷がある。(續群に入る)

三九、同正平十三年(延文三年二〇一八)五月廿五日から六月二日にかけて又々頓阿が手寫した古今集は或秘本を得てそれを寫したものだといふ、今酒井家にある。

四〇、後小松天皇の應永十三年(二〇六六)仲秋、僧了譽が古今集序註十卷を書いた。

四一、稱光天皇の應永三十年(二〇八三)方外隱士竺源(師成親王)の識語の古今集註二十卷がある。

四二、後花園天皇の正長元年(二〇八八)惠梵手寫の古今集がある。奥書に「鈴鹿縣令入道前右馬頭の爲也」とある。宮內省には此の傳寫本の慶長十六年通村跋のものがあるといふ。

四三、同嘉吉二年(二一〇三)三月十二日附で古今集作者一卷奥書は和歌所法印といふのがある

四四、同文安二年(二一〇五)十二月廿一日堯孝手寫本古今集。定爲本を寫したもので、京大文學部に一本と宮內省廿一代集本に一本と現存。

四五、同文安四年(二一〇七)古今集園雅本、堯孝が命じて手寫せしめたもので此の轉寫本は京大に二冊あり、上田萬年博士の藏書にもあり、文龜三年小宅式部宗繁の轉寫本もある。

四六、同康正元年(二一一五)三月廿五日堯孝卒、六十五歲彼の著に古今聲句相傳聞書といふのがある、集中讀癖や難解

の語の譯をしたもの。

四七、後土御門天皇の文明三年(二一三一)東常緣古今集を宗祇に授けた、古今傳授といふこと此に始まる。又この講義は二度に分けてしたので、聽講手記を古今集兩度聞書といふ。又古今和歌抄とも古今和歌集深秘抄ともいふ。初度は正月廿八日戌の刻から四月八日午の刻まで、後度は六月十二日巳の刻から七月六日巳の刻までであつた。此書を同じ年の七月五日附三條西内大臣實隆撰「古今和歌集聞書のこと」と題したものあり、又文明四年五月三日常緣の卷末識語を附したものもあるといふ。

四八、同文明六年(二一三四)十一月中旬兼良手寫本古今集一冊は嘉祿本で靜嘉堂文庫に入つて居る。

四九、同文明八年(二一三六)三月中旬牡丹花肖柏八代集を校合。同年六月中旬一條兼良古今集童蒙抄一卷を著す。古今集の選釋である。

五〇、同文明十年(二一三八)從三位藤原基綱奧書の古今集寫本二冊。

五一、同文明十一年(二一三九)八月廿二日心敬僧都筆古今集は今黑田家の所藏。此年附で古今集註二十卷(一本文明十三年附とある)前右大臣從一位(政基か冬良か?)華押がある。

五二、同文明十四年(二一四二)宗祇、權中柄言榮雅(飛鳥井雅親の入道名)より古今集を授けられた。宗祇本古今集でその轉寫本は宮内省にも西下經一氏所藏にもあるといふ。

五三、同文明十八年(二一四六)三月中旬の日附で古今切紙口傳といふ刊本がある。大中小三通り各二冊本で牡丹花肖柏八代集校合の奧書がある。

五四、同長享三年(二一四九)三月十六日、榮雅本古今集此は結城政爲の爲めに書いたもの。

五五、同延德元年(二一四九)十月卅日、蓮花寺向坊良覺古今集を手寫。(それの一轉寫慶安四年の盛雅本二轉寫西下經一氏所藏本)

五六、同延德三年(二一五一)三月十六日、榮雅手寫の古今集は永正十年肖柏の門弟賴實の轉寫本の先蹤で、親行本や光明峯寺道家卿眞筆本の文統をひくもの。

五七、同延德四年(二一五一)堯惠奧書の古今血脈抄八冊は宗祇の兩度聞書の系統を引くもので、東大研究室にある古今秘抄五冊と同じだといふ。續群書一覽に延德四年十月廿六日三條西内大臣實隆撰古今和歌集聞書四冊とあるのは四七と同じもので、永祿十年初冬の追奧書を附して傳はつてをる。

五八、後柏原天皇の明應九年(二一六〇)八月上旬、古今切紙口傳と題する寫本が一冊あつて追奧書は文龜三年四月十八日と永仁五年三月十三日。

五九、同文龜元年(二一六一)九月十八日、古今和歌集兩度聞書と題するものが大阪圖書館にあるが此は同じ年同じ月附の古今集抄(神宮文庫本)並に宗碩の奧書ある十口抄五冊と同じものであらうと想像して居る。

六〇、同永正六年(二一六九)三月法印堯智の古今集讀人不知考の著今續群に入る。(十論「讀人不知の歌」參照)

六一、同永正七年(二一七〇)二月廿五日、足利政知筆古今和歌集今西下經一氏の所藏、頓阿本の再轉寫で右衞門督藤爲和の證明もあるが、西下氏自身疑つて居られる通り、政知はこれより二十年も前延德三年(二一五一)四月五日に我子茶々丸に弑せられて居る(五十七歲)のだから疑はしい。

六二、同永正十年(二一七三)肖柏の門弟賴實、榮雅本を轉寫

六三、後奈良天皇享祿二年(二一八九)四月十五日三候西實隆息西宗僧正公順の爲めに古今集を手寫、靜嘉堂文庫頓阿本系統の本であるといふ。

六四、同天文三年(二一九四)此年附實隆跋の榮雅本があつが今宮内省八代集本に入つてをる。尙明曆三年轉寫の跋もあ

る。

六五、同天文十七年(二二〇八)宗吟、古今集を實隆本に依つて校合。(宮内省本)

六六、同天文二十二年(二二一三)六月二十二日、右兵衛督兼右、爲世筆本を以て古今集を校合。(嘉元四年四月廿八日戊辰戸部尙書藤と奥書あるもの今宮内省の廿一代集本に入つてをる)

六七、正親町天皇永祿八年(二二二五)二月、堯惠の古今抄延五記二十卷成る。

六八、同天正九年(二二四一)附權中納言藤兼成の證明ある公順本古今集がある。(宮内省本)

六九、同天文十三年(二二四五)六月十一日「關白秀吉定家眞蹟古今倭歌集を進献叡感淺からず」と武德編年集成にある定家の眞蹟がどうして秀吉の手に入つたか？　は興味ある問題である。

同年附中通勝書寫の古今集があつて今前田家本となる。

七〇、同慶長五年(二二六〇)七月二十九日、細川幽齋田邊の籠城先から古今傳授の箱を献進「古も今も變らぬ」の歌一首、後世之を箱傳授ともいふ。

七一、同慶十十五年(二二七〇　附傳細川幽齋所傳古今和歌集傳聞書三卷がある。

七二、同慶長十八年(二二七三)烏丸光廣證明の細川幽齋筆本古今集がある。現存前田家本は後日、智忠親王が人をしてこれを手寫せしめられたもの。

七三、明正天皇寛永十三年(二二九六)附了佐の極で尊圓親王手寫の古今集一冊今前田家の架藏となる。

七四、後光明天皇正保四年(二三〇七)開版の八代集の中、古今集は昭和二年八月廿日日本典古全集の一部として活本に刷られた。

七五、慶安四年(二三一一)盛雅本古今集、此は延德元年十月卅日の寫良覺本を寫したもの。(その又轉寫は今西下經一氏の所藏に係る)

七六、同承應三年(二三一四)刊本古今集は稍細長い大本二冊で京の西村書店から出してをる。

七七　後西院天皇の明曆三年(二三一七　轉寫の跋ある榮雅本(天文三年實隆の跋あるもの)は今宮内省八代集中に入る。

七八、同萬治二年　二三一九)宗祇古今和歌集抄六卷刊行、此は嚢の兩度聞書のことで又之を東常緣抄ともいふ。

七九、同萬治三年(二三二〇)大本で首書古今和歌集全六冊刊行。

八〇、同萬治四年(二三二一)春牛庵隨世の極で榮雅本がある。元水戸烈公の藏書で、今竹柏園の架藏に入る。

八一、靈元天皇の寛文三年(二三二三　淸明の節茅山人の奥書で一條兼良の古今集童蒙抄を大本二冊に刊行。

八二、同延寶元年(二三三三　淺見吉兵衛開版の小本古今集二冊は内容古寫本に近い。

八三、同延寶二年(二三三四)刊本の大本古今集二冊は飛鳥井雅章本を以て正寫したもので所謂「古版」である。此は寛政十年に重版。

八四、同延寶九年(二三四一)二月十八日觀風齋長雅の古今傳授切紙口訣といふ寫本が一卷ある。此は天和元年同じ長雅の奥書ある「東常緣古今天眞獨朗之卷二卷」とあると同じ物であらう。(天和元年も延寶九年も同じ紀元二三四一年で九月廿九日に改元されたのだから)

八五、東山天皇の元祿五年(二三五二)八月二十五日、契沖古今餘材抄二十一卷成る。原本は今大阪南區生玉前町持明院にある筈、又明治元年十一月附同書の寫本は大阪圖書館にあり、活本は國文註釋全書や契沖全集に入つてをる。

八六、同元祿十年(二三五七)佐村八郎氏の國書解題には此年附

清原宣賢の古今和歌集傳授切紙一卷

とあるが尾崎雅嘉の續群書一覽には

丁丑仲秋日古今傳授切紙寫一册淸原政國入道判　享保十八年・元文二年九月五日の追奥書

とある。宣賢・政國同人か　又は同年に二種の類書が出たものか？　實物を見ないのだから確言は出來ないが、恐らく雅嘉の方が正しからう。（彼は雜學者ではあるか、實物についてはたしかな處がある）

八七、同寶永二年（二三六五）六月十五日、北村季吟歿彼の名著數多い中に八代集抄古今集は飛井雅章の敎へを受けて更に古註をも併せた集釋で此後數回刊行せられた。

尙元祿年中には學頭藤原常樹口授の古今傳授奥秘と題する一卷の寫本もある。

八八、中御門天皇寶永六年（二三六九）附、權中納言實顯證の古今集寫本は細川幽齋本に依つたもので、智忠親王が人をして轉寫せしめられた。（七二のもの）

八九、同正德三年（二三七三）大本刊本古今集二册京朝倉出雲寺より刊行、文政十三年に再版、此は刊年未詳「訶和智屋本」と同じもの。

九〇、同享保十四年（二三八九）繪入古今集古本二册大阪泉屋より刊行。

九一、同享保十八年（二三九三）四月廿七日、古今傳授切紙寫、此は元祿十年淸原政國入道判（八六）に追奥書して「此原本疑の餘地あり」としてある。尙元文二年九月五日の追奥書もある。（八六參照）

九二、櫻町天皇の元文二年（二三九七）九月五日夜亥之刻澤田重淵識語古今和歌集傳授切紙寫本、此は元祿十年享保十八年（八六）四月二十七日（九一）の追識である。

九三、同寬保元年（二四〇一）此夏附の序ある秋山色樹（實は小野高尙）の隨筆、夏山雜談十卷成る。中に「古今集の假名序は奏聞の序なるべし。眞名序は奏の聞序にてはあらざるべし。如何となれば花山僧正・有原中將・文琳・野宰相・在納言などとあればなり」

九四、同寬保二年（二四〇二）九月、荷田在滿古今和歌集左註論一卷を著す。

寬保二年九月德川金吾君に奉る

「ほの〴〵と明石の浦の作者論並に古今和歌集左註論」

とあるもので、一說に此は賀茂眞淵の著で、彼が田安家に奉仕したのはもつと後だが、その以前から在滿を通じて田安家と交渉があつたものだともいふ。原本今南葵文庫に納まつてゐる。

九五、桃園天皇寶曆十一年（二四二一）荻生徂徠の隨筆南留別志五卷成る。その第一卷に「古今の序は眞名の序をつくりて後にそれによそへてかなの序をつくれるなり。文の體格かなの文章にあらず」

九六、後櫻町天皇の明和二年（二四二五）賀茂眞淵の古今集序表考一卷並に同別考一卷成る。門人內山眞龍の筆寫、此二つを併せたものは現宮內省圖書寮本古今序註釋二卷。

九七、同明和六年（二四二九）村上織部の古今集和歌助辭分類二卷成る。

九八、後桃園天皇の明和九年（二四三二）菊池春林の古今集眞名字解四卷成る。その翌々安永三年上下二册として京都二條通より開版。

九九、同安永三年（二四三四）松井幸隆の古今和歌類題小本二册刊行。（古註による）

一〇〇、同安永六年（二四三七）傳貫之筆、拓本古今和歌集序**一〇一**光格天皇の天明五年（二四四五）十月、野村遜序眞淵の古今和歌集打聽大歌所御譌開版卷頭には眞淵からその女弟子「ともひ子」宛の手簡眞蹟の臨摹をのせてある。

一〇二、同寬政元年（二四四九）上田秋成、眞淵の打聽を修補して開版。

一〇三、同寬政八年（二四五六）正月、尾崎雅嘉古今和歌集被難許等廮四册を版行。

一〇四、同寬政九年（二四五七）本居宣長、古今集遠鏡六卷成る。

一〇五、同寛政十年(二四五八)刊本大本古今集二冊延寶二年版(八三)の重版。
一〇六、同文化八年(二四七一)十二月八日、本居宣長の玉かつま板行、中に古今集の考察が處々にある。
一〇七　同文化九年(二四七二)刊本古今集二冊江戸須原屋刊行、此は延寶二年版(八三)の重版。
一〇八、同　化十年(二四七三)大本刊本古今集二冊蓮阿の跋と頭註を附けて江戸と大阪とから版行(文政九年に再版した)
一〇九、同十一年(二　七四)村上影面の「古今集序本の心」成る。
一一〇、仁孝天皇文政六年(二四八三)刊本大本二冊京吉田吉野屋から刊行再版本だが、初版の年月日が不明。
同年横本(六寸に二寸七分)の古今集一冊、大江廣海の跋を附して刊行。
一一一、同文政九年(二四八六)一〇八の再版。
一一二、同文政十年(二四八七)十一月十五日、屋代弘賢、清輔筆本の證をした。(現傳・竹柏園本)
一一三、同文政十三年(二四九　)刊本大本古今集二冊、京朝倉出雲寺と大阪青木書店から版行。(八九の重版)
一一四、天保二年(二四九一　仲秋、榎本寛親古今集書寫、加茂季鷹藏の清輔自筆本(カタカナ書)に依る。(今下卷だけ靜嘉堂文庫に)
一一五、同天保三年(二四九二)九月十五日香川景樹古今集正義執筆。
一一六、同天保四年(二四九三)六月六人部是香の訂正古今集序成る。
一一七、同天保六年(二四九五)香川景樹の古今集正義上梓。
一一八、同天保七年(二四九六)この年岩本蛙麿燕石十種六十卷を著す。その中に左の記事がある。
「駿州今川家に定家卿の古今集あり。是れは三條西殿方に持傳へたるなり。亂世の頃公家衆は見つぐべき人もなく方々へ御越しありしに、三條殿は今川に緣有るゆゑ、時時見繼ぎありし禮として送られしなり。(農民はなしなり採るべからず)武田信玄之れを借りて返さず止め置きしが、滅亡の後德川殿御手に入り、公儀の御文庫に有りしを元祿年中美濃守吉保に下し賜はりしが一とせ彼の家の燒失のせつ此の書火災に罹りて滅す。惜むべし。」
一一九、同天保九年(二五〇一)正月二十九日、鹿持雅澄古今集序存疑一名「闇夜のつぶて」一卷成る。今、宮內省圖書寮にある。題意は次の自咏から來たもの
闇の夜のゆくさきしらず心あてに投ぐる礫の二つ三つ四つ
一二〇、同天保十四年(二五〇三)熊谷直好の古今集正義總論補註論成る。
一二一、弘化元年(二五〇四)吉田令世の歷代和歌勅撰考成る。
一二二、同弘化二年(二五〇五)小本刊行本古今集二冊江戸須原屋より發行。同年八田知紀の古今集正義總論補註論成る。
一二三、孝明天皇の嘉永四年(二五一一)七月、六人部是香の古今假名序及眞名序論並に古今集歌韓考成る。
一二四、同嘉永五年(二五一二)正月、大森盛顯古今集一首撰一卷成る。
一二五、同嘉永六年(二五一三)刊本小本古今集二冊大阪秋田屋、江戸須原屋から版行、山形濤朝生瀨左衞門の校正で清輔本系統の善本といはれて居る。又此頃青木信虎が清輔本序を模寫したもの今竹柏園の架藏にある。
一二六、同安政三年(二五一六)前田利保の古今集大論、古今和歌集夜話成る。小判刊本二冊京、芳樹園版行。
一二七、明治天皇の明治元年(二五二八)十一月附、契沖の古今餘材抄の寫本で附記に「俸給之金を以求之鄉學所之用にあつる者也、知縣事小川敏」とあるものが今大阪圖書館本にある。
一二八、同十四年(二五四一(熊谷直好の古今集正義總論補註(一二〇のもの)刊行。
一二九、同十七年(二五四四)內藤晋春の標註古今和歌集十三卷二冊西村書店。
一三〇、同十八年(二五四五)蚊田蒼生の校本、豆本古今集(二寸六分に三寸七分)一冊槐屋より發行。

一三一、同二十三年(二五五〇)佐々木弘綱同信綱校訂編輯、日本歌學全書第一編に古今集を收めて博文館より發行。

一三二、同二十六年(二五五三)三月二十八日、飯田永夫標註參考古今和歌集林平次郎發行。

賀茂眞淵の古今集講義二冊　春の梅津の里人橘經亮後序を附して發行。

本居宣長の古今集遠鏡薄様で、大本・中本・小本の三種を誠之堂尙古堂より發行。

岸本由豆流の校註古今和歌集を東京堂より發行。

一三三、同二十八年(二五五五)香川景樹の古今和歌集正義二十三卷、門人中川自休の男長經の手寫本による。

同年古今教長註二十卷四冊本が發行された筈だが、實物手許になくて詳記し難い。

一三四、同三十年(二五五七)增田于信・生田目經德共著新註古今和歌集講義二冊誠之堂。

一三五、同三十一年(二五五八)賀茂眞淵の古今集打聽、靑木嵩山堂岸本由豆流の校註古今和歌集博文館。

同三十一年から三十三年にかけて佐々木信綱校訂續日本歌學全書、博文館より發行その第五編に左の二書を入る。

熊谷直好　古今集正義序註追考　　八田知紀古今集正義總論補註

一三六、同三十三年(二五六〇)五月二十五日、經濟雜誌社群書類從第十輯發行中に左の諸書を收む。

二七二　小町集　　二七三　伊勢集　　二八四　新撰萬葉集　　二八五　古今和歌集目錄

二八六　古今集序註　　二八七　古今集童蒙抄　　二八八　僻案抄　　二九三　九品和歌

一三七、同三十六年本居宣長全集刊行、第五冊に古今集遠鏡を收む、賀茂眞淵全集刊行第一冊に古今集序表考・古今集打聽・三代集總說を收む。

一三八、同三十九年(二五六六)後藤正次編輯發行古今天眞獨朗卷發行。(非賣品)

一三九、同四十一年(二五六八)七月五日金子元臣、古今集評釋明治書院發行。

同十月十日中村秋香古今集詳解前川文榮閣。四十二年にかけて國文註釋全書發行、第八編に宣長の古今集遠鏡。

一四〇、同四十二年(二五六九)歌書刊行會校古今集發行。

一四一、同四十三年(二五七〇)井上通泰古今集新釋附藤井高尙傳二冊。

一四二、大正天皇の大正二年(二五七三)歌學文庫第一編に奧儀抄を收む。

同年八月二十日吉澤義則「藤原教長著、古今集註」を藝文誌上に發表。

同年佐々木信綱・芳賀矢一校訂校註和歌叢書第三に古今集を收む。

一四三、同十二年(二五八三)春、尾上柴舟元永本古今集二百部印行、同年九月一、二日關東大震災、本集貴重の文献多く烏有に歸した。(東大藏本燒失の古今集關係書は當時の國語と國文學誌上に揭げられた)

一四四、同十五年(二五八六)十月二十五日、契沖全集第五卷發行中に古今餘材抄を收む。

一四五、同十月三十日、尾上柴舟校註古本古今和歌集を雄山閣より發表。(元永本)

一四六、今上天皇の昭和二年(二五八七)四月二十八日、德本正俊校定の本居宣長著山崎美成頭註古今和歌集遠鏡　芳文堂

同八月二十日日本古典全集本、古今和歌集(七四のもの　藤原教長古今和歌集發行。

一一七、同昭和三年(二五八八)一月十日、藤村作古今和歌集至文堂。

同六月二十五日、山内子爵家藏傳紀貫之筆古今和歌集第二十卷　明治書院。(卷頭寫眞版參照)

同九月、前田侯爵家藏、淸輔本古今和歌集複刻、寫眞版・活版各二冊、尊經閣叢書、育德財團。(同上)

一四八、同四年(二五八九)一月一日、西下經一古今和歌傳本の系統論——特に俊成本・定家本・淸輔本の研究。

以上は唯主要書目を年代順にあげた迄のもので、此以外年代や著者・筆者不明の善本も多く、又主要なものであるに

も拘らず逸したものもあるかも知れぬが、此の精細な研究は單行の古今集書志の任務だと思ふから餘は省略する。

下　考　察

本集現傳最古の註といはれる敎長卿の古今和歌集註に

古今和歌集者、延喜聖代詔四人哥仙被撰之。所謂大内記紀友則・御書所預紀貫之・前甲斐少目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑是也。其内貫之專奉之。仍貫之自筆集アリ。故人云三本ナリ。ミカド后宮ニタテマツル二本ナリ、イエニトヾムル一本、コレナツタエテ輔仁親王モチタマエリケリ。ソノノチ花園左大臣有仁コノ本ヲ讃岐院御在位時タテマツリタマヘリ。書寫之執筆敎長ナリ。一兩本有之故、于今不忘失、今適世後不審之事等注置之ナリ。

とあつて此に基づいて古今集の貫之筆本は

一、天皇に奉つたものと　二、皇后に奉つたものと　三、自家にとゞめたものと

三本あるなどいつてその系統を想定した說もあるが、此は疑はしい。貫之の自筆はあるにはあつた(榮花御着裳䄄子內親王の處)が類燒の爲めに失せたことが淸輔の袋草紙に出て居るし、最近尾上柴舟博士が假名書躰の上から現傳の、貫之の筆と稱する

一、高野切　1、一・九・二十　2、二・三・五・八　3、一八・一九

二、龜山院切(春の一部)　三、本阿彌切

をしらべて皆後世のものだと謂はれて居る。敎長は自身手寫したことは確かであらうが、恐らく貫之筆の轉々淨寫に係るものによつたことであらう。加之、勅撰の奏進に三本を書くといふこと從來漢詩や國史の勅撰に例のないことで勅撰とあるからには淨寫したものは唯一通であとは四人合撰の手稿本位があるだけな譯だ。處で撰集の趣旨は今も後の世も歌道の典範をしようといふのだから、朝廷から流布を御禁止になる譯もないから一旦正本が極つたとなると撰者などは是非家の寶なり我身の名譽なり旁々一本を家に留めておきたからうし、現に生存する歌人でその咏が入撰したものも又是非寫しておきたからうし、一般新進の歌人も後學の爲めとて競つて寫したものであらう。すると貫之が手稿によつてか、御物を拜借してか、一部を淨寫する。躬恒がそれを借りて寫す次は忠岑や伊勢が貫之や躬恒に借りて寫す二人から四人、四人から八人と級數的に瀰蔓すること宛ら幕末和蘭塾の塾生が一部の對譯辭書に於けるが如き有樣に酷似して居たことと想ふ。降て敎長卿の時代となつては古今集の正本なるものは可なりに多くて、どこもかしこも我佛尊しで「是が貫之直筆でござる」と勿體ぶることも、自家の系圖を系圖屋に註文する心理から推して肯定されると想ふ。否なこんなことをいふと亂暴なやうだが、現に國文學の中にさう想つて可い記事があるではないか、枕草子には左大臣師尹が姫君芳子(宣耀殿の女御)を養育するのに古今はたまきの暗誦を旨とせられたとある。暗誦を强ひる位ならこの左大臣家には少くとも一本はあつたと見なければならぬ。ついで芳子御入內の後村上天皇がこの事をきこしめして女御をおためしになつたとある。御ためしになるには御自身に一部見て居られる必要がある。すると天曆朝廷に一本あることになる。處でその試驗は一時中止にして夜の御殿に入らせられ、又中途御目ざめになつて「あすになつて女御が外の古今集で下稽古せられては駄目だから今宵の中にしよう」といつて又々殘りを課せられたとある。すると古今集は宮中のどこかにまだ御藏書があつたことになる。此で三本であるそしてその立合人(點取)には古今集に精通した女房を悉く召して白と黑との碁石で計算するやうにせられたとある。するとそれ等の女房も各一本に親しんだ時代があり現に自分の厨子棚には愛讀の一つとして持つて居なければならぬ。すればこの一つの記事だけによつても、已に數本の存在を立證するに足るではないか。枕草子では中宮定子が上記のお話の前に矢張多くの女官を召して、古今集の試を課して居られるから、こゝでも數本の古今集の存在を忖るには充分である。中宮の兄伊周は和漢の學に精しく古今